

---

# 永遠の時の中で

ファランクス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠の時の中で

### 【Nコード】

N3802W

### 【作者名】

ファランクス

### 【あらすじ】

世界を破滅に導いた戦争「魔核大戦」から二千年後、大戦前の高度な古代文明「ラスタード」を取り入れ人々は生き残り、再び国家を作り上げた。

余りに進んだ文明に、当初は世界に混乱と一部の繁栄を与え、それによって「魔法」や「機械」といった新たな概念が確立する。

そんな混乱もようやく収まったNC2109年。

大国「ギル・ラシアトス帝国」の帝都郊外に住むお気楽な少年アー

クは、ひよんな事から謎の魔法によって殺された父親の手がかりを  
発見し、仇を討つ旅に出る。

それが時空を揺るがす物語の始まりとなる……。

## 第1話「昼寝の邪魔をするな！」

NC2109年・ギル・ラシアトス帝国・帝都バートル・城  
下町はずれ

広い……。

もう、空がホント広い。

俺の視界全てを埋め尽くす空は、

……どんより灰色な雲で覆われていた。

ああ、そうだよ、思いつきり曇ってますよ！

だいたいなんだ！

さっきまでは快晴だったじゃねーか！

俺が講習抜け出した途端にこれか！

天よ！ お前までリードの味方をしようつてのかこんちきしょー！

これじゃこの昼寝の草むらのポイントも台無しだ！

「アアアーーークッ！！」

そして、その昼寝自体を台無しにするお騒がせが約1名。

残念だがここで奴に捕まる訳にはいかん。

俺は準お昼寝モードから0.1秒で全力疾走モードへテンション

を切り替え、即座に大地を蹴って駆け出す！

「待てエエー！！ 今日という今日は逃がさないぞー！！」

鬼の形相で必死に俺の後を追うのはリードという幼馴染の男。

なんのつもりか知らないが、俺に説得を試みようとする。

「バアアーカ！ 意地でも行くかよ！！」

俺は後ろを振り返り、ウザい笑顔を見せながらなんとか巻く方法を考える。

俺の脚力ではそもそもアイツを引き離すという事は万に一つもない。

ぶっちやけ、笑ってられる状況じゃねー。

なのにアイツは、

「そっちがその気なら」

地面から小石を拾い、

「でやっ！」

フルスイングで投げつけた！

見える……迫り来る小石が、見える 訳ねーだろっ！！

俺は迫り来る豪速球を見切るなんていう超絶スキルは持ちあわせていなかった。

「ほげえッ!？」

小石はそのまま俺のおでこに直撃し、意識はブラックアウトしていった……。

「……………」

「何気絶したフリしてるんだい？ 30秒以内に起き上がらないと騎士団権限で討ち首も考えるけど？」

「待て。それは早まり過ぎだろ」

俺は30秒どころか0.1秒で上半身をひょいと起き上がらせた。さすがに俺も死にたくは無いんでね。

「僕は考えると言っただけだ。それより、まだ講習開始まで10分ある。観念して受けることだね」

そう仁王立ち&腰に手を当てて倒れ伏せた俺を見下すのはリード・フェンネス。

俺と同じ18歳だ。

金髪&眼鏡、クールで真面目なイケメン君だ。

勉強、運動、その他もろもろなんでもできる天才野郎。

その上こいつは現在帝国騎士団の見習い騎士として生活している。成績は当然の如く優秀で、今季の見習い軍団の中の最精鋭だとか。

そして後になつたが俺はアーク・シュナイザー。

髪は真つ黒毛先はツンツンの自称フツアの少年だ。

リードと比べて出来る事と言えば、戦闘演舞くらいかな。

それでも別にリードに負けて困ることは無いので努力はしない。

「だいたい君は自分の未来に関する真剣さと言う物が足りない……。帝国騎士団の講習をせっかくとつてもらっ　ってアークツッ!!」

俺は奴の説教の隙をついてスイーッと抜け出そうとしたが、首根っこを掴まれて首が閉まる。

「ぐいいいいい……ぐるーじーい……」

「人の説教中に勝手に逃げ出さないでくれるかな……?　とにかく、講習には来てもらうからね……?」

眼が据わっていた。

本来リード・フェンネスという人間は温厚なのだ。

それがこうなると言う事は、要するにもう取り返しがつかなくなる訳で……。

リミッターが外れたリードが力を制御できず、当然俺よりも力は強い訳であつて……。

つまり、俺の意識はブラックアウトしていった。

いや、今度はマジで。

「いや、ハハ、リードさん、あざっす！」

俺は自宅のベッドで横になりながら、ニカッとムカツク笑顔を作り、リードに皮肉の礼を言う。

「う……君は……相当に嫌味な事を言うな……」

リードの野郎は頭を抱えながらため息をついた。

俺としてはしてやったりって感じなんだがとりあえずこの辺で今の状況を説明しておこう。

そもそも事の発端は、毎度の如くリードが勝手に騎士団の講習を予約しやがった事だ。

ようは顔見知りの正規の騎士に頼んで、剣術の指南をしてもらうって事だ。

これは一般の村人なんかでも予約すればできる、まあ一回限りの塾みたいなもんだ。

だがもちろん俺はそんなの更々行く気ないので逃走！

逃げる俺、追うリード。

とまあこんな構図になっているわけである。

リードが俺を締め落としたお陰で今回の講習には間に合わず、参加不可能となった。

リードは性格上それを自分のせいだと思っているので俺としてはラッキー。

「と、とにかく、つぎの講習には絶対参加してもらおうからね！」

意地でも俺を参加させる気らしい。

というのも、ようはいい加減に働け！ と言いたいのだコイツは。んで「俺は剣術が強いから騎士団行けばいいじゃん！」という安易な発想のもと、俺は何故か毎回勝手に剣術指南の講習を予約される。

でも俺は、そんなモノに興味はない。

「嫌だね」

だから即答してやったぜ！

「どうしてさ？ 君の実力なら騎士団幹部だつて夢じゃない。騎士団内部でも、君の実力に敵わない人間はたくさんいるとおもつよ？」  
それはない、と思う。

俺がそんなに強かつたらアレだよ、俺の親父なんて「誰も俺を止めることはできん！ フハハハハハ！」みたいな無双出来ちゃうよ。  
親父魔王になつちまうよ。

つて俺は何を考えてるんだ？

アホな事考えんのは止めて言葉を返す。

「知るかよ。俺はそんなめんどくさい事は嫌なんだよ。つーか、第一あんなでかい獲物持つて戦えるかよ」

まず嫌なのはそれなんだよな！。

騎士団の正式装備は長剣か槍とかで普通は決まっている。

だが俺の愛用武器は親父譲りで二刀流のダガーなのだ。

その戦闘スタイルに慣れたため、今更剣とか扱いづらくてマジ洒落にならない。

俺としては、ダガーの方が小回り利くし、軽いし、威力も十分だし、そんな長い武器に変える必要性が全く感じられなかった。

が、こいつは、

「君の武器が邪道なんだよ。君の戦闘センスなら絶対に刀剣を使つても上手くいく、だからもう一度騎士団について考えてみないかい？ 君ほどの戦闘センスを持ちながら、放っておくのはもったいないよ」

とか言つて執拗に騎士団の入団を迫ってくる。

俺はそんな気毛ほども無いのに、健気な事だ。

「それが駄目ならせめて仕事を決めなよ。母上も心配しているだろ？」

そう、学校は15歳で卒業だ。

ふつうは皆働き口を探してさまざまな労働者組合　ギルドに入団するか、もしくは帝都城内勤務、あるいは騎士団に入団するとか、なんかするのだが、俺はしなかった。



どの仕事も、興味が出なかった。

その為俺は今もこうしてフラフラしてるというわけだ。

まあ周囲が俺の事を何て言おうが気にしない。

これは俺の人生なんだからな。

「乗り気しねえ」

とだけ言つて、俺は家を出た。

「待ちなよ」

リードが止める。

「なんだよ。説教なら勘弁してくれ。絞め落とす気ならもっと勘弁してくれ」

「違うよ、一戦、どうだい？」

と言つてリードは不敵な笑顔を作り、腰にさした木刀に手を添える。

「よし、乗った」

俺も戦いが好きな訳ではないが、絞め落とされた代わりに倒してやるのもいいだろう。

## 第2話「破壊的天然娘と元気爆発少年」

前回のあらすじ……。

担当：アーク・シュナイザー

リードが就活の為に用意しためんどくさい演習を俺がすっぱかし、当然ぶちキレたリードはなんと俺を絞め落とした。そこまでするかっ！

怒り狂った俺は、リードに決闘を申し込むのだった。

「ねえアーク」

模擬刀を構え、真剣な表情で俺に何かを聞いてくるリード。

「なんだリード？」

「……あらすじ、微妙に、いやかなり改竄してるよね……」

真剣な顔が一転、一瞬で呆れ顔に変貌した。

「ははは、まあ気にするな。それより」

俺はその辺に落ちてた丈夫そうな小枝を2つ拾い上げ、

「やるぞ」

右手を順手、左手を逆手持ちに構えてそう言った。

「……相変わらず、舐められてるよね、僕……」

リードが目線を反らす。

「仕方ないだろ。訓練用の模擬ダガーなんて売ってないんだからよ。そう、下町には模擬刀しかないのだ。

不備な町だ。

「じゃあ、行くよっ！」

リードは俺に向かって一直線に走ってくる。  
俺は動かずその場で迎え撃つ事にした。

「はぁッ！」  
左側から水平に流れる剣が俺の胴体を狙って迫る。

「よっと！」  
俺は右方にジャンプで飛んで斬撃をかわすと同時に軽いステップで背後へ回る。

リードもそう予想していたらしく、ありえない反応速度で俺の顔を狙い模擬刀を突く！

「つぶねえ！」  
頭を右にずらしてなんとか避ける。

続けて左の小枝をリードの頭に向けて薙ぐ！

「甘いよ！」  
頭を下げてかわされたが、それこそが狙いだ。

「どうだかな！！」  
順手持ちの右手小枝で腹を突き刺すように振る！

「だから甘いつて！」  
ちっ、避けられた！？  
リードは後ろに飛んで攻撃をかわした後突撃してきた。

「決めるッ！」

右下に向かって斬り下げる！  
せっかくなので利用してやる！

俺は左上から迫る剣を身を引いてかわした直後、剣の背を小枝で思い切り後押し、地面に叩きつけた。

「な」  
剣は深く地面に突き刺さり、俺はその剣に左足をのせ、順手持ち

の右小枝でリードの首筋で寸止めた。

「うッ」

「はい、終了あゝ」

「やっぱり、君は強いね」

ため息とともに、リードは呟いた。

俺達は花壇の縁に座り、休憩していた。

「まあ、ガキの頃、親父に叩きこまれたからな……」

そう、二刀流のダガーという俺独特の戦闘スタイルは、親父から受け継いだものだ。

あれっ、さっきも言ったっけ？

「それなのに、騎士団にもギルドにも入らない。まったく……もっ  
たいたないよ君は……」

また、ため息とともに片手で顔を覆うリード。

「まあそう落ち込むなよ。毎日鍛錬してるんだから、お前もいつかは俺に勝てる日が」

「あのなあ君は馬鹿か？ 馬鹿だよな？ 今はそういう話をしてるんじゃないだろ。僕は君の将来が心配でなあ……」

まずい、このままじゃリードのお説教タイムが始まってしまう。

「はいはい。その話はまた今度な」

とりあえず適当に流しとくか……と思って振り返ったら、目の前に見知った顔が2名。

「まあ、2人つたら、またケンカしてたの？」

そう言っつて、腰に両手をあて「プンプン」という効果音が出てき  
そうな勢いで怒るこの女は、エルアス・ミルドという女。

「ケンカじゃないけど……アークが勝手に騎士団の講習をサボった  
んだよ」

リードはエルに事情を説明する。

「違いよコイツが勝手に予約なんて取るからだろうが！ だいたい  
だからって絞め殺す勢いで来ていいのか!？」

俺は負けじと反論してやる。

「君はこうでもしないと行かないだろ？　っていつか、そこまでしても結局来なかったけど」

「うおい、さっきまでの罪悪感はどうしたとつつこもつとしたら、

「こらー！！　また目の前でケンカしないのっ」

「そーだそーだっ！　エルねーちゃん困らすんじゃないよっ！！」

エルと一緒に来たガキがそう言った。

「はいはい……で、騎士団の課題は終わらせてきたのかい？」  
リードが尋ねる。

そう、彼女（俺達はエルと呼んでいる）も実は、見習い騎士団の1人なのだ。

年齢は俺達の1コ上の19歳、ピンク色の綺麗なショートカットで、とにかくドジだ。

容姿は綺麗でスタイルもいいのだが……性格が全てを無残なまでに破壊している気がする。

その隣にいる少年はダイチ・ジウドウ。

14歳で落ち着いた銀髪の髪とは正反対に活発で元気なクソガキだ。

エルは子供に好かれる特性があるようで、『エルの自称子分』を名乗っているうちの1人だ。

「うんうん、原稿用紙10枚分の反省文、とつても大変で疲れちゃった」

「じゅ、10枚分！？　今度は一体何やらかしたんだ！？」

先日は確か落し物を探そうとして他人の家に無断侵入（しかも土足）して5枚分だったな。

「バルードの討伐を頼まれたんだけど……」

そこから先はリードが代弁した。

「町の外の畑に侵入した2匹の『バルード』を討伐するために、魔法を使って畑3つ分を滅ぼしたんだ……」

「……まじかい」

『バルード』とは魔物の1種で、狼のようなものだ。

「いや、あはは、あんまり逃げ回るもんだからつい連発しちゃって、気がついたら畑が無くなってたんだよっ！」

「はぁ……………」

「はぁ……………」

俺はリードと目を合わせ、同時にため息をつくのだった。

### 第3話「起こし方ってモンがある」

前回のあらすじ……。

担当：リード・フェンネス

なんとなくアークに勝負を持ちかけたが、やはり彼は強い。彼の剣術の腕前は天性のものであると同時に、昔父親に教わったものらしい。

とにかく、それだけ素晴らしい才能を持っておきながら未だふらふらしてるアークはどうかしてるよ……。

そんな事を考えていたら、エルとダイチ君がやってきた。

どうやら先ほどアークを追っている所を見られたらしい。

彼女は平和主義者だから、止めに来るのは分るんだけどさ……。せめてもう少し、騎士団の任務を忠実にこなしてくれよ……。

翌日・朝・アークの家

「アアアークッ！！」

「のうわああッ！！　なんだよ、いきなり起こすなよ……」

俺は、情眠を貪って

いるときいきなりリードに叩き起こされた。

時計を確認すると。

「つたく……ゲ、まだ朝の7時じゃねえか……おやすみぐう」

「おい！　アアアークッ！！」

「のうわああッ！！　なんだよ、いきなり起こすなよ……おやす

」

「おいしいいいいい！！ 無限ループかい！？ どんだけ寝起き悪いんだ君は！！ 知ってたけど！！！」

リードはややキレ気味で寝ぼけた俺の胸倉を掴んできた。

「ぐうーるうーじいーいいいいいい！！ 分かった！！ ゴメン！！ 起きる！！ 起きるから絞め落とさないでええええ！！！」

キリキリと喉が閉まってゆく感覚に生命の危機を覚えながら俺はリードに言った。

リードの目は据わっていた。

「はあ、はあ、やっと起きたね……」

「ざっけんな！！ なんで朝一で絞め落とされる寸前になるんだ俺は！！！」

「君が起きないからだよ！！！」

「だからなんで起こすんだよ！！！」

とここしばらく不毛な争いを繰り返していたら、部屋に誰かがやってきた。

「おはようアーク。さ、2人とも、朝ごはんにするわよ。今日は久しぶりにお父さんが帰って来るからね？」

このやけにおっとりした女性は、リードの母親で、ミア・フェンネスという。

その言葉を聞いて、俺とリードは寝室から居間へと向かった。

「……いただきます……」

朝食を取る。

さて、なんで俺が兄弟でもないのにフェンネス家で食事を取っているか疑問に思うだろう。

実は、俺の両親は8年前に死んでいて、それ以来元々幼馴染だっ



たリードの両親に厄介になっているのだ。

サラッと重大報告。

「んで？ 結局なんであんな叩き起こし方したんだよ」

俺はトーストをかじりながらリードに聞いた。

「言っただろ？ 今日は父上が帰って来る」

「お父さん、怒ると怖いものねえ」

リードと母さんが口をそろえて言う。

「あー……あゝ、そう言う事ね」

俺は納得した。

名前はロード・フェンネス。

職業はなんと帝国騎士団、帝都即応艦隊の中佐様だ。

と言つても俺には何の事か分かんが、とりあえず結構偉いらしい。

偉い！多忙って訳で、殆ど家に帰って来る事は無い。

たまに別の都市に遠征に行くてくる事もあるみたいだし。

「いつもの時間まで寝てるの見つかったらアーク、タダじゃ済まないよ。あと僕もね」

そして、父さんは怒るともうものつすごい恐いのだ。

だてに騎士団纏めている訳ではないらしい。

そして、前回俺が情眼をむさぼる姿を見た時は、連帯責任としてリードごと1時間半正座で説教。

その後父さんとタイムマンで剣術指南をされた。

リードは貴重な機会に生き生きしてたが、俺は屍のようだったと言っ。

「あのなあ……だからつてもうちよいデリケートな起こし方出来ねーのか？」

俺は絞め落とすという方法を取ったリードに疑問を持つ。

「こんな派手な起こし方でも全然起きなかった君が何を言う」

「むう、それに関しては返す言葉もない」

が結局負けた。

「だいたい君はどんだけ寝てるんだ。かと思えば昼寝もするし。一日の大半寝て過ごしてるんじゃないか？」

「寝る子は育つ！」

俺は光の速さで言い返す！

「母上……なんか言ってる……」

「アークもことわざ知ってるのねえ」

「母上えええええ！？」

「冗談よ冗談、うふふ」

「ただいま」

そんな感じで談笑していると、父さんが遂に帰ってきた。

リードの金髪は父さん譲りなのか、父さんは金髪のオールバックだ。

騎士団らしいがっしりした体つきで、目は意外と鋭い。

睨まれると超怖い。

まあ恐いけど、別に俺もリードも母さんも嫌っている訳ではなく、基本的にはいい人だ。

「あら、おかえりなさい」

「おかえりさない、父上」

「おかえり〜、おお、なんか背え伸びたんじゃねえの？」

俺達3人が父さんを迎える。

「馬鹿野郎、それはこっちの台詞だろう」

俺に向かってそう言いつつ、食卓に並ぶ。

「いただきます。……そう言えばアーク、お前今日は起きてたんだな」

前回は思い出して俺を見る父さん。

「あ、ははははは、あれから改心してな、うん」

俺は目をそらしながら空笑いする。

「だといいんだがな……んで、まだ職も見つけずフラフラしてんのか？」

「う……まあそんな感じだけどさー……」

「父上からも何か言ってやってくださいよ。コイツったら寝てばかりで……」

リードがしまった！　と言わんばかりに口を塞ぐ。

「……なに？　まさか……お前まだ昼まで寝る癖が治っていないのか？」

父さんの目が厳しくなった！！

この目は不味い！！

「そう言えばお父さん、今回はどのぐらいまで休みなんですか？」  
母さんナイスアシストッ！！

「まあ3日くらいは休める予定だ。その次の長い休みは多分……3ヶ月後あたりになるんじゃないかな」

やはり中佐クラスにもなると多忙も多忙らしい。

もつとも騎士団関係に特別詳しくない俺には、偉いんだーって位にしか分かんが。

ちなみに誤解のないように捕捉すると、別に休みなしで働いている訳ではない。

ちゃんと非番の日もあるらしいが、ただ緊急の時の為に、こっしり帰って来られる日は少ないという事だ。

そんな感じで朝食を終えると、来客が訪れた。

コンコン、と入口のドアが叩かれる。

「はいはい！　今行きますね」

近くにいた母さんが出迎える。

誰が来たのかなーと居間に居ながら耳を傾ける。

「おはようミーアさん。ちょっと2人借りてもいいですか？」

「ええ喜んで。アーク、リード！！　鍛冶屋のロータスさんが来るわよー！！」

その声を聞いて俺達は玄関へと向かった。

そこにいたのは、鍛冶ギルドの主人、ロータス・ジウドウだ。

日焼けした剛腕が一番の特徴で、頭に巻いた赤いバンダナがトレードマークだ。

「おお、おっちゃん！ どうした？」

「おはようございます」

俺とリードが玄関へ行く。

「うおっ！ アーク！？ お前がこの時間に起きてるとは……」

おっちゃんは信じられないという顔をしていた。

まあ、この時間に俺が起きてるのはほぼ奇跡に近い。

「あ、はは、今日は父上が帰ってきましたからね……」

「ん？ なんだ？ ロードの野郎もいんのか！？ 丁度いい！  
一緒に来てくれ！！」

おっちゃんと父さんは、年が近いせいか結構仲が良かった。

「つか父さんと俺ら2人って……間違いない力仕事だ……」。

「はいはい、今呼んできますよ。お父さ〜ん、ロータスさんが呼ん  
でますよ〜」

母さんは父さん呼びに行った。

「それで、こんな時間にどうしたんですか？」  
リードは尋ねた。

「いやな、この前の台風でサーマルさん家の屋根がふっ飛ばされち  
まってるよ。その修理を手伝って欲しいんだわ。お前らは木材運ぶ  
だけで良いからよ」

実はつい2、3日前、ちょっとした台風が直撃してしまったのだ。  
大したことは無かったのだが、運の悪い事に近所のサーマルって  
じじいの家の屋根がぶっ飛んだという話だった。

そして城下町と言っても、ここはその外れの方。

規模は貴族街に比べれば相当小さいもので、そういう事に関して  
はどうしても人手が足りなくなってしまうのだ。

「なるほど。話は聞いた。俺に役立てる事があるなら手伝おう」

父さんも修理に参加することとなった。

「げーめんどくせ。おっちゃん、ちゃんと報酬出るんだろうな？」

俺は両手をだら〜んと垂らし、身体で参加拒否を示しながらも一  
応見返りを聞く。

城下町外れのここは、人口はとっても少ない。

雰囲気と言うなら城下町、というよりその辺の村といったほうが適切だった。

別の町から大工ギルド雇うよりも、みんなで頑張ったほうが安上がりなのだ。

技術的にも、ロータスさんや村のみんなで事足りるし。

そんなわけで、実は俺ら2人は結構ロータスさん達に呼び出されることが多い。

つつーか、リードとエルは騎士団見習いで居ないことが多いから、殆ど俺だけだ。

「仕方ねえな。明日、商業区の宿屋でなんか奢ってやるよ」

おっちゃんはやや苦笑いしながらそう言った。

やったね！

この世界で宿屋と言えば、雑貨屋や飯店も大抵兼ねているもんだ。そんな感じで俺達は家の補修作業に向かった。

## 第4話「サーマルじじいの家の修理」

前回のあらすじ……。

担当：アーク・シュナイザー

俺が極楽な安眠をしていると、突如それを妨げる悪魔が現れた。悪魔の名はクソリード。

そいつはあるうことがイキナリ俺を絞め殺しにかかった！

ちよ、おい、てめえマトモな起こし方できねえのか！？

え？ 俺が起きないからだって？

はいそうですねーすみませんねー。

つてのは置いといて、父さんが帰ってきたらしい。

確かにそりゃ起きないとやばそうだ。

そんな感じで朝食を取っていると、ロータスのおっちゃんから雑用仕事の依頼が……。

うわー、クソ行きたくねえー。

まあメシ食わせてくれるって言ってるし、仕方ねえ行くか。

「もー、遅いよ2人とも！」

サーマルじじいの家に行く。

そこには何故かエルとダイチが居た。

「げ！ エル！？ 何故に！？」

俺は腰に手を当てて怒るエルを見て言った。

「エルも一応騎士団見習いだからな。なんか手伝うって言って聞か

なかつたんだ……」

と言うとおつちゃんはため息を吐いた。

うん……断りたい気持ちは分かる。

役に立たなそうだしな。

「アーク……？　今あなたすつごく失礼な事考えたでしょ……？」

エルが背後に黒いオーラを漂わせながら聞いて来た。

「いやいやいやいや！！　誤解だ誤解ツ！！」

俺は両手をブンブンを振り回し必死に身の潔白を証明する。

コイツの手には杖。

そしてこの女は意外と手が早かったりするのだ。

「むう〜っ！　アーク兄ちゃん酷いや！　そんなだからいつつも

寝ぐせなんだい！！」

そしてこのガキ、ダイチは俺の頭を指して意味の分からない事を言う。

「お前はうるせえクソガキ！！　これは寝ぐせじゃねえこっぴど髪質なんだよ！！　それにお前だってアホ毛立ってるじゃねーかアホ野郎！！」

俺は反撃としてダイチのアホ毛を指さした。

「ふん！　僕は子供だから許されるんだぞ！　アーク兄ちゃん僕より年上の癖に大人げない、うわ〜、恥ずかしい〜」

ダイチは口に手を当てて非常に殺意を湧きあげる笑顔で笑いをこらえる。

「ぶつ殺してえ……激しくぶつ殺してえ……」

俺は湧きあがる殺意をワナワナと拳を握ることで何とか押さえた。

「アーク……大人げないよ、子供相手にそんなにムキになるなんてリードは毎度の如く溜め息を吐きながら言う。

「そうだよアーク。手を出したら駄目なんだからね？」

エルもそう言う。

「いや正直お前にだけは言われたくない。つーか俺まだなんもしてないのにひでえ……」

自分の扱いに疑問を持った。

「ほらほらお前ら！ ぼさつとしてないでとつとと手伝え！ ってダイチ！ なんでお前までいる！？」

おっちゃんは催促すると、ダイチが居る事に気付き驚愕。

「俺だつて父ちゃんの手伝いしたいんだよ！ それに家に居たつてすることないし！」

そう、実はダイチはおっちゃんの息子なのだ。

「つたく、誰に似たんだか……って俺か。まあいい。怪我と邪魔しない程度にしるよ。エルもな」

「はい」

ダイチは満足気な顔で返事をするが、

「なんで私はダイチと同じ扱いなんですか！？」

と不満げに顔を膨らますエル。

補修作業がある程度進んだ時、

「みんなお疲れ様。頑張ってる？」

両手に沢山飲み物が入ったカゴを持ってきた橙髪の男がやってきた。

ファルト・ミルドという人で、なんとエルの父親さんだった。

笑顔を絶やさないいい人だ。

とてもあの破壊的な天然ちゃんの親父とは思えない。

ちなみに職業は確かロシアトス城の研究者だそうだ。

「おおファルト、仕事は終わったのか？」

父さんが声を掛ける。

「ええ。本日はたまたま早上がりのシフトだったもんで、ついでに差し入れを持ってきたよ」



そういつつ、エルの親父さんは皆に飲み物を配っていく。

「良く言うよ。あんたつては最初はノド乾いた〜、ってあたしんト  
コに駆け込んできただけのくせに」

少々不満の混ざった声で、ミン・クライトンというおばさんが声  
を掛ける。

おばさんはこの“村”の宿屋ギルドの店主を務めている人だ。

この人も結構人遣いが荒く、俺はよく宿屋の皿洗いとか掃除をさ  
せられてる。

「たはは、それを言うなよ。ところで、エルの方は役に立ってる？」

ファルトさんは苦笑いを浮かべながらおっちゃんに聞いた。

「ちよつとお父さん〜！ それじゃまるで私が役に立ってないみた  
いなんだよ！」

エルが不満MAXの声で言うが、

「ははははは、まあ頑張りだけは認めてやってもいいぜ！」

おっちゃんのセリフを聞いて少し大人しくなった。

「おいアーク、ちよいとお使い頼むぞ」

そんな中、父さんが俺に言った。

「あ〜？ もう疲れたんだけど……何？」

俺は非常にめんどくせえ！ と思いつつも内容を聞く。

「レンガを20個程商業区から貰ってきてほしい。金は既に払って  
あるらしいから、そのリヤカー使って行ってくれ。ロータスの名  
前を出せば分かるはずだ。頼んだぞ」

と父さんは言い、その店の場所が書かれた地図を渡した。

帝都は、まあ帝国の都というだけあって広く、大きく五つの区間  
に分かれている。

まず中央の帝都城。

まあ城だ、皇帝やら騎士団やら国のトップが居るが、まあ庶民の  
俺には関係ない。

次に貴族街。

そのまんま、綺麗な町並みの貴族の街だ。  
一般庶民もいけるが歓迎はされない。

3つ目工業区。

工場が所狭しと並んでいる。

鍛冶ギルドのおっちゃんの工場もここだ。

4つ目商業区。

俺達が今いるところ。

商店街などこっちは商業ギルドの激戦区でにぎわっている。

最後5つ目城下町。

帝都の一般庶民はここで暮らしている。

俺達はその城下町のさらに外れの”村”というべき人口の少ない  
ところに住んでいる。

と考えていたら、父さんが去り際に言った。

「ああ、ここにレンガを置いてつたらもうお前らは休んでいいら  
しいぞ。後はこちらで何とかする」

俺は一気に元気が回復したかと思った。

「よし行ってくるわああ!!」

「で……」

俺は横目でちらりと見る。

「なんでお前らまでついてくんだよっ!」

俺が見ていたのはクソ真面目優等生リード、破壊的ドジ娘エル、  
元気爆発少年ダイチだ。

「僕は新しい模擬刀をついでに購入するためって言ってるだろ?」

「思っくそ私用じゃねえか!!」

まあ別にコイツは良いんだけどさ……。

「私だつて2人じゃ大変だと思つてついて来たんだよ」

「オイラはエル姉ちゃんが行くならどこだつていくよっ!」

元氣よく主張する2人。

「つーかエルお前! 完全にレンガ積み終わった後に来てんじゃねえか!」 お前はタダのサボリだよ!」

そう、リードはちょうどレンガを積み終わりに辿り着いたのだが、こいつら2人は完全に出遅れていた。

「タイミングを間違えたただけだもん!! 本当は手伝おうと思つたんだもん!」

ブンブンと杖を振り回す。

「分かつた!! ごめん!! 分かつたからやめてくれ!!」

俺は不本意ながらリヤカーを引きながら上半身のみで杖をかわすという凄技を披露。

「つたく……なんであんな大人しそうな親父さんからお前が生まれてきたんだよ……謎すぎるだろ」

「あはははは、私は母親似だつたからね……」

エルは暗そうな声で言つた。

ゲ、マズイ。

エルの母親は幼い頃に失踪してしまつたんだっけ!

この話題はタブーだつた!!

「……アーク」

「……アーク兄ちゃん」

2人が睨んで……。

うんさすがにこれは俺が悪かつたな。

「いや、エル悪いな。そんな気じゃあなかつただけださ」

「え!? いやいや別にいいよ、今さら気にしてないし! あれから5年位たつけど、未だにどこに行ったのか分ないし」

エルは全く気にしてないような素振りをしたが、うむう、気まずいぞ。

確かエルも今言ったとおり失踪したのは5年前。

その時のことは俺も覚えている。

夫婦仲が特に悪かったわけじゃ無さそうだが、ファルトさんに聞いても“気にするな”の一点張りらしい。

その様子だと、ファルトさんは何か知ってそうなんだがエルにすら教える気はないらしい。

帝国騎士団に搜索願いを出そうとしても、ファルトさんが断ったらしいから、心配はないんだらうけど……エルにしてみればやっぱり気になるよな。

「つと、ここだよアーク」

リードは足を止めた。

俺の目の前には『ギルド・ソーサリーファーク』と言う名の建物が建っている。

ここで気まずい空気を変えなければ。

「うっわー、相変わらず、おっきな建物だよなー」

エルがビルを見上げて呟く。

その建物は、“コンクリート”という素材で出来た”ビル”というヤツだった。

「確かに、ここ数年で商業区も姿を変えたものだね」

リードはそうつぶやく。

「3年前に遺跡が見つかったのよねー？　確か……ダコール遺跡だったかなー」

エルは顎に手を当てて記憶をたどっていた。

「コダール遺跡だよエル……君あんなに真面目そうに座学受けてたのになんで覚えてないんだ……」

片手で顔を覆うリード。

なんだっけそれ……と俺は学校で習ったことを思い出してみた。

ええと、確か今から約二千年ぐらい昔の話。

世界をドーンと覆う戦争が発生したそうだ。

名前は『魔核大戦』。

その頃の文明は現代を軽く上回ってたらしかったが、それだけに兵器も強力だったそうだ。

つまり世界を破滅に導く戦略兵器が何個も投入されて、世界は見渡す限り廃墟だらけに変わってしまったんだとか。

んで、戦う力も意味も無くなってから戦争はようやく終わったらしい。

ただそれでも人類はしぶとく生き残り、残された僅かな文明を駆使して使ってきたようだ

その頃の文明の欠片を、現代の俺達は『<sup>ラスト</sup>古代文明』、遺跡の事を『<sup>ベース</sup>古代遺跡』って呼んでいる。

「確か<sup>ベース</sup>古代遺跡って、魔核大戦が起こる以前の軍事基地みたいなもんなんだっけ？」

俺は学校で習った曖昧な事を優等生クンに聞く。

「そうだよ。まあ基地だけじゃないけど、今じゃそこが<sup>ラスト</sup>古代文明の吸収目的で開拓されてるんだ。この帝都も、近所に<sup>ベース</sup>古代遺跡が見つかってから急激に変わったしね」

リードは周囲を見渡す。

「この多層構造の建物だって、あっちの<sup>ラスト</sup>“コンクリート”だって、空を飛ぶ船”空駆船”だって、全部『<sup>ラスト</sup>古代文明』の恩恵らしいよ」  
リードは辺りを見回しながら言った。

「なんつーか、古代のほうが進んでるってのもおかしい話だよな」  
最初に見たときは、なんだか未来の技術を取り入れているような錯覚を覚えたからだ。

「一度世界は滅んで、文明レベルが著しく低下してしまったんだよ」  
高く積んだ積み木を、一度全部崩してしまった状態か、と俺は頭の中でイメージしたが、あまり分かりやすいたとえじゃなかったの  
で口に出すのはやめておいた。

馬鹿にされそうだ。

「そうは言ってもよお、俺達の住む町外れにやそれらしいモンひとつもねーけどな」

現に、荷物の運搬方法はリヤカーというクソ不便なものを使わなくてはならない。

建物だって、木造二階建て以上の建物は無いし、コンクリートなんて訳の分からんもんじゃなく、石や木が主な建築材料だ。

「それは仕方ないよ。『ラストワード古代文明』は貴重だから、こうして町の中心部でしか使われてないんだ」

俺の不満をなだめるように言った。

「にしても、なんつーチグハグな町だよホント。その『ラストワード古代文明』  
つてのが早く浸透すれば良いのにな」

まるで現代と未来の技術を無理やりごっちゃ混ぜにしたような町だ。

いや、本当は過去の技術だけでも。

「それは多分、難しいね」

リードは言った。

「なんでだよ」

「ラストワード古代文明っていうのは、実は全然解明されていない。未知の技術なんだよ。学校で習っただろう？」

俺は寝てたから知らん。

クソ真面目優等生と一緒にするな！

「解明してないものを使えるって言うのもすごいよねー」

エルがのんびりとした口調で言う。

「学者達の努力で、原理は分からなくても使い方は分かる。そんなものだろうさ」

「結構適当なのな」

「学者みたいに頭が良すぎると、案外単純な結論に達するもんなのか。」

まあそんな小難しい話はおいとして、俺達は階段を上り、3階の武器屋を目指す。

ちなみに、俺のここでの目的は模擬刀ならぬ模擬ダガーが無いかチエックだ。

「むむむ……」

しかし、ダガーなんて盗賊しか使わないような武器の訓練用の物なんてそう簡単にあるはずはない。

「はあ、アーク、いい加減諦めなつてー。小枝でもリードに勝てるんだからいいじゃないのー」

とエルは俺の肩に手を添える。

この世界では二刀流ダガーを武器に戦うのは非常に珍しいらしく（いや、世界中を旅した訳ではないのでこの帝都だけという可能性もあるが）大抵護身用のナイフとかに間違えられるくらいだ。

「でもよお、小枝つてすつげーやりづれえんだよな。できればちゃんとしたの欲しいんだけどな」

それでも俺がダガーを使い続けているのは、これが親父直伝の戦闘スタイルだったからだ。

それにこのダガーは、俺の10歳の誕生日に、プレゼントとして亡き親父から貰ったものなのだ。

簡単には手放せない。

ちなみに俺は、本当の父親のことを「親父」、リードの親父のことを「父さん」と一応使い分けていたりする。

そんな俺を尻目に、リードはちゃっかり目的達成し、俺達は武器屋を出た。

「さて、それじゃあ帰るとするか」

俺達は、踵を返して帰ろうとした。

「え？ 私の用事がまだじゃないの」

エルはキョトンとした様子で立ち尽くす。

「む、エル姉ちゃん用の事忘れるなんてひどいや」

ダイチはむくーっと頬を膨らます。

「いやいや、そもそもエル用事なんて無かっただろ！」  
無茶苦茶な冤罪だ。

「今出来たのよ。せっかく商業区まで来たのよ？ 買い物しましょ  
！ か・い・も・の！」

「「ッ！！！」」

その瞬間、俺とリードは事の重大さを把握した。  
まずい。

エルが買い物……それはすなわち食料品。

これはなんとしても阻止しなくてはならない！

「おつと済まないが用事を思い出してね！ 後は2人で買い物を楽  
しんでくれたまえ！」

「僕はあのおれだ。騎士団の用事があるから、今日はこれで！」

俺達2人はリヤカーを放棄して猛ダツシュで逃走を図る。

そう！

荷物持ちたる俺らがいなければ、最悪の自体は回避できるのさ！  
だが

「ぐええ！」

「ぐええ！」

希望は儂く散った。

エルが左手でリード、右手で俺の後ろ首筋の服を引っ張り、逃走  
を阻止する。

そしてグイッと引っ張って顔を近づけ、

「私達、『友達』だよね？」

と恐ろしい笑顔で脅しつける。

「「は……はいい……」」

結果、俺達は負けた。



数時間後、リヤカーにはレンガの他に……。

レタス、白菜、キャベツ、キュウリ、トマト、リンゴ、ミカン、バナナ、豚肉、鶏肉、魚、胡椒、生クリーム、バニラエッセンス、フライパン、ナベ、窯、e t c、e t c、e t c……。

一体何を作る気なんだよオォー！

第5話「『うまい！これならいくらでも食える！』とか言う奴いるけどホントに

前回のあらすじ……

担当：アーク・シュナイザー。

早朝6時。

リードが力任せに俺の事を叩き起こしてきた。

殺そうと思った。

まあ、そんな感じで朝を迎えると、今日は父さんが久々に返って来るらしい。

そんな時、おっちゃんが家を訪ねて来て、俺達は作業の手伝いをすることになってしまった。

めんどくせえ。

最後の仕事である買い物を終えると、エルが暴走し、食材を大量に買い込んでしまう。

エルの家

「あのさアーク……」

リードは汗を流しながらじつと前を見つづけている。

「なんだいリード君……」

「逃げちゃダメかな？」

「それは俺も思っていた」

そう、俺らは今、エルの家を監視

ゴホン、招待されていた。



俺らの声が一致した。

そう、こいつ、ドジっ娘な割には手先は器用で料理は実際上手い。上手いのだが……目の前の料理は軽く10人前を超えている。

これを……2人で食べと？

ちなみにダイチは2皿程食って戦線離脱するので戦力には入れてない。

そして、残すとエルの魔法が炸裂し、大変な　もうそれはそれは大変な、ホント身も凍るような　事になるので、完食が原則だ。

「さあ、2人の為に作ったんだよ！　思う存分どうぞー！」

そして、この笑顔に偽りは無い。

これだから、天然つてのは厄介なんだ……。

俺らは修羅の道へと突入した……。

## 翌日

アーク達は、その日の夕食をそう言う形で終え、次の日の朝を迎える事になる。

この日リードは、騎士団へ訓練を受けに行かなければならない。

もちろんエルも一緒だ。

リードとエルは今町外れを抜け、町の中心にあるラシアトス城を目指していた。

道中、他愛のない会話をしていると、リードの腹がぐぎゅううう

……と鳴る。

「あれリード、お腹減ってるの？」

「違う……昨日の“アレ”で消化不良を起こしているんだよ……と  
いうか、しばらく何も食いたくないんだが……」

エルの質問に脱力しながら答えるリード。

それに対し、むくむくと膨れるエル。  
そんな会話をしながら城を目指す。

そうして、ふと上を見上げる。

そこに見えるのは目的地、

ラシアトス城。

この町の中心部に位置し、ギル・ラシアトス帝国を纏める総本山。同時に、この国の剣ツルギ、帝国騎士団の本部を置いている所でもある。その全景は、まるで彫刻された巨大な美術品のような印象を受ける。

美術品のように見せかけて、実は数十もの収容式の対空砲が、上空に目を光らせていたりもするのだが。

そう、忘れてはならない、ここは政治の中心地であると同時に軍隊の中心地でもある。

この城の裏側は海になっており、そこには数百を誇る『帝国騎士団・帝都即応艦隊』の本拠地となっている。

そしてリード達は、その隅っこにある『帝国騎士団・養成部隊』に所属している。

まあ、実際は見習い見習いと言われる事が多いのだが。

正門をくぐり、煌びやかな内装の廊下を歩き、ドアを開け、更衣室に入り、城内待機服を身につける。

まあ、仕事で言う制服のようなものだ。

「ようリード、おはよ」

声を掛けてきたのは、同じ小隊の仲間であるユウだ。

「おはよう。昨日のロウ隊長の扱きはどうだった？」

リードは何気なく声を掛ける。

昨日、剣術評価で一番低かったユウは、小隊長であるロウという男に居残りで扱かれていたのだ。

「聞くなよ……思い出しただけで筋肉痛が……」

あたたたた、と太ももを押さえて顔を歪ませた。

ユウはリードの2つ上、20歳の男だ。

比較的がっしりとした体つきをしているが、ロウ隊長曰く剣筋が荒いらしく評価はあまり高くない。

リードと違い工業区の出身で、家は日用品を製造する工場らしい。「ユウったら昨日グラウンド30周もさせられたらしいよ？ロウ隊長も鬼だよね〜」

そう男にしては少々高い声でしゃべるのは、ナツドという少年。こちらはリードと同じ年で、リードよりも少し背が低くて小柄だ。出身は貴族街だが、特にリード達庶民を見下しているような事は無い。

「さ、30周？ うう……私そんなの絶対無理だ……」  
それをやり遂げたユウを見て、エルは脱力する。

「それに比べてリードはすげえよな。コイツなんでもできるもん」  
ユウがリードを嫉妬の目で睨む。

リードは優等生で、全ての項目で高評価を得ていた。  
「なんでもという程じゃないよ……僕だってまだまだ未熟な部分はたくさんあるさ」

褒められて照れ臭いのか、苦笑いしながら答えるリード。

「も〜、リードが言っても自慢にしか聞こえないもん！」  
そして、一番の落ちこぼれ……と言ってはかわいそうだが、それはエルになる。

治癒魔術師の癖に、攻撃特性が強すぎるらしい。

例えば、バルード退治の時のように、魔法を連射して畑を破壊したり……。  
そんな感じで、一行は着替えを終え、今日座学がある教室へ向かう。

「おう、全員来てるな？ ユウ、体の調子はどうだ？」

教壇に立つ中年の男の名は、アルバート・ロウ軍曹。

騎士団養成部隊・第11訓練隊の隊長だ。

当たり前だがユウ以上にがっしりとした体つきで、リード達の教官を務めている。

「聞かないでください……考えただけでも筋肉痛の痛みが……」

ユウは顔をしかめながらなんとか答える。

「ハツハツハ！ 今日が座学で良かったなお前！」

腰に手を当てて大笑いするロウ。

そうして今日の講習が始まっていく。

「 という様に、遺跡から発掘された兵器は通常、『古代兵器』<sup>レイズ</sup>という名で呼ばれる。まあこの辺は基本中の基本だし、さらっと復習でもしておこう」

ロウは教本を片手で持ちながら、黒板に文字を書いて行く。

「古代兵器はその兵器特性で分類されている。魔法詠唱兵器、能力<sup>セカ</sup>操作兵器、<sup>レイズ</sup>体外装備兵器、<sup>ファストレイズ</sup>身体変形兵器、<sup>ファイブレイズ</sup>元素召喚兵器の5つだ」

ロウは黒板にその5つを書き写す。

かんかんかん、とチヨークが黒板を叩く音が良い感じに静まり返った教室に響く。

「まずは魔法詠唱兵器。簡単に言えば、魔法を扱えるようになることでことだ。もちろんこれはあくまで分類上だから、この中にさらに多くのレイズが存在する。火属性魔法専用のファイアマジックや、水属性魔法専用のアクアマジックなんかはポピュラーだな。エルの持っている、天聖回復魔法に特化したヒールチャージャーと、ナツドの装備してる風属性魔法のウインドマジック。この2つは魔法詠<sup>ファス</sup>唱兵器に分類されるぞ」

黒板に書かれた魔法詠唱兵器、の下に例：ヒールチャージャー・ウインドマジック、と付け足す。

「次に能力操作兵器。例えば、運動神経を高めたり、体力を増加し

たりってヤツだ。代表的なのはリードとユウがもってる剣術向上のインファイター。その他に射撃能力向上のガンファイター、体力増加のスタミナアップとかもあるな」

セカンドレイズの下に、同じように例を書く。

「3つ目は体外装備兵器サードレイズ。まあ要するに体の外に装備するレイズって事だ。例を上げると炎属性の剣フレイムソードや、地属性のライフル、ロックランチャーなどがこれに当てはまるな」

黒板に、同じように例を書いてゆく。

「4つ目。身体変形兵器フォースレイズだ。体の一部を違う物質に変形させる事だな。まあこの辺になって来るとピンと来ないだろうが、例えて言うなら腕を剣に変えるソードチェンジ、腕を魔物の腕にするアームドゾークなどが上げられる」

教本をめくり、次のページの移る。

「最後だ。元素召喚兵器ファイブレイズ。意味は魔法生物を召還するレイズだ。魔法生物つてのは、8大元素である地、水、火、風、雷、闇、光、天それぞれに多数存在する元素集合体の事だ。まあ厳密に言えば生物じゃないんだけどな。例えば火属性にはサラマンダー、マグエイト、フレランサ等が存在する。得意な攻撃はそれぞれ違うけどな。ああそれと、身体変形兵器と元素召喚兵器は結構レアで中々お目にかかれない。見つけたら記念に写真でも撮っておくんだな」

ロウは軽く冗談を言っただけで微笑む。

「あと、レイズつてのは使えば簡単に強くなるって訳じゃない。よそのレイズを使いこなすには『同調』という作業が必要になって来る。まあ作業と言うより、ただ使っただけで慣れるって事だ。レイズと使用者がどこまで同調出来るかによって、使える技や術が増えていくって仕組みだ」

ロウはチョークを置き、教本を机に置いて話を進める。

「じゃあ、長く使えばそれだけ強くなれるって事ですね」

ナツドがロウに向かって呟く。

「実はそうでも無くてな、ただ長く使えばいい、ただ強い敵を倒せ



ばいい、とかそんな単純じゃ無いらしい。まあこの辺は感覚的な問題なんだが、ようはどこまでレイズと一心同体になれるかって事なんだ。理解はしなくていいさ。世界中の学者もこの謎は解明できてないんだからな。さてまあ、これでレイズの説明は以上だ。何か質問は？」

ロウが聞き、教室を見渡す。

と言つても4人しかないが。

はい、とエルが手を上げる。

「あのー、私のレイズって杖の形してますよね。それって、魔法詠<sup>魔法</sup>唱兵器<sup>魔法</sup>は杖って形は決まっているものなんですか？」

ふむ、とロウが唸る。

「エルにしては良い質問だ。まあ今から説明しようと思ったんだが、丁度いい。レイズと言うのは特にそういう形が決まっている訳では無くてな、それぞれは野球ボール大の『核』から成っているんだ」

そう言つて、ロウは野球ボール大の丸いガラス球のようなものを取りだした。

「それが……レイズ本体、という事ですか？」

リードがガラス玉を見て聞く。

「いやまあ、これは普通のガラス玉なんだけどな」

全員がずっこけそうになった。

「ロウ隊長……そこは本物を出す所ですよ」

ユウが残念そうにロウに言った。

「ばか、本物は高いんだ。わざわざ見せる為だけに買うのは勿体ないだろ。……んで、まあイメージ的にはこういうやつでいい。ようはエル、お前の杖に白い球が埋め込んであるだろ？そう言う奴だ」  
ここには無いエルの杖をイメージしていった。

「んで、だな。レイズが古代遺跡<sup>ベース</sup>から発掘されるってのは知っていると、発掘された状態じゃあ力を発揮しない。それを見ただけでは素人じゃ何番目のレイズか分からないんだ」

ロウが話を切ると、続けてリードが話す。

「それを調べるには、鑑定師クリアラが必要なんですよね？」

ロウは驚いた顔をして、

「良く知っていたな」

と言う。

リードが少し笑い答える。

「ええ、友人の父親が鑑定師クリアラでして、昔は話をよく聞いていました」  
その友人と言うのは、アークだったりする。

「なるほどな。まあ、その通りだ。専門の技術と知恵をもった鑑定師クリアラが必要で、鑑定しないと兵器としては使えない。そして鑑定結果で初めてどんなレイズなのが分かるんだからな。そしてその能力に応じて、籠手や剣に練りこむことで初めて兵器として力を発揮するんだ」

「じゃあ、私の杖は鑑定結果で杖に織り込む事が既に決まっていたんですね？」

エルが内容を理解して言う。

「そう言う事だ。ただレイズを持ち込んで金さえ払えば鑑定してくれる訳ではない。帝国政府の許可証が必要になる。まあ一般人がレイズをもっていたら違法になるのは知っているだろうから、良く考えれば分かるだろうがな」

レイズと言うのは、普通の剣や弓と違って強力だ。

その為帝国では、そのように規制を設けているのだ。

またこの世界ではレイズのような特殊な兵器は違法になるが、剣や槍などの単純な刃物、弓や拳銃などの飛び道具は基本的には違法にならない。

古代兵器レイズ、という単語が出てくるから、通常兵器もあるわけで、拳銃、ライフル、マシンガン等の機関銃や、大筒車という名の戦車、火線砲という名のロケットランチャーの類も存在している。

ただ製造が複雑な為、あまり普及はしていない。

威力も現実世界のそれとは別で、マシンガンVS剣の戦いで、必ずしもマシンガンの方が有利かと言ったら、そうは決まらない。

また、単発ライフル以上の銃は、所持が違法になっている。

その為、レイズや銃火器をもっているのは必然的に騎士団や帝国公認の武装ギルド、それか法に真っ向から対立する盗賊団のいずれかに当たる。

「さて、まあレイズの話はこんな所だ。ここからが本題だ。それぞれのレイズを用いた、接近格闘戦術の応用的対処術について今日は話すぞ。まずファストレイズの場合だが」

こうしてリード達騎士団見習いの座学は進んでいった。

## 第6話「幼少の記憶」

前回のあらすじ……。

担当：アーク・シュナイザー。

おなかいっぱい食べましたとさ。  
めでたしめでたし。

な訳ねエエーだろオオー!!!

殺す気かあの破壊的天然ちゃんはアアツ!!

それは、今から8年も昔、NC2101年。

俺が10歳を迎えた年の出来事だった。

夕方、家に1人の男がやってきた。

男は、どうやら、親父に仕事を依頼しに来たらしい。

その人は、派手な金髪に迷彩柄のコートに加え、鋭い眼つきをして  
いたので少し怖かった。

親父の仕事は鑑定士。クリアラ

『ベース 古代遺跡』から発掘された『ラストワード 古代遺産』の鑑定をすることだ。  
眼つきの悪い金髪男は、親父に鑑定して欲しいラストワード 古代遺産を渡す。  
すると親父の顔は、極端に真剣になった。  
重要な仕事なんだろうか。

その日の夜、結局仕事で部屋に籠りつきりで、食事も作ってくれなかった。

仕方ないので俺が簡単な食事を作り、親父に持って行った。

俺は驚いた。

部屋の戸を開けると、親父はやつれていた。

心配になるが、親父は少し疲れたただけだ、とだけ言う。

俺は不安になったが、出来ることも無い為、寝た。

その夜。

既に深夜と呼ぶべき時間帯に、人の気配を感じ、俺は寝ぼけ頭で目を覚ます。

アーク……、ラストレイズを、頼む……。

確かに、親父の言葉だった。

何のことが全く分らなかったが、その言葉に胸騒ぎを感じ、上半身を起こす。

そこには誰の姿もなかった。

夢か……。

そう思い、俺はいささか不安を感じるものの、気にする程の事でもないだろうと勝手に解釈し、布団の中に潜った。

まさか、それが親父の最後の言葉になるとは知らず。

翌日、親父は

死んでいた。

「ッ！……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

俺は跳び起きていた。

体中から嫌な汗が噴き出、体が新鮮な酸素を欲して荒い呼吸を繰り返す。

……嫌な夢、だ……。

あれから……もう8年、か……。

俺は布団を剥いで上半身だけ起き上がっていた。

「なんだってんだよ……今更……」

……俺は10歳の頃に、親父を亡くした。

近くの森の奥で亡くなったそうだ。

母さんはもつと前に病気で死んでいたから、俺は1人になった。

その為、俺は今ここフェンス家に住ませてもらっている。

あの日から数年はよくうなされたが、最近そんな事は無かった。

ホント、今更だ。

死因は不明。

だが自殺ではない事は確実で、騎士団によると何かの未知の魔術で殺された線が濃厚らしい。

俺は当然騎士団に親父の様子と、謎の言葉『プラスチック』について聞いたが、結局何も分からなかったそうだ。

俺には夢は無い。

だが、もし叶うのなら、親父を殺した奴の仇を……討ちたい。

それが、俺の唯一の願望だった。

もしも、あの日の夜、親父の言葉に反応できていたら。

もしもあの日、親父をもつと問い詰めていたら！  
もしあの言葉の意味が、俺にも理解できたなら！！  
少なくとも、こんな悲しい結末は迎えずに済んだのかも知れない  
……。

俺は、親父を救えなかった。

危機に気付いてやることすらできなかった！

ずっと一緒に住んでいたのに！

だから……親父を殺したヤツを、同じように殺す。

俺が親父に出来ることは……それだけだ。

そんな事をしたって、親父が帰ってこないのは馬鹿な俺だって分  
かっている。

でも……あの日以来、俺の時間は止まったままだった。

……やめよう。

こんな事考えても仕方がない。

俺は暗闇に慣れて来た目で時計を覗く。

「……まだ、4時かよ……」

俺の起床時間には早すぎる。

早朝四時。

「……俺は外に出ていた。」

あのまま家にいても、多分眠る事は出来ない気がした。

人によっては起きている人もいるのかもしれないが、この町では  
そう言う人は居なかった。

だから町は静まり返り、いつもとは全く違う雰囲気醸し出して  
いた。

なんだか、全く別の知らない町を歩いているようだった。

小鳥がさえずり、夜明け前の独特の青暗い空を数匹が飛び交う。

「小鳥は早起きだな……」

そんな、意味のない言葉を呟いてみる。

特に、目的があつた訳でもない。

ただ歩いていただけだった。

それなのに、気が着くとある家の前に立っていた。

町の最果てにある、木でできた家だ。

「……………」

だが木は腐り、屋根は抜け落ち、ガラスは割れ、植物が生い茂る、  
見るも無残な姿になっていた家だ。

8年前に、家主が死に、息子が出ていった家。

そう、俺が住んでいた、家。

俺は入り口の前で立ち尽くしていた。

「……………なんで来ちまったかな……………」

一言だけ、呟く。

俺はあの日から今まで、無意識ながらこの場所を避けていたはず  
だ。

無駄に過去を振り返りたくは無い。

感傷に浸ったって、ウザいだけだ。

幼馴染だったリードの家に厄介になる事である必要も無くなった  
し、元々村の1番外れだったので家前を通る事も無かった。

「まだ、残ってたなんてな……………」

それでも、実際に目にしてしまうと言えない感情が心に入  
って来る。

それは懐かしさであり、悲しさでもあった。



この家は、親父が自分で建てた家だった。

そんな不格好な家が、8年という歳月を経てなお、こうして形を保っているのは驚いた。

一度、取り壊しが計画されたんだ。

でも俺は、何故かそれを断った。

……今でも、あそこに親父が居るような気がして、壊したくは無かった。

近づいて、中に入って、親父が居ない事を確認するのが嫌だった。まあ、そんなものは幼い俺がショックのあまりに考えざるを得なかった幻想だつてのは今なら分かる。

親父は間違いなく……死んだんだよ。

だから、俺は意を決して中に入って見ることにした。崩れたドアを開ける。

ぎしり、と木がきしむ音がして、その後ボタン、と扉ごと倒れてしまう。

「はは、ハリボテ屋敷かよ……」

先へ進む。

たまった埃と塵が、俺の目と鼻を攻撃してくる。

俺は目を細めて埃から護りながら先へ進む。

ああ、ここは親父の書斎か……。

そうだよ、ここに毎日座って古代遺産ラストワードの研究をしてたっけなあ……。

そしてこっちは、俺の……。

ガタン!!

音がした。

今の音は……なんだ!?

ミシッ……ミシッ……。

足音。

それ以外には考えられないような音。

俺以外に、人がいる　のか!?

「　動くな」

突如響く鋭くドスの利いた男の声。

「……………ッ」

何も言えない、それどころではない。

首元に、銀色に輝く何かがあった。

首が動かせない為、眼球を下に向けても全体は見えないが、確認するまでもない。

鋭利に研ぎ澄まされた、ナイフだった。

心臓が早鐘のように鳴り響いた。

ごくん、と唾を飲み込む度に体が強張る。

その動作をきっかけにして、相手が動き出すのではないか、そう考えてしまう。

「動けば、殺す」

この日から、俺の日常は姿を変えていく事になる……。

## 第7話「一難去ってまた一難」

前回のあらすじ……

担当：アーク・シュナイザー

昔の夢を見て、珍しくうなされる俺。

そしてなんのつもりか8年もほったらかしにした自宅（廃屋）へ訪問。

そしたら思わぬお客さんが……？

俺ピンチ！！

### 旧シュナイザー家

「動けば、殺す」

短く発せられたドスの効いた言葉と、喉元のナイフ。

大声を出そうにも、言葉を放った瞬間に喉元のナイフが動き出すだろう。

その上、今は夜中の4時であり誰も起きてない上に、ここは村の外れだから聞こえるはずもない。

さて……とりあえずどうしよう。

冷静になって考えてみると、俺を人質に取ったイコールすぐには殺されないんじゃないかね？

なら選択肢はある。

とりあえず振りほどくか？

……いや、寝起きで武器なんぞ持ってねーし失敗したら死ぬのでやめよう。

大声を出す……のもさつき言ったとおり誰も起きてないし起きててもたぶん俺が手遅れになるので無理。

残る選択肢は……。

「……分かった。オーケー、動かないから命だけは勘弁してくれ」とりあえず、俺は現状で最も生存確率の高い選択肢を選ぶことにした。

すると男はしばらく黙る。

あれ？ 地雷踏んだか？

そう思うと、はあ、とため息を吐き、

「……やっぱやめだ。ガラじゃねえわこんなの」

と言ってスツと喉元のナイフを引き、その場に捨てる。

ゴトつとナイフは床に落ち、俺は解放された。

あ……れ？

どういう事？

「クツクツク、動くな、だってよ？ 俺らしくねえ。黙って挽肉にすればいいのにな！」

おいイイイ！！！！

ガラじゃないってそっちかアアア……い！！

ここで俺は咄嗟にバックステップで距離を取った後振り返る。

先ほどまでビビって動けなかったのに瞬時にこの行動が出来たことには我ながら感心したが今はそれどころじゃねえ。

とりあえず物騒な男の全貌を初めて確認する訳だが、暗くて良く見えなかった。

ただ、髪は金髪で年はだいたい20〜30くらいだと言う事は分かった。

けどそんな説明してる間もなく男は両手に刃が3つ出たクロウを装備していて、俺に突っ込んできた。

「ちよ、待てうおおおおおおおッ！？」

俺は生命の危機を感じ全力ダッシュ！

脚力に全ての力を捧げる。

壊れたドアを蹴破り、腐った柱を踏み倒すが、

「クツク、遅え、遅えよツ！」

相手速えええええツ！

相手はもう俺の隣に来ていた！

右手から突き出した3本の鋭利な刃が俺の喉元を捉え、一直線に向かう！

「うわっ！」

その瞬間俺は瓦礫に足を取られ、転んでしまったがお陰で奇跡的に刃をかわす事に成功した。

だが、もう無理だ。

「ちッ！ ラッキーな野郎だ」

俺は馬鹿みたいに足が速い訳じゃないし、無尽蔵な体力を保有している訳でもない。

普通に息が切れるし、緊張の連続で足に力が入らなくなっていた。

「さあて今度はどんなラッキーを見せてくれんのかなア？」

また刃が迫る！

やばッ！ 死ぬ

「っつと」

……と思つたら、ガキン！ という金属がぶつかる音がして、目の前の刃は別の刃に防がれていた。

「ああ？」

た……すかつたのか？

俺は転んで尻もち付いたまま動けなかった。

別に腰が抜けた訳じゃないんだがな。

金髪で物騒な男は1回後退した。

「なんだいなんだい、こんな廃屋で物音があったと思つたら。面白そうな事やってんじゃねーか。俺も混ぜろよ」

助けてくれた男は、陽気な口調でそう言った。

くそ、暗い上に背を向けているためどんな奴なのか全くわからん。少なくとも声からして男だと思つた。

「ちツ……疾風の翼か……、はあ、運わりーな今日は。まあいい。あんま事を大きくするのはよくねえ。退かせて貰うぜ」

と言って、金髪は、闇に消えて行った。

それと同時に、肩の力が抜けた。

「ふう……あの、助けてくれて　　っていねえ!!」

俺を助けた男の姿も消えていた。

なんで!!

「……なんだってんだよ……訳わからん」

……待てよ?

「疾風の翼……どっかで聞いた気が　　あっ!!」

そっだ!

前にリードが言ってた!

最近急に勢力を増してきたっていう盗賊団の名前だ!!

なんでも貴族を中心に狙う盗賊らしい。

……でも、そいつがなんでここに?

分からん。

なにかお宝でも見つかったんだろうか?

こんな放置状態の廃屋に?

んな馬鹿な。

まあ……なにはともあれ助かったみたいだ……。

俺は人生の中でも結構レアな体験したんじゃないか?

とか阿保な事を考えつつ外へ出る為に起き上がる。

「ん?」

ふと、親父の部屋の机の上にあるものに目が止まった。

「腕輪?」

それは、金属でできた腕輪だった。

特に変わった宝石が埋め込まれている訳でもなく、変わった変わった形をしている訳でもないごくごく普通の腕輪。

いや、それを普通と言うに少し抵抗があった。

だって、このボロボロの家の中で、新品同様の輝きを誇っていた

からだ。

さっきの奴らが落としていったのか……？  
いやでも、その割には机の上に置いてあったし……。  
常識で考えれば、そんな意味の分からない物を拾ったりはしない  
だろう。

俺は特に腕輪マニアでもないし、その辺に落ちている物を簡単に  
ホイホイ拾ったりする男でもない。

でも、何故だか、気が付くと吸い寄せられるようにその腕輪を身  
に着けていた。

そしてその腕輪は妙にしっくりくるもんだから外そうとも思わな  
い。

「……なにしてんだろ」

と1人呟き、俺は家を出た。

町はずれに戻ると、まだ早朝だと言うのに何か騒がしかった。

「ん？ なんだ？ こんな時間に……」

すると前方から小さい人影が……。

「あつ！ あああああ！！ アークにいちゃん！！ どこ行ってた  
のさー！！」

……走ってきたかと思っただら物凄い勢いで取っ組みかかってきた。

「うわうわうわ！ なんだよクソガキ、なんかあったのか！？」

俺は必死の形相のダイチを見て言った。

「えええええええー！！？ アーク兄ちゃん知らないの！？」

ダイチは俺から離れ両手を広げ大袈裟にリアクションする。

「知らないから聞いてんだっ！ 再度質問するがなんかあったのか  
？」

俺はそんなダイチの顔をがしつと掴み、しゃがんで顔の高さを合わせて言う。

「さっきね、盗賊団が来て、エルねーちゃんさらわれちゃったんだ！」

「マジかつ！！！」

一難去ってまた一難。

厄介な事件が起こってしまった。



## 第8話「ある意味盗賊の方がツイてない」

前回のあらすじ……。

担当：アーク・シュナイザー。

物騒な男が俺にナイフを突きつけた！

と思つたらなんか別の男が助けてくれた！

しかもそいつは盗賊団『疾風の翼』のようで、瞬時に消えた。

俺はその家で腕輪をGET！

んで町に戻つたら盗賊団にエルがさらわれたとか。

ちょ、一遍にいろんなこと起こり過ぎ！

ちよつとは整理させるコンチクショー！

町外れ

「エルがさらわれたって……なんでだよ？」

俺は服を引つ張るダイチに視線を向ける。

「実はね」

ダイチが理由を話す。

30分前

エルは迷子の犬を探す依頼を受けていたので、早朝に辺りを搜索

していた。

「おーい！ ミルクー！ どこにいるのー！？」

もともとエルという人間は、朝には強かった。

それで、早めに起きて辺りを探そうと、早朝4時にも関わらず行動を開始したのだった。

奇しくもアークが家を出てから数分後の事だった。

行動と言うのは、騎士団見習いの任務の事で、ある人から犬の捜索を頼まれていたのだ。

騎士団は、軍隊であると同時に治安維持組織でもあるので、落し物の捜査から、盗賊団の討伐まで基本的には何でもしなければいけない。

ただ、そういう簡単な任務はエルやリード達騎士団見習いへ流れて行ってしまうのがお決まりなのである。

そんな訳で、朝早くからエルはミルクと言う名の子犬を探す。

「……あつ！ いた！」

エルは子犬を発見した。

何か変な臭いでもしたのか、地面をくんくんと嗅いでる、白く小さい子犬だ。

だが、一瞬声がしたエルの方を向くと、その小柄さからは想像もできないスピードで走り出す。

「あつ！ 待ってー！！！」

エルは走って追いかけるも、犬の足に人間は追い付けるはずがない。

あつという間に距離が離れ、犬は茂みの中へと姿を消した。

「こうなったら、 聖なる力よ！ ホーリーブラストッ！」

ホーリーブラストとは、天聖属性魔法の基礎魔法である。

杖の先に白いバスケツトボール大の光球が現れ、杖を振る事でそれを発射する攻撃魔法だ。

繰り返すが、“攻撃魔法”だ。

エルは足止めのつもりで使用しているが、間違ってもこういう時

に使ってはいけない。

それがいつも失敗の原因になっている上に、今回はもつと厄介な事態を引き起こしてしまう。

3連発はなつた光球は、もちろん犬には当たらず、犬の背後の林へ当たった。

「うわああああっ！」

林では火柱ならぬ光柱が立ち上り、その中でそんな悲鳴が聞こえてきた。

男の声だった。

「おいダツド！ 大丈夫か！？」

状況から察するに、ホーリーブラストが当たってしまった事以外考えられない。

「ええええっ！？ だっ、大丈夫ですか！？」

これにはエルも驚くしかない。

早朝にこんな場所に人がいる事自体がそもそもおかしかった。しかも数人と判明する。

茂みの中からぞろぞろと人が現れたのだ

「お前……ッ！？ 俺達の姿に気付いていたのかッ！？」

「くそッ！ なんでバレたんだ！ 物音ひとつ立てなかつたはずだぞ！？」

「おい！ こいつまさか……騎士団……！？ いやっ、腕利きの傭兵ギルドの連中かもしれねえ！」

手にはそれぞれ剣や槍など。

だがその男たちの腕輪には赤く光る『核』が付いていた。それは紛れもない古代兵器を意味する。

「今は1人みたいだ！ 応援が来ないうちにずらかるぞっ！？」

「こいつはどうする！？」

「こつちは13人だ！ とりあえずさらって逃げるぞー！！」  
気が付くと、エルは13人の男達に周囲を囲まれていた。

頭に黄緑色のバンダナ。

粗末だが身動きのとり易そうな身なり。

そして古代兵器。

それらが指し示すのは、違法な武装集団　盗賊団しかありえなかった。

「え？　え？　えええええ！？」

しかしエル本人は混乱していたのか、「なんだか男の人達に囲まれた」くらいにしか理解できず、なんだかよくわからないうちに、さらわれてしまったのだ。

その一部始終を、ダイチは陰ながら見ていたそうだ。

現在

「つて、どんだけ阿保な理由なんだよっ！」

そもそも犬になんでホーリーブラストを使おうと思ったのか俺は聞きたい。

殺す気なのか？

「エルねーちゃんを阿保とか言うな〜！」

むす〜と睨みつけるダイチ。

「阿保だろ！　絶対阿保だろ！　そもそもなんでお前は4時に起きてたんだよ！」

俺は話の途中で疑問に思った事を上げてみる。

「うっ、それはエルねーちゃんと一緒にミルクを探そうと思ったんだよ……」

そこまでするか？

まあ、コイツがエル好きだと言う事は知っている。

今はそれよりもしなきゃいけない事があるしな。

「あ、アアアークツ！！！」

向こうからリードがやってきた。

服装は一般の物ではなく騎士団待機服だった。

「おいリード！ エルが盗賊団に」

「知ってるよ。ってというか君は今までどこにいたんだ？」

それを話すと話がややこしくなりそうなので話題を変える。

「まあまあそれより騎士団は動かないのか？」

リードが着替えていると言う事は、町に盗賊団が侵入した事は既に騎士団にも知れ渡っているはずだ。

「実は貴族街の方でも盗賊団数名が見つかってね、結局取り逃がしたんだけど、追撃するかどうかはまだ議論中なんだ。被害は実質的にエル1人だけだし……」

あごに手を当ててリードは言った。

「つたく、肝心な時に役に立たない組織だな。」

「情報によると、盗賊団は『疾風の翼』だ。君も聞いたことくらいあるだろ？」

「ああ。つーかお前から聞いたんだがな」  
疾風の翼。

近年出来た新しい勢力で、武力による略奪、強盗を主とする『紅蓮の霸王』という最大最凶の盗賊団とは正反対で、人目につかず疾風の如く盗みを働く盗賊団らしい。

なんと殺傷人数は0人で、絶対に人を殺さないのが決まりらしい。その上狙いは貴族達や他の盗賊団のみで、噂によるとその盗品や資金を貧しい村に配っているとかないとか。

義賊じみたところはあるが、どちらにせよ騎士団からすれば法を犯す武装集団という事には変わりない。

「その空駆船がモルゼスの森にまだ停泊中らしい」

空駆船とは、まあそのまんま、空を駆ける船、の事だ。

小型のものは空駆艇、軍用、武装した物は空駆艦と呼ばれている。「よし。リード、行くぞ」

場所を教えたとと言う事は、俺がこう言う事を知ってたんだろっしな。

「君ならそう言うと思ったよ」

安心したかのような顔でリードは眩き、腰の剣に手を添える。

「お、オイラも行く！」

そこで思わぬ立候補が現れた。

「そっぴやいたんだっけ……」。

「駄目だ！ 君はまだ子供だろ？ 危険すぎるよ」

リードはダイチを止めようとする。

「子供じゃないやい！ それにオイラだってエルねーちゃん心配だよ！」

わあわあ、と騒ぐダイチ。

「エルの事は僕達に任せて。必ず連れ戻して来るから」

「やだやだやだー！ 絶対行くー！」

やれやれ、リードの堅い頭じゃ子供の説得は無理だな。

「おいダイチ、お前に頼みたい事があるんだが」

俺は腰を落として視線を合わせる。

「え？」

ポカンとするダイチ。

「俺達はエルを取り返して来る。お前はその間、他のクソガキ共が暴れ出さないかみてほしいんだ。お前までこっちに來たら誰が面倒みるってんだよ」

村にもまだ沢山の子供がいる。

エルは子供好きであり、子供はエル好きなので騒ぎだしたらひとたまりもない。

まあ、ただの建前なんだけどな。

「そっか……分かった！ 町の子供たちは任せてよ！ だからアー  
ク兄ちゃん達は必ずエルねーちゃん連れて来てね！」

一気に元気になるダイチ。

「よし！ ダイチもしっかりな！」

と俺はダイチの肩をポン、と叩き立ち上がる。

「うん！ じゃあね！」

と言つて、ダイチは走り去つていた。

「……なんていうか、子供の扱いが上手いね、君は」  
リードが君には敵わないよ、と付け足す。

「お前は頭が固すぎんだバーカ」

「いや、アークの精神年齢が近いからなんじゃないの？」  
こいつ……言いやがる。

そんな感じで、俺らは空駆船が停泊しているモルゼスの森、とい  
うところに向かった。

## 第9話「トレジャーハンター？」

前回のあらすじ……

担当：エルアス・ミルード。

やったあ！ 初めてのあらすじ担当なんだよ！

えっとお、今日は頼まれていた子

犬「ミルク」を探す為にちよつと早起しちゃった。

とりあえず着替えて辺りを探したけど、どこにいるかなあ。

あつ、見つけたー！

でもやつぱ私の足じゃ追いつけないよね。

素早い目標は魔法で牽制！ って教官が言ってた！（対魔物用講座の話である）

私は言われたとおり牽制したんだけど、後ろの林に人がいたみたい  
！！

しかもぞろぞろと10人以上！！

え？ なんなのこの人たち！？

あれ！？ なんか私捕まってるよー！！

誰か助けてええー！！！！

モルゼスの森

ざっしざっしと、森の中に出てきた整備されたのが自然と出来たの  
か分からないような道を走る俺たち。



朝方というだけあって、朝日の木漏れ日がなんともいい感じに降り注ぎ、居るだけで気分が浄化されるようだ。

もしこんなことさえ起こらなければ今日はランニング日和だった。いやまあ、俺としては走るより昼寝日和といった所だけだ。

「しつつかし、『領域』の外に出たのって結構久々な気がするなあ……」

この世界中には、魔物が存在している。

それらから町を守るのが、『領域』だ。

正式には『聖なる領域』という。

なんでも『聖なる領域』なるものを一定範囲に構築し、邪悪な魔物の侵入を拒むものだそうだ。

ただ例によつてその原理は解明されてないみたいで、帝国にとつてもよくわからん代物らしい。

領域といつても、バリアみたいに壁的な物があるわけではなく、その境界線はあいまいらしい。

そのため『領域』が設置してある町の外れのほうには結構魔物とか入ってきたりする。

そしてさっき言ったが原理不明の理解不能な困ったモンなので町には必ず騎士団やら護衛ギルドやらがいて街を魔物から守っている。

「ああ、最近は台風のせいで町の修復作業とかで忙しかったからね」  
そう、つい数日前まで台風直撃だったので、いつもみたいに外に出て魔物狩りとかはしていないのだ。

さすがに俺も一日中寝て過ごしている訳ではなく、そうやって剣術の練習とかをしている。

「僕はたまに騎士団の任務で外に出てるけど……っと、魔物だ！」  
リードと俺は気配を察し、走る足を止める。

「どうせここいらには『レベルE』程度しかないだろ。楽勝だ」  
目の前にいるのは2体の『バルード』というオオカミみたいな魔物だ。

赤い瞳で、腹の部分だけ白い茶色の毛並みで、耳が逆立っている。

キバも凄いが、どつてことない。

ちなみに、レベルEとは魔物の強さを表す段階的なものだ。最高でレベルSまで観測されている。

そのレベルだと、人間の言葉を話せるレベルらしいが。

「油断しないでね、今は魔術を使える人間が　　つて、聞いてないし」

俺は突進し、右手のダガーを水平に振る。

1 匹目撃破。

2 匹目が俺めがけてジャンプしながら大口あけて飛びかかる。避けるまでもない。

左手のダガーを縦に振り、両断する。

2 匹目撃破。

時間にして、約10秒、つてとこかな。

「まあ、君にこの程度じゃ役者不足つてとこなのかな」

呆れつつ笑いながらリードは言った。

「バルードくらいなら何体掛つてきても楽勝だろ」

「千体とかでも？」

「リード……限度を考えようぜ？」

珍しくリードがボケに回ったな。

去年まではツツコミしかできない駄目男だったのに、成長しやがったな。

え？ それじゃ全然駄目男じゃないつて？

まあ気にするな、こうでもしないと劣等感で泣きそうなんだ！

そんな感じで魔物を蹴散らしながら走る俺達。

つていうか、船まで意外と遠いな……。

ああやべ、そろそろ帰りたくなってきた。

疾風の翼は、人間には危害を加えないが、だからといってエルが即座に開放されるわけじゃないし、さらわれたときは魔法詠唱兵器ファストレイズ

を持つていたらしいし、やっぱり助けに行くべきだな。

「そういえばアーク」

ふと、リードが俺に声を掛ける。

「君いつの間に鍛えたんだい？ 正直この距離を走って平気な顔で僕についてくるとは思わなかったよ」

「……あ？ 確かに……」

そういえば、おかしい。

俺は戦闘以外ではほとんどリードに負けている。

当然体力も劣っているんで、いつもならこれ程長くは走れない。でも今は違う。

なんか、なんか知らないけど、息が切れないのだ。

エルがさらわれたことよって火事場の馬鹿力的な何かを発揮しているのか？

いや……なんかそれだけじゃない気がする……。

「いやまあ、ついにこの俺も本気を出したという事だよリード君？」  
でもまあ、気にすることないだろ、と思ったので適当に流しておく。

どうせ明日になったらいつも通りに戻ってるに決まってる。

ある日体力が無限大になりました、なんて説明不可能なラッキーイベントなんてあるはずがない。

とか思っていると、草むらからがさごそ、と音が聞こえてきた。

「アーク！」

「ああ。分かってるって」

俺らは武器を構える。

いくらバルードだからって、油断していたら怪我の1つや2つは負うからな。

だがその草むらから現れたのは、魔物ではなかった。

「ぶつはあ~~~~つ！ やつと出れたあ！ うはっ！ 服の中草だらげじゃん！！ くつさあ！」

「シャレか……！」

じゃなくて、こいつ誰だああー！？

「ん？ 何アンタ達、はっ！ まさかストーカー！」

「違えよっ！ 冤罪にも程があるだろ！！」

「じゃあ、なんだってこんなところにいるのよっ！」

そう怒鳴るのは、見た目ハタチくらいの謎の女だ。

茶色の長髪で、緑系の服を着ている。

中くらいのショルダーバッグを持っていた。

服装は身軽そうな布の服で、短パンにブーツという変な格好だった。

両足のふとももにクナイを刺していて忍者？ とも思ったがそれにしては騒がしすぎる気がした。

ブーツだし。

「待ってくれ。彼の言うとおり、怪しい者じゃない」

リードが俺の前に出て口を開く。

謎の女は黙って話を聞いている。

俺の言う事は聞かなかったくせに！！

「僕たちはラシアトス城下町の住人だ。今は盗賊団『疾風の翼』にさらわれた友達を助けに来た。この辺に疾風の翼の空駆船があると  
いう情報を聞いて探しに来ただけなんだ」

リードは1から順に懇切丁寧に説明した。

「空駆船？ ああ、丁度あたしもその船に侵入してきたところだよ  
」！」

謎の女は何故か得意げに話す。

「侵入？ っていうかお前は何者なんだよっ！ お前の方が数倍あ  
やしいぞ！？」

俺は思ったことを口にする。

下手したらこいつ盗賊団の奴かもしれね しな。

「お前じゃないわよっ！ あたしにはね、ルネ・アーサスって名前  
があんのよ！！」

「知らねーよ始めて聞いたし！ んでお前は何モンなんだよさつき

から！」

そう聞くと、女 いやルネは胸を張り、

「ふふん、よくぞ聞いた！あたしは、世界を又にかけ金銀財宝を探し求める、素晴らしきトレジャーハンターよっ！！！」

とババーン！ と効果音がなりそうなくらい強調するルネ。

「あの船なら、ここからまっすぐ言ったところに停まってるわよ。

お宝無いか探しまわったんだけど、盗賊団のクセに目ぼしい物は無かったわね」

ちッ！ と不機嫌そうな顔で舌打ち。

……っーかそれ窃盗じゃね？

## 第10話「不良青年と天然少女」

前回のあらすじ……。

担当：リード・フェンネス。

今回は僕が担当のようだね。

町に盗賊が入り、エルがさらわれたそうさ。

騎士団としても盗賊の取り締まりは行わなければいけないが、戦力温存の为上層部が重い腰を動かそうとしないのが現状のようさ。

それでもエルがさらわれたのは事実だ。

見習いである僕に特別指示は出されなかったんで、僕はアークを誘い町の外へ出た。

たびたびの魔物の襲撃を退けながら軽快に進んだけど、なぜかアークがバテない。

彼は本気を出したとか意味の分からないことを言っていたが……どうも信じられない。

が、今はそれよりもエルが先だ。

そんなとき、茂みからやけにテンションの高い女の人が見えた。

アークと言い合いをしていてグダグダになりそうだったので場をまとめ。

名前はルネ・アースというらしい。

とにかく、悪い人ではなさそうさ。

しかも彼女は船の場所を知っているらしい。

案内してもらおう。

そこは、埃くさく、薄汚い部屋だった。

部屋の中には2、3個の木箱と、たった1つしかないドアがある。ドアは嚴重に閉ざされていて、とても開けることは出来ない。

その薄暗い室内をわずかに照らすものは、この時代でもだいたい一般的になってきた蛍光灯、という白く光る筒のみだ。

ただ、壊れかかっているようで、ぷつりぷつりと明かりが点滅してしまっている。

そんなおおよそ平和では無いような空間に、現在1人の人間が居た。

ジャミル・ハワードという青年だ。

赤毛の長髪が特徴的で、ギラギラしたピアスにネックレス、黒革のコートという、不良のような容姿の男。

彼は部屋の端っことで、木箱に寄りかかりながら目を閉じている。寝ている訳ではないが、特にする事も無かったので、目を休ませているだけだ。

「(あ)……暇だア。そもそもなんでこんな事になっちまったんだっけエ？」

ジャミルという青年は、少し過去を振り返ってみた。

彼は、城下町の隣の小さな村、ブルーム村に住んでいた。

そこで魔物討伐ギルド『紅の剣』<sup>ニホウ</sup>に属していたのだが、モルゼスの森周辺の魔物の討伐をしていたら、盗賊団『疾風の翼』の船を見つけた。

そして……一種の罰ゲーム的なノリでじゃんけんに負けたジャミルが様子を見に行くことになったのだ。

「(ンで、こうしてドジ踏んで捕まったと……あのクソ団長野郎オオ……帰ったら賠償を要求してやるウウ……)」

ジャミルは1人でこめかみに力を入れていた。

と、そこへ、

「ここだ。おい、開けるからちよつと待ってる。ああ、中のテーマは出るんじゃないぞ?」

部屋の外から男の声がした。

ざわざわと騒がしく、数人居るようだった。

ジャミルは鬱陶しそうにして片目だけ開ける。

そして、扉が開放された。

「入れ。別に殺しやしねえから、大人しく待ってんだぞ?」

「あ、はい、どうもです」

入ってきたのは頭に黄緑色のバンダナを巻いた男と、桃色の綺麗な髪をした女だった。

男は疑いようも無い盗賊団の団員だろう。

手には鋭い剣。

疾風の翼は人は殺さない集団と有名だが、数人居るようだし、素手で刃向かったら無傷では済まないだろう。

ここは、大人しくしとくか、とジャミルは傍観を決め込む。

女の方はどうやら新たに捕まってしまった被害者らしい、が、何故かペコリと頭を下げてここに入ってきた。

「(んだア? この見るからに天然っぽい女は……)」

と、ジャミルは自身の直感から分析し既にこつこつ目で見ているやがてすぐに扉は閉められ、再び部屋は密閉空間になった。

ジャミルは変化がなくなった部屋で再び目を閉じた。

そして女はキョロキョロして、部屋の様子を確認すると、ジャミルをじつと見つめた。

ジャミルはその視線に気付き、

「……何見みてんだア」

片目を開けて声をかけた。

「うわっ、寝てると思ったのに起きてたんだー」

と女に心底どうでもいいコメントを返されたので、ジャミルは興味を失い再び目を閉ざそうとしたが、

「えーと、始めまして。私はエルアス・ミルドって言います。相



部屋になったのも何かの縁だと思つので、よろしくお願いしまーす」  
その後髪居れずに飛んできたのはやはりどうでもいい情報だった。

自己紹介を済まし、ペコリと行儀良く頭を下げるエル。

「相部屋つて……、お泊りに来てるワケじゃねエだろオが……」

やはり予想通り天然ちゃんだったか……と、自分の直感の良さに感動しつつ、これからこんな意味不明な生物と同じ部屋になるのか……と意気消沈するジャミル。

そんなジャミルの心情も知らず、目の前の天然ちゃんは、

「呼ぶときは是非エルって呼んでくださいね。みんな私のことをこっ呼んでるんですよー」

またしても不必要な情報を垂れ流す。

何処までも鬱陶しい女だ、とジャミルは騒がしさに半ば苛立ちながら聞いていた。

えへへーと笑いながら突然あつ、と短く声を上げ、

「そついえば、お名前まだ聞いて無かったですよねー。なんて呼べばいいですか？」

こいつ……俺が見るからに不機嫌さを露にしているのが分からないのか？

ていうかこの状況でそんな悠長に構えていいのか？

阿保なのかコイツは？

とジャミルは思ったので、

「……阿保」

と一言だけ返した。

「阿保さんですか？ なんていうか、可愛そうな名前ですなー……、まあえつと、よろしくお願いしまー」

「 待て待て待てエエ！！ なんつー勘違いしてんだ殺すぞゴルア！！ テメエ馬鹿だろ！？ 馬鹿だ！ 馬鹿じゃないと殺す！」

ジャミルは耐え切れなくなった怒り……というより単なるツッコミをエルに向かって炸裂させる。

「あ、やっぱり聞き間違いでした？ でもはつきり言わない阿保さんが悪いんですよー？」

馬鹿にされている。

絶対馬鹿にされている。

そのはずだが、目の前の女に悪意は感じられない。

ジャミルは恨んでいいものか迷ったが、恐らく真性の　　というか最悪の天然であると考え、必要以上に考えるのをやめた。

「で、あなたの名前はなんて言うんですかー？」

今度は聞き逃さないように、と耳を澄ましている姿がなんとなくムカついたが、ジャミルはこれ以上逆らっても良い事無さそうだと勝手に判断し、口を開いた。

「……ジャミル・ハワード」

ジャミルは自分の名を一言ボソリと呟いた。

「へえージャミルさんというんですかー。私はね、エルアス・ミルドって言います」

「それさっき聞いたっつーのオ！」

「エルって呼んでくださいね」

「だアア！！　それもさっき聞いたアア！！　ンだよコイツウゼエ！！！」

ジャミルは出会って数分でもう関わり合つのが嫌になるくらいエルに呆れていた。

「そういえば、ここどこなんですかねー？」

エルという天然は、改めて辺りを見回しながら言った。

「どこって……、疾風の翼船の一室だろオが。つたく、嚴重に鍵掛けやがって、ウツゼエ……」

ジャミルは溜息を吐きながら木箱に肩肘を付く。

「そうですねー。なんか出れる方法ないもんですかねー」

とエルは大して気にもしてないような暢気な声で言う。

さアな、とジャミルが短く返そうとすると、不意にドアが開いた。まあ例によって数人の盗賊がいるので脱出は無理だが。

「ほら、昼飯だ。とつとと食べる」

その盗賊は2人分の昼食を持ってきていた。

確かに、考えてみれば朝から何も食べていないと思うジャミルとエル。

人間、意識してしまうと腹が減るものである。

「ケツ」

それをジャミルは乱暴に奪い取り、

「わあ、ありがとうございますーす！」

エルは行儀良く受け取った。

それを見た盗賊の男は、申し訳なさそうにして、

「済まねえな。こつちもいろいろ立て込んでよ。別に大人しくしてりゃ解放もするし怪我也させねえから、もうちょっとここにおいてくれよな」

と扉を閉めた後に言った。

「ケツ、やけにお優しい盗賊じゃねエか。疾風の翼ってのは義賊って聞いてたが、あながち間違いじゃアなさそうだなア。もつとも、こつちとしてはいい迷惑だがよオ」

ジャミルは渡されたパンを頬張りながら言った。

「義賊でも、盗賊は盗賊だぜ。今上の連中は騎士団と睨めっこさ。悪いな、巻き込みじまって」

盗賊は、扉にを背にして寄り掛かる。

「気にしないで下さいよ。私にも、過失はありましたからねー。それに盗賊さん、みんな悪い人には見えなかつたですよ？」

エルは食べながらしゃべるジャミルを注意しつつ、ドアに向かって言った。

「はははっ、そりゃどうも。後でみんなにも伝えておくぜ」

一連の会話を聞いたジャミルも少し興味を持ったのか、声を掛ける。

「テメエ、名前は？」

「名前？ 俺は」

その瞬間、船内に破壊音と悲鳴が響いた。

「な、なんだ!？」

「助けてくれえええ! 『盗賊殺し』がッ、ぎゃあああ!!」

エルとジャミルから外の様子は見えなかったが、直後に肉を切り裂く音と断末魔が響いた。

「くッ……お前が、『盗賊殺し』かッ!! この野郎オオッ!!」

先ほど話した盗賊の声だった。

「ふん、無駄だ」

だが虚しくも、女の声と共に剣が弾き返された音が鳴り、

「白く鋭い氷の刃よ。敵を貫け、アイスニードル!」

次の瞬間、肉を引き裂く、聞くだけで吐きそうになる音がドア部屋越しに聞こえた。

やがて、扉が謎の女によって開かれた。

「……に、げろ……がはッ!」

先ほど昼食を持ってきた盗賊は瀕死だった。

刺された後、振り返ろうとするが、女は無慈悲に細身のレイピアを突き刺す。

胸から口元へ一気に血が流れ、やがて口から大量の血を吐いて盗賊は倒れた。

倒れた盗賊の男から、じわじわと床に血が滲んでゆく。

その瞬間、目の前で3人の人間の人生が終わったことを2人は理解した。

ジャミルとエルは、声も出せず、それをやった人間を見つめていた。

銀色の髪を持ち、黒系の服を身に纏う。

その白銀に輝くしなやかな髪は、腰の長さまで届いている。

整った顔立ちで、瞳の色は紅蓮のように赤い。

それが対照的に白い肌と銀の髪が合わさり、いいアクセントとなっていた。

年齢は20代程度、ジャミルよりやや年上に見えた。

そして、今2人がもつとも注目しているのは、先ほど放った水色の魔方陣のあと、右手に握る細身の剣、レイピアだった。

女はそのレイピアを腰に閉まった後、

「捕まっていたのだな。出る」

と何事も無かったように、そう言い放ち、2人を外へと案内する。

ジャミルは悟る。

確かに、今の女の行動は許せない

ジャミルは盗賊なら死んでもよし、という考えではないし、盗賊達も監禁こそしたものの、彼らに危害は加えなかった。

それを、まるでゴミを掃除するかのように一掃した目の前の女は許せなかった。

だが、今の状態では、間違いなくその女には敵わない。

女は恐らく俺達の救出がしたかったのだろう。

それが本当の目的なのかどうかは置いておいても。

なら、ここは一先ずは大人しく救出されることにしよう。

せめて、武器が手に入るまでは……。

そう考えていた。

だが、エルは動かない。

「おい、何やってんだア」

ジャミルが小声で声を掛ける。

「殺すことは……」

下を向いたまま小さくエルは言う。

やがて顔を上げて、

「殺す事は、無かったと思います!」

と強い口調で言った。

自分の意思を強く訴えかけるような、とても先ほどの天然とは思えない目線だった。

「……何故だ」

女は少々イラつきぎみに答えた。

「確かに、私達は囚われていました。でも、危害は加えられてません。助けてくれたのはありがたいですが、命を奪う必要性はありませんでした」

ジャミルと、考えていることは同じだった。

でも、それを言ってしまうのは、まずい。

「……やめる。それ以上言わないでくれ。でないと、私は貴様らを”敵”と認識する事になる」

女は既にレイピアに手を掛け、今にも抜きそうな動作で言った。

だが、エルは構わず口を開く。

「あの看守さんにだって、あの看守さんの人生があつたと思います！それを奪っていい権限は、あなたにはありません」

女の鋭い眼光に負けず、凜とした口調で言った。

その姿は、先ほどまでの捕まつた少女エルのものではなく、

正義と秩序を守る騎士団の1人であるエルアス・ミルドだった。

「看守の人生だと……？」

女の眼光がさらに鋭くなった。

「盗賊の方棒を担ぐ奴の人生など、たかが知れている。私の邪魔をするというのなら、貴様らにも、消えてもらおう」

女の足元に水色の魔方陣が展開し、魔力を高める。

こうして、謎めいた女は、ジャミルとエルに刃を向けることになった。

女の力量は不明だったが、立ち振る舞いや動作などから只者ではないということとは2人も理解していた。

そして、自分達はごく普通のギルドや騎士団見習いレベルの力量しか併せ持っていない。

その上、今は丸腰だ。

エルは、そうした状況を正確に理解したうえで、それでも女を見逃すことは出来なかったのだ。

## 第11話「ちょっとは事前通告して欲しい」

前回のあらすじ……

担当：ジャミル・ハワード

つて、なんで俺があらすじなんだア!?

まア、いいや……。

俺ア不覚にも、疾風の翼の船に捕まったア。

ンで、牢屋つばいトコで開放されンのをまっていたら、妙に天然つばい女が入って来やがった。

ウゼエ。

死ぬほどウゼエ女だった。

そして、看守が俺らに昼食を持ってきた。

俺アもうここで何回か食ったから分かるンだが、結構旨かったりする。

ンなどオでもいい事考えてたら、突然看守が殺された。

俺ア魔狩ギルドの特性上魔物の死体には見慣れていたが、目の前の人間が突然死んで、もう声すら上げられなかった。

そして、その後ろに女が1人。

コイツがやりやがったのかア……。

俺アまずいと思ったが、エルって女、さっきたア別人のようにキレてやがる。

まるで騎士様みてエだな。

とはいえ、俺らは丸腰。

どうすんだよ!

モルゼスの森

「駄目よねえ、最近の盗賊共は、武器兵器とか色気ないものばかり。もつところ、金銀財宝とか持つてる盗賊いないのかしらねえ！」  
「持っているクナイを人差し指でうまくバランスを取りながら、ぶつぶつと疾風の翼に対しグチを言うルネ。」

「あのなあ……それただの窃盗だろ!!」  
「俺は思った事を口にして見る。」

「違うわよ！ ひつどい言い草ねまったく！」  
「ふん、と俺と逆方向を向き、両腕を組む。」

「いやだって！ トレジャーハンターではないよな間違いない！」  
「つかお前ただのコソドロだろ！」

「俺は、だんだん怪しくなってきたな」と思いつつこの女の素性を明かすために講義する。

「いいじゃない！ トレジャーをハントしてるんだからトレジャーハンターよっ！ なんか文句ある!？」

「ルネは一気に振り向いて、身振り手振りを加えて大げさに自己の無実を証明する。」

「強引だ！」

「おいリード、騎士団権限でこいつしよっ引いてくれよ」  
「こつこつとときはリードしかいない。」

「この勘違い犯罪予備軍を何とかしてくれ!!」

「まあ……考えとくよ」

「リードの野郎は一回はあ、と頭を抱えて溜息を付いた後、  
「それより、君、確か盗賊団の船に侵入したんだよね？」

「真面目な顔になってルネにたずねた。」

「ええそうよ！ どう!? この華麗な侵入テクニク」

「だったら、その船まで案内してくれないかい？」

「うは、遮った！」



ルネの台詞遮って言ったよ!!

案外こいつも強引なところあるな……。

「つか急がないと船離陸しちまうんじゃないか？」

「よし! あたしにまっかせなさい!!」

と胸を張るルネの背後には、今まさに浮上した空駆船があった。

「ああああー!!」

俺らは声をそろえてびっくり仰天。

り、離陸したああああー!!

悪い予感はあるって言うけどホントだったんだな母さん……。

「ちよつと、なにこの世の終わりみたいな顔してんのよ」

俺らの顔を見てルネはあきれたような口調で言う。

「いや、後ろ向いてみる! お前のせいで船が行っちまったんだよ

!」

「ん?」

ルネは振り向き、現状を認識した。

「ああ、大丈夫大丈夫、捕まって!」

なんか余裕そうな表情で両手を俺とリードに伸ばしてくる。

?マークを頭に浮かべながら、俺たちはルネの手をつかむ。

「さあ、行つくわよ!!」

ルネがそう叫ぶのと同時に、俺らの体が浮き上がって。

嘘!? 空飛んでるっ!?

詳しく説明すると、ルネが勢いよく大地を蹴って、一瞬で飛行中

の空駆船と同じ高さまで飛び上がった。

「おiiiiiiiiiiii!! 飛ぶなら飛ぶって言えよおおおおお

!! 心臓止まるかとおもったじゃねえかああ!!」

やばい、高っ! 恐っ! そして気付いた。

「止まらなかつたんだからいいじゃない! 気に食わない事言つと

叩き落とすわよ!」

「すみません……」

俺らの命は、今の瞬間は手を握ってるルネにかかっているのだと

言う事を。

「それで！　これからどうするんだい！？」

こんな状況でも冷静さを保てるリードには敬服するぜまったく。

「もちろん……こうするのよっ！！」

ルネはさらに空中で空間を蹴るようにして高度を上げると、そこから斜め下に見える空駆船の側面めがけて一気に急降下した！

「ぎゃあああああー！！！！」

「うわあああああー！！！！」

俺涙目ええ！

っていつか目の前壁、壁えええっ！！！！

木の碎ける破壊的な効果音と共に、俺達は船内に侵入成功。

そう！　そのまま壁を突き破って船内に入ったのだ！

ルネはようやく俺とリードの手を放す。

俺とリードは半ば放心状態で寝転がり、とりあえず異常な鼓動を抑えようとする。

「はい、到着」

「ばつきやるおおおい！！　殺す気かてめえ！！」

俺はガバツと起き上がりながら激しく訴える！

もう、心臓がなんかおかしい！

心拍数ハンパない！

それもこれのこのコソドロ女のせいだ！！

「何よ！　無事侵入出来たんだからいいじゃない！！」

「これのどこが“無事”なんだ！　マジで死にかけたぞ！？」

「死ななかつたんだからいいじゃない！」

「よくねえ！　それからやる時はやるって言えよ！！」

「2人とも静かに」

リードは静かに怒鳴った。

うお、コイツ平静取り戻すのはえーよ。

そして俺らはようやく状況を理解した。

「随分なごあいさつじゃねえか兄ちゃん共オ！」

すみません、囲まれています。

ひーふーみー、ざっと、20人？

手には、剣、斧、ナイフ、小型の拳銃を持つてる者までいる。

オイオイ飛び道具は反則だろ。

そしてみなさん、壁を壊されたのが大層お怒りだったのか、そうとう殺る気だ……。

「……やるしか、ないね」

リードの声を合図に、俺達は覚悟を決めた。

## 第12話「ナイフじゃない、ダガーだ！」

前回のあらすじ……

担当：アーク・シュナイザー

モルゼスの森で俺達はルネという自称トレジャーハンター（笑）に出会った。

話を聞くにコソドロにしか見えんのだがそれは置いてくとして、履いていたブーツから風が湧きあがり、あっという間に俺達ごと疾風の翼の空駆船へ突撃した。

その物音を聞きつけてやってきたのは約20人のごっつい男ども。

3人相手に本気過ぎるだろ！！

とは言え大人しく捕まる気はないのでとりあえず戦うしかなさそうだ！

### 疾風の翼の空駆船内

「あっちゃー、なんかいつぱい来ちゃったわね、てへっ」

ルネはウインクしながら軽く拳を握りコツン、と自分の頭を叩く。

「てへっ じゃねえ！！ どうすんだコレ！ もうめんどくせーよ」

俺は何故かルネの真似をしながら言った。

目の前の男どもは完全に目が血走っている。

まじでねーわ……。

「落ちついてアーク、それ……キモいよ……」

真似をした俺を見て、リードが白い目で見てきた！！

「ちよ、この状況でそーいう事言うっ！？」

空気を読めよ！

「馬鹿な真似してる君が悪い。それより……やるよ」

リードは俺を呆れの目線で見たあと、視線を盗賊達に向けて、鞘から剣を抜き出した。

すると、リードの装備している右腕の籠手が若干光る。

これは騎士団が装備してる『古代兵器<sup>レイクス</sup>』なのだが、まあその説明は今は勘弁してほしい。

敵の目の前で延々と解説出来るほど俺は勇気が無い。

そんな感じで俺もダガーを抜く。

右を順手、左を逆手に構える俺独自の戦闘スタイルだ。

ルネは背中 of 槍を構え、

「ちよつと、あんたは下がってなさいよ。護身用のナイフなんかじゃ無理よ」

と言ってきた。

護身用ねえ……確かに、普通はそう見えるのかもかもしれない。

広い世界といえどダガーを武器にしているのは珍しいだろうし、コンパクトを活かして護身用ぐらいにしか持っていない町人や商人はまあ珍しくない。

でも、これだけは言わせてもらおう。

「ナイフじゃねえ！ ダガーだコノヤロー！！」

ナイフとダガーの違いも分からないとは……なんて馬鹿な女だ！

「大丈夫。アークは……強いよ」

と言つてリードはニヤリと笑う。

……期待されてんのかね。

「オイなんださつきからごちゃごちゃと！ 来ないならこつちから行くぞ！！」

正面の剣を構えた男がいきなり吠えてきた。

いや、それでも十分待つてくれたよお前ら。

やがて一斉に叫び声を上げ、掛ってくる。

……まったく、もうちょいスマートに出来ねーのかコイツらは……

…。

「う……うぎゃあああ!!」

俺は正面から走ってくる奴に向かって突撃し、剣を振る前に左手のダガーで左腕を斬りつけた。

そのあと俺の右側にいた男の手を右ダガーで切りつける。

「痛てええ! 手がつ!」

男は剣を放す。

「てんめえよくも!!」

斧を持った大柄な男が斧を一気に振り上げる。

その間当然ボディはガラ開きなので、俺は身を屈め遠慮なく右ダガーを横に払い、両足を斬った。

「うがああッ! くっそ……」

その時、背後から槍が俺を襲った。

「餓鬼がッ! 調子に乗るな!」

俺は咄嗟に振り向き、左ダガーで軽く槍を受け流す。

「誰が餓鬼だ! 俺はもう18だ!」

「十分餓鬼じゃねえか!」

ガギン、と金属と金属がぶつかり合い、擦れ合うことで僅かながら火花が散る。

「どいてアーク! はああッ!!」

「ちょ、危ねえって!」

俺達が鏝<sup>つばず</sup>擦り合っていると、突然リードが剣を薙いできた!

俺は間一髪体勢を低くしかわしたが、男は強烈な峰打ちを食らって気絶した。

「この野郎!!」

そんな俺を遠くから狙うのは拳銃を持った男。

おっとこれはマズい。

幾ら俺でも弾丸を見切れるスキルはない。

「飛び道具とか反則だろ! 喰らったらやべえ」

とりあえずジャンプして跳ねながら狙いを攪乱させる。

「ちっ! このガキちょこまかと……!」

拳銃の野郎は俺の狙い通りに銃をあつちこつちに向けている。  
くひひ馬鹿め。

「ええいム力つく野郎だ！ ならお前だ！」

拳銃野郎は狙いをルネに絞った！

「ルネ馬鹿あぶねえ！」

「馬鹿じゃな ってきやああ！」

拳銃野郎は発砲！

弾丸はルネの近くの木箱に当たって砕けた。

「ちょ、びつくりしたでしょうがああッ！！」

言つとルネは速攻でふとももからクナイを抜き3本同時に拳銃男  
に向かつて投げつけた！

逆ギレ！？

「いつてえええ！！」

手に刺さり、痛さの余り拳銃を落とす。

「ルネナイスだっ！ 眠つてる拳銃野郎！！」

「ぐはあッ！！」

俺は顔面にとび蹴りをお見舞いし、拳銃野郎を倒した。

「「今だッ！ そらああッ！」」

俺が拳銃野郎を倒した直後に左右から同時に攻撃！

掛声同じとか双子かよ。

だが甘いぜこの野郎！

俺のスタイルは360度が攻撃範囲なのさ！

「余裕」

俺は右ダガーを引き、左ダガーを振りぬくことで左右から突っ込  
んできた敵を同時に切った。

「なに……ばかな」

「馬鹿はお前だろ、そういう自分から飛び込んでくるタイプのはス  
ゲー捌き易いんだよ」

二人の腹辺りを軽く掻っ捌いて2人は倒れた。

「な……なんだこいつ……化け物だ……」

うめき声の中で、リーダー各つぱい男がそう呟く。  
誤解のないように言っておくが、1人も殺してないからな。  
けが人の山は出来てるが。

「嘘……もう終わったの……？」

ルネは信じられないといった顔で驚いていた。

確かになあ……大半俺が倒しちまったからな。

後の話によると、ルネが3人、リードが4人撃破だったそうだ。

「だから言っただろ？ アークは強いって」

確かに、俺もいつも以上に戦えた気がする。

なんていうか……体が軽いような……。

あれは、気のせいだったのか？

……まあいいか。

「とりあえず、倒したんだからとつとエル探さ」

俺が振り向くと、真近にルネの顔がドアップ！

「うわあっ！？ 近づい！」

俺のリアクションに動じることも無く、ルネはうんと唸りながら俺の顔を見る。

「あんた、意外といい男じゃない！」

「はあ！？」

「はあ！？」

俺とリードは全く同じリアクションをした。

いきなり何を言い出すんだこの女は！！

いいつつ、突然の急接近に思わず心拍数が跳ね上がってしまった  
自分が情けない。

情け無いけど……、うん、栗色のサラサラとなびく長い髪や、ぱ  
つちりと開いた綺麗な緑色をした目、なによりその整った可愛らし  
い顔立ちは、俺の中でもかなり上位に分類されていて……って、俺  
は何を考えてるんだああああ！！！！

「よし！ 気に入ったわ！ 特別にここから先も付いてってあげる  
！」



「……って、帰るつもりだったのかよっ!!」

「もちろん、バリバリ、完璧に。なぐらだってお宝も無いところにあたしが忍び込まなきゃなんないのよ!」

「……でもやつぱりこの破天荒な性格は許容できない。」

「なーによその微妙な反応はっ! 隠密行動のプロ、このルネ・ア―サス様がついてっであげるっっていうてるのよ!」

「どーこーがー隠密なんだよ! これだけ派手な登場のし方もないだろっ!!」

「いやあちよつと試したかったのよ! このブーツがどこまで使えるか」

「……そう言えば、聞くのを忘れてた。」

「そのブーツはなんなんだい?」

「思ったらリードが聞いてくれた。」

「昔ある城の宝物庫に侵入した時なんだけど」

「宝物庫!? そりゃ凄いな……っっていうかそれ犯罪!!」

「まあまあ細かいところはいいの! そんなとき見つけたのがこれ。『サイドレイズ体外装備兵器』の『ウインドブーツ』よ」

見た目普通のブーツに、なんか小さい羽のようなものとテニスボール大の青く光る球がついていた。

とても兵器には見えないが、ここ最近の兵器はそういうもんだっ  
た。

「さつきみたいに風を操作して空を飛んだり、風属性の魔素を借りて攻撃することも出来るんだ」

ルネはさも当然のように解説する。

「風属性の魔素?」

「が俺はよく分らん単語を思わずつぶやいてしまう。」

「学校で習っただろ? 地・水・火・風・雷・光・闇・聖の八大元素属性の1つだよ。魔素っていうのは僕達の体内や空气中に漂う微粒子の事だろ? 君はいつたい何を聞いていたんだ」

と丁寧に解説してくれるのは天才少年リード様。

そついやそんな事も習ったわ。

俺不真面目過ぎて殆どサボったり寝てたりしていたもんで記憶にない。

「天才少年君と一緒にするんじゃないやねえ。ついでに聞くが風属性の魔素ってのはどういう意味だ？ 元素と魔素ってのは違うんだろ？」

他の奴に聞いたら馬鹿にされそうなので今聞いておこう。

「はあ……。確かにその2つは違う物だよ。元々魔素に属性という概念は無いんだけど、魔素に元素を融合させた粒子。それが“風属性の魔素”だ。本来風元素というのは攻撃特性を持たないからね。その融合を可能にしたのも全てレイズのお陰さ。……分った？」

リード先生の授業は終わったようだ。

そのおかげで俺も色々と思い出してきた。

つまりアレだ、元素ってのは物質を作る粒で、魔素はなんかエネルギーみたいなもん。

んで2つを合わせると元素の属性に応じた力の魔素が生まれ、攻撃に利用できるってワケ。

おおう、なんか分ってきた！

俺って意外と頭いいじゃん！

「オーケーオーケー！ なんとなく分ったわ」

「じゃ、先を急ごうか。エルを助けなきゃね」

そついつて俺達3人は移動した。

### 第13話「男の仕事」

前回のあらすじ……

担当：アーク・シュナイザー

20人の盗賊に囲まれたが、他の盗賊団と違い相手に殺す気はなかったためか、俺らはなんとか勝てた。

俺らは先に進むのだった。

そう言えば、船内がやけに騒がしいが、何かあったのか？

エルが無事ならいいんだが……。

#### 疾風の翼の空駆船内・倉庫

謎の女に牢屋から救出してもらったのだが、そのやり方に納得できなかったジャミル達は、現在こうして銀髪の女に追い回される形となった。

エルとジャミルは、逃げてゆく内に広い倉庫のような所に出ていった。

ただし木箱や荷物が散乱しているため、物理的な広さよりも狭く感じていた。

「氷の刃よ！　アイスニードル！！」

スラリとした長身で、綺麗な銀色の長髪と燃えるような真っ赤な瞳の女は、右手に握る彫刻のようなレイピアをかざし、ジャミルとエルに狙いをすまし氷の槍を放つ。

「うおオオオッ！」

ジャミルとエルはその場に滑りこむように伏せて、頭上数センチ

というところで攻撃をかわす。

氷の槍はあっという間に木箱を破壊し、その威力をジャミル達に見せつけた。

あんなものを喰らってはタダでは済まない。

「チッ！！ エル立てッ！ 次が来やがるッ！」

ジャミルは既に立っただけ、

「分かってるよ！！！」

エルもその後を追う様にして立ち上がり走り出す。

「逃がすものか！ アイスニードルッ！」

三本ほどの氷の槍がジャミルを襲う。

「（まじイ！避けきれね）」

「ジャミルさん！！！」

瞬間、エルは庇うようにしてジャミルを突き飛ばした。

その結果氷の槍のうち1つは、エルの左肩を掠めてしまう。

「ううッ……！！！」

傷口を手で抑え、苦痛に顔を歪めるエル。

血がドツと溢れ出たが、それすら気にせずレイピアを直接向ける

銀髪の女。

「エルッ！ 馬ッ鹿野郎がアア！」

「わっ！」

ジャミルは咄嗟にエルの手を引き、そのまま木箱の山へと身を隠すように逃げ込んだ。

「デメエ！ なんて無茶しやがんだア！ 死にてエのか！？」

ジャミルは何故自分がこんなにも怒っているのか分からないまま怒鳴っていた。

もちろん、足は止めない。

「民間人を守るのは、騎士団の務めだもん！」

ジャミルはそれなりの剣幕で怒鳴ったつもりだったが、エルの方も逆に不満げな顔で抗議してきた。

あまり自分を曲げるタイプではないらしい。

「ああ？ 何寝言言ってやがんだア？ 騎士の真似事なんざ今時流行ンねエぞ」

実は、騎士というのは少年少女達にとっては憧れの的なので、真似は結構流行っていたりする事を、ジャミルは知らない。

「真似事じゃないもん！ 私これでも騎士団見習いだもん！！ ホラ、これ帝国騎士団本部入室許可証！」

エルは走りながらポケットにがさごそ手を入れて、一枚の名刺みたいのを取り出して自慢気に見せる。

「……マジかア。テメエが？ 騎士団？ ……あ、ありえねエ……」  
ジャミルの中では、既に“使えないドジっ娘天然トラブルメーカー的な駄目女”として既にイメージが確立してしまっていたのだから当然の反応と言える。

しかも、それが実際8割方合ってるのだから困る。

「ひどいリアクションだよ！ せっかく頑張つて 痛っ」

エルは抗議し、左腕を動かすが、途端に肩の傷が痛み出したらしく、右手で肩を押さえる。

「チツ……別にテメエが騎士団だとか関係ねエンだつーのオ。ただ、女が自分から飛び込んでンじゃねエよ。女護ンのは男の仕事だろオが」

エルの手を引きながら、ジャミルは前だけ見て何の気なしにそう言った。

普通の男なら言った途端赤面しそうなくさい台詞だが、生憎この男はそういった事は気にしないらしい。

「……もしかして口説いてる？」

キョトンとした顔でエルは首を傾げている。

「なっ……ンなわけねエだろオが！！ とにかく俺ア、無茶すんなつてンだア」

後ろを向いて顔を赤くしながら否定するジャミルの前に、木製の扉が立ちはだかった。

引き戸のようで、全力を振り絞ってもビクともしない。

「ちツ、開かねエ、行き止まりかよオ！」

ジャミルは扉を見て齒ぎしりをした。

木製の扉。

鍵が掛かっついていれば、何の装備のないジャミル達には突き破ることも開けることも不可能だ。

「どうするのジャミルさん！ 後ろにはあの女の人が！！」

エルが迫り来る恐怖に焦りながら言う。

「仕方ねエ！ 迂回して」

言った瞬間、ジャミルの隣の木箱がはじけ飛んだ。

ジャミルが首をその木箱に向ける前に、木箱の後ろから氷の槍が襲い掛かる。

「ちイツ！！」

ジャミルは脇腹と左腕の2ヶ所を負傷した。

そして、木箱の後ろから銀髪の女が歩み寄る。

「ジャミルさん！」

エルが叫ぶ。

「さて、凍殺と刺殺、どちらがお好みかな？」

銀髪の女は口元をニヤリと吊り上げ、レイピアをジャミルに向ける。

「どっちもお断りだクソ野郎オ」

ジャミルもニツと笑い、木箱から飛び散った鉄パイプらしき物を構える。

「そんなモノで私に刃向かえると？」

「ねエよりはマシだろオ」

とジャミルはこの危機満状況を逆に愉しむように言った。

「（ンだが実際どオする？ まさかホントにこんなちゃちい武器で勝てるたア思えねエし）」

頭を悩ましているとエルが小声で耳打ちしてきた。

「ジャミルさん聞いて、あの扉は私たちが壊せない。だから今ある方法は、あの人を利用するしかないと思うの」

エルは銀髪の女を見ながら話した。

対する銀髪の女は、依然ジャミルにレイピアを向けたままだが、ジャミル達が何を企んでいるのか楽しみに待っていた。

「なるほどオ、あのクソアマの攻撃利用して扉をぶっ壊すって訳かア、乗ったぜエ！」

そう言つと、ジャミルとエルは扉の前まで後退した。

「何を企んでいたのか知らんが、逃がすと思うか？ 氷の刃よ

！アイスニードル！」

銀髪の女はそう叫ぶと、6本もの氷の槍を飛ばす。

「ッだらアアア！！！」

ジャミルは叫び声とともにその場から横跳びで避け、氷の槍はジャミル達の行く手を阻んでいた扉を粉々に砕いた。

「ほう？ なるほど、そういう事か」

銀髪の女はそれを感じたように見る。

「でかしたエルッ！ 狙い通りだア、行くぞ！」

2人は壊れた扉を潜ろうとするが、

「行かせん」

銀髪の女は、ジャミルにレイピアを突き刺そうとする。

「ッ！ ……この野郎オッ！」

それを奇跡的な反射神経でかわし、直後に鉄パイプを横薙ぎに振る！

「つて……オイオイ……」

振った鉄パイプは、いつの間にか綺麗に三等分されており、振った瞬間バラバラになってしまう。

「これが、力量の差だ」

いや、紛れもなく装備の差だろ、とジャミルは思ったが、そんな事を言っている場合ではない。

ジャミルの隣をスツと抜け、銀髪の女はエルに向かった。

「さて貴様、覚悟を決めてもらおうか」

エルにレイピアが迫る！

「ッ！」

エルが気づいた時にはもう間に合わない。

その先端はしっかりと彼女にの心臓に狙いを定めていた。

「だアアアアッ！！！」

「何！？」

レイピアの狙いが歪む。

ジャミルが銀髪に体当たりを仕掛けたからだ。

突然の予期せぬ衝撃で一瞬体制を崩すが、すぐに整えると詠唱を始めた。

「チッ…… 大気に散る無数の冷氣よ！ 我が手に宿り剣と化せ！

コールドソード！」

だが、突然銀髪の女の手に発生した氷の剣で、ジャミルは右肩をざっくりと斬られる。

「がああアアアーッ！」

悲鳴をあげながら、勢いで吹き飛ばされドサリと尻餅をつくジャミル。

だがその勢いを殺さず、すぐに立ち上がった。

「ツク！！ エル逃げっぞオ！」

「え！？ あ……！！！」

怪我を負ったジャミルは、肩を庇いながらすぐにエルの手を引いて走りだす。

「酷い怪我……なんて無茶するのよ！！！」

肩は酷くえぐれ、血がドロリと出続けていた。

まだ見習いのエルは、こんな生々しい怪我を見たことは数えるくらいしかないなので、思わず目を背けた。

「言っただろオ、女護ンのは男の仕事だつてなア。だいたいテメエ人のこと言エンのかっつーのオ」

対して、魔物討伐のギルドに属するジャミルにとって、こういった怪我はそれほど珍しくもないのか、割としれつとした態度を見せていた。



ただ、聖属性……つまり治癒魔術師として騎士団で教育を受けているエルにはわかる。

ジャミルの表情の奥にある苦痛や、体から噴き出る汗、走る以上に荒くなる呼吸。

どう見ても、ただのやせ我慢でしかなかった。

本当はこの場で魔術を使わなければ行けない。

ただ、魔術詠唱中はどうしても止まる必要がある。

立ち止まり、あの銀髪に追いつかれれば意味が無い。

結局、今は走るしかないのである。

そんな時、前方から数人の人影が走ってくるのが見えた。

野蛮な服装に、頭には黄緑色のバンダナ。

間違いなく盗賊団、疾風の翼の団員だった。

「……マジかよ、とてもじゃねエが太刀打ちできねエぞ!？」

さすがのジャミルも焦りを見せる。

「どうしよう、隠れる?」

「バーカ、もう見つかってるっつーのオ!」

ここは一直線の通路だ。

隠れてやり過ぎすなど、どうにもできない。

エルとジャミルは、覚悟を決めた。

## 第14話「なんかとんでもないことに巻き込まれてる気がする」

前回のあらすじ……

担当：エルアス：ミルード

こんにちわ！

今回は私、エルアス・ミルードがあらすじを担当しちゃいます！  
どうぞよろしくお願いしまーす！

さてさて、怖い銀髪のお姉さんのお陰で外に出れたけど、人を簡単に殺す人は許せませんでした。

で、私は牢屋で一緒だったジャミルさんと一緒に逃げ出すんだけど、逃げてるうちに怪我はするし逃げ切ったと思ったら今度は盗賊団の人が来るしでもう大変！

「チツ……『疾風の翼』の連中かア……ふざけやがって」

ジャミルは齒軋りをし、エルは後ろを振り返りながら例の銀髪の女が来ないか確かめている。

女は別に必死で走って追ってくるようではなく、まるで獲物を追うのを楽しむようにゆっくり歩み寄ってきているだけだった。

そのお陰で、現在結構距離を稼いでいる。

今すぐに追いつかれる心配は無さそうだった。

まあ、突然走ってきたり先回りされたりといういろいろ可能性はあるのだが、そんな事まで計算に入れられてる余裕はなかった。

対して、盗賊団の連中はジャミル達を確認する前から駆け足で迫

つてきていた。

「クソがッ！ エルッ、突破すッぞ！ 走れエ！」

「あ、うん！」

2人は盗賊達を跳ね除けてでも走りだす覚悟を決めていた。

だが盗賊達は遠目で見て5、6人……いやそれ以上はいた。

しかも盗賊達の手には剣、槍、果てはポウガンを持った奴までいる。

その人数と武器相手に丸腰の人間がとる方法ではない。

それは2人も理解していたが、こうする他に方法がないというの

もまた事実だ。

引き返せば、あの銀髪の女が待っている。

そちらのほうが遥かに死亡確率が高いと見える。

「……あれ？ なんか……」

エルは違和感に気づく。

盗賊達は、距離が近づいてもその武器の先端をジャミル達に向ける素振りはない。

エルが一瞬不思議に思ったとき、

「おい止まれッ！ 俺達は敵じゃない！！」

盗賊団の一人が両手を上げて言った。

「あア？ どういう事だゴルア」

ジャミルが盗賊達を睨みつけて言った。

ただ、足は言われたとおりしつかりと止まっていたが。

「事情を説明してる余裕はない！ これ、お前らのレイズだ！ これ受け取ってとつとこの船から逃げる！」

別の男の手には、ジャミルの拳銃型体外装備兵器『ダブルバレッツ

ト』と、エルの杖型魔法詠唱兵器『ヒールチャージャー』が握られていた。

この男達は頭に黄緑色のバンダナを巻いているし、間違いなく『疾風の翼』の一員だ。

にも関わらず、わざわざ武器を渡すのは何故か。

ジャミルが一瞬考えると、  
カツン、カツン。

嫌な足音が聞こえた。

振り返ると、銀髪が、遠くで歩いていた。

「出やがったなッ！！ 疾風の刃よ！ ウインドエッジ！！」

剣を構えた男が、魔術を詠唱して放つ。

U字型の鋭い風の刃が、銀髪の女を襲う。

「燃やせ！ 紅蓮の炎！ フレイムブラスト！」

数個の炎の球体が、ジャミルの横を通りぬけ、そのまま銀髪へと向かう。

そして、ジャミル達を覆い庇う様にして、盗賊達は一斉に前に出た。

「て、テメエら……？」

ジャミルは敵だと思っていた盗賊の行動に驚いて混乱する。

「馬鹿野郎！ なにしてる早く行けッ！」

「俺達は命を奪うのは嫌いなんだ！ 船内で一般人に死なれちゃ後味が悪いってモンよお！」

「あの女が狙ってるのは俺たち盗賊だけなんだ！ 巻き込まれたくなかつたら急げ！！」

ジャミルとエルは見落としていた。

銀髪の女は、盗賊を許せないと言ったのだ。

彼女の本当の敵は盗賊でありその逆もまたしかり。

つまり今盗賊達は、銀髪に剣を向けてもジャミル達に剣を向ける意味はないのだ。

それが自分たちで捕まえてしまった一般人であるなら尚の事。

彼らは、何よりも命を大事にしているのだから。

「よオし、そオ言う事なら俺も」

「分かりました！ 有難うございます！ ほら、行くよジャミルさん！！」

「ぬオい！ 引ッ張ンなッ！」

ジャミルとしては、武器を手に入れたら退く理由が無くなったんだろう。

得意げに『ダブルバレット』……二挺拳銃を構えたが、エルに問答無用で連れ去られた。

走ってゆく二人を眺め、興味なさそうに目を細める銀髪の女は、既に盗賊達はジリジリと迫っていた。

「……ふん、盗賊は……全て消す」  
ぞくり、と。

男達の全身に悪寒が走った。

空気が、変わった。

まるで全身が氷水に浸かったように、空気の全てが凍りついたように。

「絶対零度の世界、身を切り裂くような雨」

右手に持ったレイピアを逆さにし、足元に突き刺す。

それを中心に、凍えるような青色に光る魔方陣が組みあがってゆく。

「我が武器となりて、眼前を埋め尽くせ」

幾つもの円や星型、文字、図形、記号、その全てが複雑に絡み合い、1つの芸術を創り上げる。

周囲に霜ができ、やがてその霜が空間で鋭く細い氷の槍に変化してゆく。

それは盗賊達を囲むように、というレベルではない。

一定範囲のすべての空間に、無数に配置されてゆく。

男達は、もう、動けなかった。

「ブリザードレイン!!!」

叫んだ瞬間、無数に配置された氷の槍は、無秩序に暴れだした。

それでいて、術者本人だけには当たらないよう、上も下も右も左も手前も奥も関係なく、無数に無残に無秩序に。

避けることなど不可能だった。

吹雪の中で、傘もささずに雪の粒1つ1つを避けられないのと同

じだった。

男達は、その詠唱のとおりに全身を切り裂かれ、悲鳴も断末魔も遺言も残すこと無く、この場で肉片となった。

やがて、銀髪の女はレイピアを地面から抜き、魔術を終了した。

あたりに漂う吐き気のするような血の匂いに、口元をニタリと歪めながら、

「言ったはずだ。盗賊は全て消す、とな。そして、盗賊に味方する、貴様らも同じだ」

血溜まりを踏み歩き、銀髪は再びジャミルとエルを見据える。

「ちい……」

ジャミルは二挺拳銃を構え、齒軋りする。

最早戦闘は、避けられなかった。

一方アークらは

俺達は、ルネの阿呆みたいな登場で引き寄せられた盗賊を蹴散らし、船内を探索していた。

もちろんエルを捜す為なのだが、

「おいおい、なんだかやけに静かすぎじゃねえか？」

俺は先頭を歩くリードに言う。

そう、なんだかあれから、物音ひとつしないのだ。

まるで、この船から誰も居なくなってしまったような、そんな気さえした。

いや、さすがに飛んでるんだからそれはないだろうけど。

「確かに……あんな派手な登場したんだら、もっと敵が動いてもいいはずなんだけど……」

リードもアゴに手を当てうーむと唸る。

「おやおや？ さっそくルネ・アーサス様の隠密行動の結果が」

「オメーは黙ってる」

ルネが馬鹿な事を言い出したので俺が丁重にツッコミを入れる。

「ちよつと！ あたしには発言権が無いって言うの！？ ここにあんなたちを運んだ最ツ大の功労者たるあたしが！」

ギャーギャー騒ぐルネ。

早速隠密じゃねーよコイツ！

「はいはい分かったって……、ちなみに、君はこの状況をどう見る？」

リードは呆れた後真面目にルネに問う。

「うーん、あたしたちに向けた何らかの罠か、もしくはどっか別の場所であたしたちが侵入したことより大きなトラブルが起こってるってとこかしらね？」

お、珍しく真面目に答えたようだ。

「へえ、お前って意外にキレ者だったりする？」

俺はルネからまともな答えが返ってきたことに少し感心した。

「意外って何よ？ あたしはこれでも、名だたる盗賊団からお宝を巻き上げた天下一の大泥棒なのよ！」

「自分で泥棒って言いやがったよこいつ！」

「あつ、間違えた、天下一のトレジャーハンターよっ！」

「いやもう手遅れなんだが……」

前言撤回。

やっぱ駄目だコイツ。

そんな阿呆みたいな会話を繰り返していると、突然リードが足を止めた。

「おい、どうしたんだ？」

俺はリードの後ろにいたので、前に何かあったのかと思い尋ねた。

「……死体だ」

「……え？」

リードは道をあけた。

するとそこには、全身を引き裂かれたような死体の山と血の海が

あつた。

かろうじて原型は留めているものの……、肉は裂け、そこから黒い血が流れ、中には骨と思われるなんか白いものが……うん、これ以上細かく描写するとR-18になってしまつのでやめよう……。そして次の瞬間、恐ろしい吐き気が襲つた。

「うっ……ひつでえ……誰が……こんな事を……」

俺は死体の山から目を背けた。

直視できない、酷すぎる……。

「アーク、大丈夫かい？」

リードはしゃがんで口元を押さえる俺の背中をさする。

「おい……お前は、なんで平気そうなんだよちくしょう……」

俺はリードの手を払いのけて立ち上がる。

「僕だつて平気じゃないさ、やせ我慢だよ」

よく見ると、リードも顔色が悪い。

この状況でやせ我慢とは、なんという見栄っ張り。

案外女がいるからかつこ良く見せたかったパターン？

言つてもいいが、俺は空気を読んで自重した。

さすがに……ねえ？

「これきつと……、『盗賊殺し』の仕業だよ」

ルネは死体を見ながら言った。

妙に確信めいた言い方だったので、俺は聞き返す。

「なんだ？ その物騒な名前は？」

「最近こちら辺で盗賊を殺しまくってる女がいるっていう噂だよ。

銀髪赤眼の女で、たった一人で現れては盗賊を皆殺しにしていくなつて言う女。この前盗賊から盗み聞きした話なんだけど、まさか出会つちゃうなんて……」

ルネはわたわたした様子で早口に説明していく。

「つまりその『盗賊殺し』が、この船内にいて、この人達を殺したつて事なんだね」

「うん……あたし達で敵う相手じゃないよ！ 早くここを離れない



と……」

その時俺は、どう仕様も無い怒りを感じていた。だって、コイツらだって生きてるんだろ？

いくら盗賊やってたからって、こんな無残に殺されて許されていいのかよ？

「許せるはず、ねーよ……！」

「アーク？」

俺は、ダガーを握る拳が震えていた。

さつき感じていた恐怖と吐き気は、微塵も感じられなかった。

「悪い、俺はこれをやった犯人を探す。まだ近くにいても知れない」

「アーク！ 君は何を言っているんだい！？ 今はエルをさがすのが先だろ！」

リードは俺を正気を失った奴を見る目で見て言った。

「分かってる！ けど、こんなの見て黙ってられるかよッ！ お前騎士団だろ！？ なんにも思わないのかよッ！！」

俺は怒鳴っていた。

怒りをぶつけるべき相手はリードではないのに。

「……ッ！ でも今は……やはりエルが先だ！ もしかしたら、エルにも身の危険が迫ってるかもしれないだろ！」

ああ……、そういう事か……。

コイツは、エルの身を第一に考えてたんだな。

はぁ、俺は頭が熱くなりすぎてエルを見失ってたってことか……。……そうだな、悪い。ちょっと熱くなってた。分かった。とりあ

えず、エルと合流すっか」

俺は頭を冷やして、リードに一言謝った。

「それよりルネ。お前は何も無理やり俺達に付き合う事ねーんだぞ？ お前のそのブーツなら、こっからでも帰れるだろうし」

俺はルネに言った。

本来ルネには、ここに案内してもらっただけで十分だったんだし、

これ以上命の危険を犯してまで付き合ってもらうのは酷だ。

「ふふ、何今更水くさい事言ってるのよ。ここまで来たからには最後まで付き合おうよ！」

いい笑顔で、ルネは俺とリードの肩を叩いてきた。

「ったく、お前もホント馬鹿だよな、わざわざ見ず知らずの  
ッ  
！」

その時、ぞわり、と奇妙な感覚が体を襲った。

まるで、全身が氷水に浸かったような酷く凍える感覚。

「殺………気？」

リードが呟く。

そう、これは殺気だった。

このおぞましい殺気の正体は……。

「きゃああああ！」

この声………エル！？

俺達は、悲鳴の元へ駆けつけた。

## 第15話「盗賊殺しのチート女」

前回のあらすじ……

担当：アーク・シュナイザー

20人の盗賊団を撃破し、俺らは先へ進むんだがなんだか船内が妙に静かだったことに気づく。

なんでだろう……少なくともアホルネの隠密行動説はないな。

よく分らるのでとりあえず進んでみると、リードが死体の山を発見。オイオイこれはマズイだろ、主に年齢制限的な意味で。

じゃなくて!!

いくら盗賊やつてるからって無残に殺しすぎだろ。

どんだけ恨みあったんだよ。

いや、恨みがあったからってひどすぎるって。

殺した奴マジありえねえ、見つけたらブン殴ってやる!

……と1人で勝手に熱くなっていたがリードの言葉で眼が覚める。

目的はエルの発見だったな。

危ない目にあつてなきやいいが……って思ってるうちに、

向こうからエルの悲鳴!?

早速かよ!?

「エルッ!」

声のした方へ辿り着くと、そこにはエルの他に、2人の人間が立っていた。

1人は、黒いコートに身を包んだ赤髪の男。

全身をネックレスやピアスなどギンギラアクセサリーで構成し、カツアゲとか普通にやりそうな不良青年だった。

その上、手には黒光りする二丁の拳銃を握っていて、見た目言えれば危険度MAXな人物じゃね？

ただ、追い詰める”敵”からエルを庇うように立ち、左手を水平に伸ばし、右手の銃口で”敵”をしつかりと狙っていた。

そしてその”敵”とは、綺麗な長い銀髪をたなびかせ、右手に彫刻のようなレイピアを握る赤眼の女だ。

その”ヤバ度”は軽く拳銃を構えた不良を上回る。

なぜなら全身からおぞましい程の殺気を放ち、その殺気をレイピアにのせ赤髪不良とエルに向けていたからだ。

そして肝心のエルはというと、左足を今斬られたようで、ふくらはぎからどくどくと血を流していた。

他にも追われる途中で負った傷が数ヶ所あるようだが、倒れながらも銀髪には力強い抵抗の眼差しを見せていた。

だが俺達に気づくと、驚いて、

「アーク！ リード！ なんでここに！？」  
と叫んだ。

「なんだ貴様らは……その格好……盗賊団ではないな？」

女は、凍りつくような殺気の籠った目で言った。

間違いようがなく、コイツが殺気の正体で、ルネの言っていた『盗賊殺し』だろう。

俺は確認する意味で口を開く。

「お前が……お前がああ『盗賊殺し』か」  
女はふん、と鼻で笑い答える。

「だからどうした。私の敵は盗賊だけだ。私に刃を向ける必要はあるまい、少年」

「そつも行かねー。そこの2人は俺の仲間なんだ。そいつらは盗賊じゃねーよ。お前、一体何やってんだよ」

俺はリードに目で合図を送った。

俺が会話で引きつけて、その隙にリードとルネであいつら2人を逃がすという完璧な作戦！

「愚問だな。盗賊団を潰しに来た。それだけだ。邪魔する者は皆排除する。それは貴様やそこにいる貴様の仲間とて例外ではないぞ？」  
とりあえず話は通じる奴らしいが、どうも相互理解して和解という平和エンドは期待できそうにない。

それに盗賊に何の恨みがあるのか知らないが、あんな殺し方は絶対許されねえ。

許されていいはずがねえ。

「……そうかよ。お前が盗賊にどんな恨み抱えてんのか知らんねーけどさ、だからってあんな無残に殺す必要はないだろッ！ 人の命なんだと思つてやがる！」

……なんでこんなに自分が怒っているのかは分からない。

そりゃ、エルを傷つけられたのもあるんだろうけど、見知らぬ盗賊相手に何故か俺は怒っていた。

なんか、納得いかねーんだよ。

ただ盗賊やつてるってだけで殺された人達をみたから。

そいつらがどんな人かは知らない。

もしかしたらどうしようも無いほど腐った奴かもしれない。

でも、殺すことは無いんじゃないか？

俺がそいつらを庇う理由なんてない。

でも、理屈でどうのじゃなくて、本能的に、許せない部分が確かにあった。

そして、不思議と自分が間違っているとは微塵も思わなかった。

「殺す必要はない、か……貴様もあの少女と同じことを言うのだな」  
「へ？」

あの少女って……エルか？

「何故、そう思う？ 奴らは悪だ。排除しなければいけない。そしてそれを邪魔する貴様らも」

その瞬間、女が消えた。

いや違う、移動した！

狙いは……エルにこっそり近寄ったリードだッ！

「悪だッ！！」

「な！？ うわああッ！！」

リードはあまりの素早さに対処しきれず、レイピアで左腕を斬られた。

「リードッ！！」

エルが叫ぶ。

くそッ！

リードに追い打ちを掛けようとする銀髪の後ろ姿が見える。

俺はその後姿にダガーで攻撃しようとするが、間に合わない！  
ガキン、と。

リードと銀髪の間で金属同士がぶつかり合う音が鳴り響く。

間一髪、剣でレイピアを受け止めたようだ。

「ほう、いい反応だ」

「うるさいッ！ エルに手を出すなッ！」

銀髪は戦いを楽しむように微笑をリードに向ける。

リードはレイピアとつばずり合いをしたまま睨み付けつつ、目で俺に合図を送る。

今しかない！

「行けルネッ！」

「あいさー！」

俺はルネに合図すると同時に銀髪に攻撃を掛ける！

「うらああッ！」

逆手持ちしたダガーの左手を振る。

背後から襲ったのに、恐ろしい反応速度で振り向く。

リードの剣を軽く弾き返した後、レイピアで斬撃を受け止められた。

やっぱ叫んだのは失敗だったか！？

その隣をルネが超高速で駆け抜けた。

傷ついたエルと赤髪不良を助けに行く作戦はなんとか成功だな。いや、作戦と呼べたほど計画的じゃなかったけど。

「なかなか頭のいい作戦だが、それでこの私を倒せるとでも？」

「さーてなッ！」

俺は左ダガーを滑らすようにして離れた後、銀髪の背後に回ろうと横に移動するが、

キーン！ と、見えない程速い斬撃が俺を襲った！

俺はほぼ反射神経で右ダガーをかざっていた為偶然にも攻撃は防げた。

ただその衝撃が尋常じゃなかった為、俺は思わず仰け反ってしまった。

そこに必殺の突きが！

かわせ、るかッ！？

頭が考えるより早く俺は体を動かし、気がつくとも左前方に飛び、奇跡的にも攻撃をかわしていた。

そこにさらなる追撃が！

ちよ、さすがに死

「燃えやがれエ！ ファイアバレットッ！！」

ななかつたようだ……。

俺の目の前に4発の炎の弾丸が走り、それは銀髪に向かった。多分赤髪不良の攻撃だと思う。

銀髪は爆発する炎に巻かれたが、その炎の中から出てきた銀髪が無傷なのを見ると、あの一瞬で攻撃を防いだらしい。

なんとというチート。

俺も目の前の爆発でちょっと火傷したが、命には代えられん。

俺はとりあえずバックステップで距離をとる。

「さてアーク。こうなってしまうた以上仕方ないね……始めるよ」

リードは剣を構えて俺の隣に来て言った。

どうやらこの女を倒さないと話が先に進まなそうだ。

「久々に全力出せよ？ 加減して倒せるようなヤツじゃねーしな」  
俺は横目でチラリとリードを見て言った。

妙な高揚感に体が包まれ顔が綻ぶ。

「悪イが俺も混ぜてもらおうぜエ。あのクソ野郎にやでっけエ借りを  
作っちまったからなア」

そう言っつて、二丁拳銃を持った赤髪不良も隣に並んだ。

エルとルネは、恐らくどこかへ逃げているだろう。

ちなみに負傷していたリードと赤髪不良は、エルの魔術で治癒し  
てもらったようだ。

「フン、小賢しい……。貴様らでは私を倒すことなど……不可能だ  
！」

こうして、なんでか俺&リード&赤髪不良VS謎の銀髪女の戦闘  
が幕を開けるのであった。



## 第16話「重要なのは相手の予想を超える事」

前回のあらすじ……

担当：アーク・シュナイザー

悲鳴の元に駆けつけるとそこにはエル、赤髪不良と銀髪女（共に名前不明）がいた！

俺は銀髪女の実力にかなわないと判断し、戦闘を回避しつつエル救出に取り組もうとするが失敗。

ルネにエルの安全を頼み、男3人は銀髪女と対峙することになってしまった！

3対1でも勝てるか分からんが……ええい！ やるしかねえ！！

「吹っ飛びやがれッ！ ファイアバレットッ！！」

先陣を切ったのはジャミルだった。

サイドステップをしながら、4発の真っ赤な弾丸を放つ！

「凍てつく壁よ！ 我が盾となれ！ アイスウォール！」

銀髪女は魔法を詠唱し、目の前に氷の壁を作って弾丸を防いだ。

弾丸は氷の壁に当たると爆発して壁を破壊したが、銀髪女には当たっていないようだ。

だが隙は出来た！

俺とリードが左右から挟むように突撃！

「はあッ！！！」

リードが縦に1撃するがひらりとかわされる。

同時に俺はリードの反対側から左ダガーで胴体を狙う！

「遅い」

だが衝撃とともに俺の左手は弾き返された。

おい攻撃速過ぎだろ！

レイピアが見えなかったぞ！？

その隙に銀髪女の強烈な突きが俺の頭部を狙う。

俺は殆ど反射で右ステップし、その攻撃をかわす事に成功。

すぐに動かないとやべえと俺の本能が警鐘を鳴らしていたが、逃げに転じれば恐らくずっと銀髪女のターンになりかねないので思い切って攻めに転じる。

「うおおおッ！ リードッ！！」

俺は特に意味もなくリードの名を呼んだ。

そのお陰で女の注意が一瞬リードに向く。

その一瞬の隙に俺は銀髪女の懐に攻め込むッ！

「させん！ 凍土よ、標的を突き刺せ！ レイディフローズン

ッ！

が、攻め込む前に銀髪女はバックステップからの魔法を放った。  
なにこの素早さ。

と思う前に俺の足元に水色の魔方陣が！？

「ちよ、やば！」

俺はとっさに後ろに下がるとその瞬間、魔方陣からハリネズミのように氷の棘がワツと出てきた。

「痛え！！」

俺は左腕をブツ刺された。

やばい強いコイツ。

っ！か割とマジで殺しにかかってるよね。

これ俺ら勝てんのか？

無理じゃね？ 人生詰んだかも知れん。

「はあああッ！ ショックブレード！！」

俺が一瞬アホな事考てる間に、リードが銀髪女に斬撃を仕掛ける！  
剣を下から上に薙ぎ、“風の魔素”の衝撃を与える剣技だ。

「痺れるッ、サンダーバレット！！」

同時に赤髪不良も援護射撃。

“雷の魔素”の弾丸を撃つ！

「ちっ！！」

赤髪不良の攻撃はかわされたが、リードの攻撃はヒット！

よっしゃチャンス到来！！

この好機逃すべからず！！

「どらあああッ！！」

俺は変な叫び声をあげながら突進！！

「甘いッ！！」

銀髪女はレイピアで俺の頭に豪速突き（勝手に命名）を繰り出す！

「よつと！！」

がそんなのお見通し！

俺は豪速突きを仕掛けて来るだろうと思いつき始めからかわす準備を  
していたのだ！！

突き回避と同時に、ちよつと痛むが地面に左手を当て前転。

直後に前転の勢いを利用し右ダガーで胴体を狙う！！

「つだらあッ！！」

「くッ！！」

当たった。

当たったよオイ！！

俺のダガーが右肩を負傷させることに成功！

「いいぜエテメエッ！！」

銀髪女はすぐにレイピアを構えてきたが、脇から突然赤髪不良が  
突撃、飛び蹴りを繰り出した。

「なにッ！？」

銀髪女は驚き、とっさに左手で受け止めるがよろける。

そりゃそつだ、俺もびっくりしたもん。

赤髪不良は受け止められた反動を利用し空中へジャンプ。

「持ってけエ！ バーストオ、バレットオオ！！」

そのまま空中で攻撃を放った！

右手に持つ銃に魔素を溜めてから撃った。

弾丸はまるでレーザーのように飛び、銀髪女のいる地面をえぐった。

「……破壊力は認めよう。だが、精度はイマイチだ！」

砂煙の中から声がした。

なんと女はあの予想外の連続だった攻撃をかわしたらしい。

コイツもう人間じゃねーよ。

「それはどうだろうね……閃光撃ッ！！」

いつの間にか後ろに回っていたリードが素早く二撃！！

“光の魔素”を使った技だ。

余りの速さに残像が見える。

だが、あれですら二撃

目は防いでいた。

「な……！！」

「いい技だ。だが経験が足りん、なッ！！」

防がれた事に驚愕するリードの剣を「な」の部分で勢いよく弾く。

「うッ！！」

態勢を崩し、躓くリード。

ちよ、危ねえ！

「 破裂する凍牙よ！ アイスデッド！」

銀髪女は横にレイピアを薙ぐ。

するとレイピアの軌道上で氷の塊が広範囲に破裂し、尖った氷の

破片がリードと赤髪不良を襲った！！

「うわああッ！！」

「ぐウウウッ」

2人は衝撃で驚くほど遠くまで吹っ飛ばされた。

おいやべえ、大丈夫かよ！

っていつか今度は俺の番じゃね？  
やばい死ぬ！

「さて、次は貴様だ。何か言い残す事はあるか？」  
銀髪女は俺に剣先を向ける。  
剣じゃないけど。

ああもう……こうなったらもうあの手を使っしかねえ……！！  
俺はこれで剣術指南に来たロウって騎士を倒したんだ！  
ならいけるはずだ！

「あゝあ、もう終わったわ。残念！ 終了！ さようなら！」  
俺は全てを諦めたような顔をして、ダガーを2つとも空中に放り  
投げた。

「！？」  
目を丸くして驚愕する女。  
視線が一瞬上を向く。  
今だッ！！

その瞬間俺は出せる力全てを振り絞り女にタックルするような勢  
いで突撃！！

同時に靴に仕込んだ予備ダガー1本を抜く！  
「でええいッ！」  
「そんな攻撃ッ　！！」

攻撃、これは女に防がれる。  
が予備のダガーがレイピアに触れる瞬間、俺はダガーを離す。  
「なっ！？」

まるで攻撃をスカったように身を崩す銀髪。  
そりゃそうだ、思い切り弾いたのはただの空中にあるダガーなん  
だから。

そして先ほど、俺はダガーを銀髪女の真上に落ちるように投げて  
いた。

ちょうどこのタイミングでキャッチできるようになー！！  
俺はダガーを2つともキャッチし、キメ技を放つ！！

「喰らいやがれッ！ クロスエッジ！」

十字に銀髪を切り裂く！！

左手が怪我して痛かったが、全力で放ったつもりだ。

そのはずなのに……。

……そこまでしても防がれてしまう悲しき現実がここにある。

ちよ、これはマジで予想外だぜオイ。

だが女にも余裕はなかったらしく、ギリギリで鏝擦り合いになった。

「フン……少しはやるようだな……！ 久々に驚かされたぞ」

銀髪女は楽しそうにニヤリと笑った。

「こつちも驚いたっつーの。お前本当に人間？」

俺は力を弱めず均衡を維持した。

腕が笑ってるぜ！

オイだれかヘルプミー！

「……さてな」

「ちよ、そこ曖昧な答えなのかよ！？ そこはハッキリしとこつぜ  
！」

……こいつが人間かどうかマジで疑わしくなってきた。

つーかそんなのはどうでもいいから誰かこの状況を助けて！

「貴様……何をヘラヘラしている……私を舐めているのか？」

あれ……？

なんかお怒りのようですが……。

ちよ、睨むな普通に怖い。

「いや待て待て！ 舐めてない舐めてない！ これが俺のスタンダードであつてだな、別にお前がどうつて訳じゃなくて」

「よくもやりやがったなア！ ファイアバレットツ！」

絶妙なタイミングで赤髪不良が復活！！

炎の弾丸が銀髪女を襲う！

っていつか俺も危ねえ！！

「ちッ！！ 小癩なッ！！」

女は鏢擦り合いをやめ、レイピアを思い切り振り俺を弾き飛ばす。俺は余りの急な力に対処できずぶっ飛んだ！

まだこんな力残ってたのか！？

「ぐッ！！」

壁に背中を強く打ち付けた。

「う……くっそ……」

なんて衝撃だよ……！

立ち上がるうとするも、手足に思うように力が入らない！

女は地面にレイピアを突き刺して水色の複雑な魔方陣を一瞬で組み上げると、

「絶対零度の世界、身を切り裂くような雨」

目を閉じて詠唱を始めた！

なんかヤバそうなんだが！

「この魔法……まさかアレか！？ ふざけやがってエエッ！ バーストオ」

赤髪不良はぎりりと苦い顔で歯ぎしりをする。

そして、右の拳銃を詠唱中の銀髪に向け、銃口に魔素を溜めていく。

「バレットオオッ！！」

瞬間、拳銃から一筋の閃光とでも云うべき速度で弾丸が射出された。

閃光は、寸分の狂い無く銀髪に命中した と思った。

だが赤髪不良の必殺の一撃は、魔方陣からでる水色のオーラに阻まれてしまう。

俺の学校に行った頃の知識によると、今の状況はちょっとシャレにならないと思う。

魔方陣とは、魔術の術式を図柄的に示す設計図のような物で、詠唱とは、その設計図と体内の魔素を繋ぐ言葉だったはず。

つまり、魔方陣が複雑な形であればあるほど、詠唱が複雑なら複雑なほど、その魔術は強力なのだ。俺は学校で教わった……多分。そこから導きだされる結論はつまりあれだ、マジでヤバいって事だ！！

俺は復活していたリードに叫ぶ。

「リードッ！　なんとか詠唱を止め　」

「無理だッ！　早くこの場から離れるんだッ！」

俺が言い終わる前に、リードは俺の腕を掴んで走る。

「オイッ！　なんで攻撃が効かねェんだア！」

赤髪不良が追いつく。

「詠唱中に魔陣壁を展開してる！　あの魔力じゃいくら攻撃しても僕達じゃ破れない！」

リードが走る。

「魔陣壁？　つて、何だ？」

俺は掴まれた腕を離す。

「術者が詠唱中に自身を守る壁だよッ！　学校の基礎座学で習っただろー！！」

後ろを振り返る。

「あ、俺その授業寝てたわ」

「俺ア学校行つてねエし」

「ったく君たちはもオオオオ！！」

リードは俺と赤髪不良にキレ気味になりながらも俺達は魔術のどこかも分からない有効範囲外まで逃げようとする。

「ふふふ、足掻いても無駄だッ！　我が武器となりて、眼前を埋め　ッ！」

その時、女の後ろから衝撃波が襲った！

発動間近というところで詠唱は寸断された。

俺じゃない！

リードでもジャミルの攻撃でもない……。

誰だ……？



「よくやく見つけたぜ。発見した部下の連絡が次々に途絶えるものだから、探すのに苦労したぜ」

緊張感のかけらも無い声を出したそいつは、真っ白なスーツにシルクハットという、相場に場違いな格好をしていた。

手には両刃の薙刀を構えている。

って……この声は……

（なんだいなんだい、こんな廃屋で物音があつたと思つたら。面白そうな事やってんじゃねーか。俺も混ぜるよ）第7話参照

あの時俺を助けてくれた男じゃねえかああああ！！  
なんでここに！？

「貴様……何者だッ！」

銀髪は氷のような目で睨みつけながら、攻撃してきた男を睨み付ける。

普通なら攻撃するチャンス！ な訳だがここは空気読んどく。

なんかカウンターされそうだし。

「おお怖い怖い、睨まれただけで魂持ってかれそうだ。ま、お前さんが一番嫌いな盗賊の頭つてとこか？ 疾風の翼団長、ハリス・ロレンスだ。名乗ったからにはお前さんの名前も聞かせてもらうぜ？」

団長……？

こいつ、団長だったのか！

意外すぎるわ！

しかもそう言えば、銀髪女の名は知らなかったな。

「ふん……『盗賊殺し』、エイリアス・ラクシリアだ。分かつたら消えてもらおうッ！ 貴様を消せば、残るのは烏合の衆に等しいッ

「!」

女の名前はエイリアスと言っらしい。

っっていう場合じゃねえ!

エイリアスはレイピアを構え、高速でハリスに迫った!

あの豪速突きか!?

「消える? 冗談よせよ。俺の部下散々殺しやがって……消えるのは お前さんだ」

その瞬間、ハリスの雰囲気が変わった。

ハリスとエイリアスは交差し、思わず目を閉じるような閃光が散った。

ど、どうなつたんだ!?

見えねえよあんなの!!

「ば……かな……ッ!?!」

エイリアスは膝をついた。

腹からどろっと血が流れ出ている。

勝つ……た、のか?

だがエイリアスの顔は、笑っていた。

「貴様……強い、強いな……だが、これで勝つたと、思っな、よ……」

ドサリ、という音がして、エイリアスと名乗る『盗賊殺し』はその場に倒れた。

え……死んだ、のか?

「ふっつ、終わったか……。ま、『疾風の翼』の名に懸けて命まではとらねえよ。せいぜい島流し程度で簡便してやるって」

疾風の翼団長ハリスは、倒れたエイリアスの前に来てそういつた。……そういや、疾風の翼は命を奪わない事を決めてるんだっけな。

「そういやお前さん達だっけ? 船の壁突き破って侵入したの。だいぶ消耗してたぜ、この野郎は。お疲れさん、助かったぜ」

そう言っってハリスは俺の左肩の上に手をポン、と乗せた。

その衝撃は刺されて血が出る傷口に響いた。



## 第17話「とりあえず生き残れた」

前回のあらすじ……

担当：アーク・シュナイザー

銀髪女に俺&赤髪不良&リードで戦いを挑む羽目になってしまった。だが銀髪女は強すぎた。

なんだよこの達成不能なミッション。

さすがに誰か死んだらシャレにならないのでとりあえず頑張った。俺のハツタリ&華麗な作戦で勝てるかと思いきやそれも残念な結果に。

しかも俺の態度が気に食わなかったらしく殺気を煽ってしまうが赤髪不良の攻撃で助かった。

劣勢は変わらず、相手がなんかヤバそうな魔法を放つ　瞬間に、別の男の衝撃波がエイリアスを襲った。

そいつの正体はなんと疾風の翼の団長の「ハリス・ローレンス」だった！

同時に銀髪の名が「エイリアス・ラクシリア」だと判明する。

結局、ハリスとエイリアスが一騎打ちし、ハリスが見事勝利を収めた！

が、最後の最後にハリスの「ポン」が俺を攻撃した……。

「いやぁ悪かった悪かった！　リディ、治してやってくれねえか？」

上から下まで真っ白なスーツのハリスは、はっはっはと笑いながら後ろにいた団員に声をかけた。

「コイツ全然悪いと思ってねーよ。」

「あ、はい、今治します……、天よ、我らに聖なる活性を、エイドー！」

そう言っただけで俺と赤髪不良とリードに治癒魔術がかけられた。

術師はちよつとオドオドした態度の、見た目14〜15歳くらいの少女だった。

薄茶色のシヨートで、てっぺんから少し右をちょこんと髪留めで縛っている。

服装は一目で魔術師と分かってしまいそんな真っ白いローブで、黄緑のバンダナはさすがに頭ではなく右腕に巻きつけている。

そのちっこい治癒魔術師の魔術「エイド」は、体中を優しい風が包んだと思うと、傷口が塞ぐ。

「あの……えと、治癒魔法で治せるのは、傷口だけで、血や体力は元には戻らないので……気を付けてください」

うーむ、人見知りなのだろうか？

すっごく弱いというか……やはりオドオドとした口調だ。

「分ってますよ。仲間に治癒魔術師がいますから。わざわざありがとうございます」

リードは深く頭を下げ丁寧に礼を言い、

「怪我つっても大したことねえし、別に必要なかったんだがなア」

長赤髪不良青年はめんどくさそうに呟き、

「お、わざわざありがとな。お前、名前は？」

俺は年下だから敬語いらさないんじゃないかね？ と思いフランクに話す。

「リディ・クライトンといいます。よ、よろしく願います」

やはりきこちないな……もしかして嫌われてんのか？

ていうかとても盗賊に見えるのだが。

「なあハリス、お前あのリディっての絶対さらって来ただろ」

俺は小声でこそそそつとハリスに話す。

どう考えても盗賊に見えねえもん。

「はあ？ お前さん人をなんつー目で見てんだ。リディは兄貴が同

盟ギルドの一員でな、それで兄貴の役に立ちたいってココ入ったんだよ」

同盟ギルド？ ってなんだ？

って聞こうとしたら、騒がしいのがやってきた。

「あつ！ アーク、リード、ジャミルさん！！ 無事 ！？ 怪我してないー!?」

わたわたとあわてて駆けつける天然少女エルと、

「ういゝっす！ 言われた通りエルの安全はばっちり保護しといたよゝ！ っていうかもしかして勝っちゃったの!?」

笑顔から驚きの顔に変わるトレジャーハンター（笑）のルネの2人だ。

「エル！ ……とルネ。よかった、とりあえず何ともなかったみたいだな」

「ちよつと！ なんであたしの時だけテンション低いのよ！」

「うるせえお前はオマケみたいなモンだろーが」

「なにを〜！！ あたしがいなかったらここに来られなかったのよ〜！」

と俺とルネでギャギャーやってるうちにリードは、

「あの、助けていただき、ありがとうございました！」

と丁寧に頭を下げた。

おっとそうだった！

助けてくれたんだからお礼くらい言わなきゃな。

「まあ誘拐の件は置いとくとして……助かりました、ありがとうございませう」

俺も一応敬語で頭を下げる。

「い、いきなりそんな頭下げられてもなあ……」

ハリスは俺達の（ていうか俺の）態度急変に戸惑っていた。

そんな俺達を見て赤髪不良は不満そうに、

「ケツ！ 元々俺ア捕まったからこんな面倒な事に巻き込まれたんだっつーのオ！ あアン？ どう落とし前付けてくれんだよゴルア

！」

と眉毛を八の字にして睨みつける。

うわ、こいつ、やっぱガラ悪っ！

そんな赤髪不良に後ろから迫る影……。

「駄目ですよっ！」

オイ！

と思わず言いそうになった。

エルが杖で赤髪不良の後頭部をぶっ叩いたからだ！

絶対痛いって！！

ていうか容赦ねえなオイ！

「痛ってエなっ！ なにしゃがん」

「せっかく助けてもらったのに文句言っちゃダメっ！」

「いやだから」

「もうちよつとで死にそうだったんだよっ！ 命の恩人にはちゃん

と『ありがとうございます』って言うのっ！」

「だアーかアーらッ」

「人に感謝されるのは、まず人に感謝する事から始まって行くんだ

よっ！」

「だアアー！ もう、うぜエっつーのオ！！ お前は俺のカーチ

ヤンカッ！」

「関係ないもん。返事は？」

「ハア……つたく……あ、あざーっす……」

と、説き伏せたっ！？

赤髪不良はハリスに向き直り、ちよこんと頭を下げた。

しかしエルのやつ……捕まってる間に随分赤髪不良と仲良く(?)

なっただもんだな……。

コイツの名前は謎だけど。

「ていうか、君達はなんでここに来たんだい？」

リードは若干呆れ気味に言った。

「ん〜？ いやさ〜、逃げようとしたんだけどエルがやっぱ参戦す

るって言っけきかなくてね」

「うん、なんとなく分かったよ」

リードは苦笑いを浮かべ納得した。

エルの性格からして絶対言いそうだしな。

「たたく、変なところでまっすぐだからなく、エルは。」

「むーっ、せつかく助けに来たのになんかリードの苦笑いがひどい」

むすーっとな膨れるエル。

その仕草は普通に可愛いが残念ながらお前を恋愛対象として見ることはできんよエル。

俺にはレベルが高すぎるぜ。

主にドジっ娘レベル的な意味で。

「ははは、いやまあ、彼の言う事も一理あるね。お詫びに食事でもどうだい？」

「ニッ！　っとな笑ってハリスは言った。」

「本当ですかっ！　ありがとうございます！」

俺達一同は頭を下げた。

「じゃあ、ちよつと待っていてくれ。よし、カルト、ロンド。お前は俺と一緒にエイリアスを手当てして牢へ運ぶぞ」

そう言っけハリスは2人の盗賊に指示を出す。

「おう。分かりましたぜ。ですが、まさか牢を使う日がマジで来るたあなあ」

ロンドという髭面のおっちゃんは牢に対してそう呟いたが、

「それより、キャシーを殺したコイツの手当てをしなきゃならないなんて……」

カルトと言われた青髪の兄ちゃんは、ひどく悔しそうな顔をしていた。

「そりゃそうだ……何人もの仲間が殺されたんだから。」

「ハリスさん！」

俺はハリスを呼びとめた。



「どうした？」

ハリスは振り向く。

「エイリアスって……何者なんですか？」

これを聞かずに居られなかった。

「……さあな。ただ、『盗賊殺し』の異名のとおり、数日前から同盟の盗賊団が恐ろしい被害を受けている。名前どころか姿も分からなかったが……あの女の仕業と見て間違いないだろうな……」

ハリスは帽子を深くかぶり、表情を隠していた。

「……分かりました」

「もうすぐ別の者が部屋を案内する。それまで待つてくれ」

といい、ハリスは去った。

## 別の部屋

「……しっかし、この空駆船、意外と広いんだな」

俺は見た目以上の広さに感動しながら言った。

今俺らがいる部屋は、殺風景だが、空調も効いていてなかなかいい感じの部屋だった。

広さも十分だ。

「盗賊団だからなア、金はあるじゃねエんのか？」

ジャミルは腕を頭の後ろで組みながら言った。

「駄目よ駄目駄目！ お宝を金にしちゃったら意味ないじゃない！」

「は？ なんでだよ」

まさか眺めて楽しむ訳でもないし……と俺は思ってたルネに言った。

「あたしが盗れなくなっちゃうでしょっ！」

「泥棒か！ なんでお前は人の物横取りするしか考えないんだよ！」

「失礼な！ お宝だってあんなむさつ苦しい連中より若くて綺麗なこのあたしに盗まれた方がいいに決まってるじゃない！」

「知るかつ！ お前トンでもない自己中だな！ この偽トレハン」

「トレハンって……略すなっ！！」

「……2人とも静かに」

すっごい呆れたような顔をしてリードが言った。

「わかったオーケー、俺はもうこのコソドロに惑わされたりしないぞ」

「ふん、コソドロを舐めると痛い目にあうよ?」

いやそこ否定しないかい!

なんだかコイツといると精神年齢が5歳程後退する気がする……。

「そっぴやさ、お前名前まだ聞いてなかったよな」

俺は隣りに座る赤髪不良に言った。

「ああ、ジャミル・ハワードってんだア。帝都の隣の『ブルーム村』ってトコに住んでらア」

ジャミルはめんどくさそうに自己紹介を始めた。

その割には住んでる所まで教えてくれたが。

「でもジャミルさん、それ体外装備兵器だよねー? やっぱ違法所持なの?」

「大変だ。だとしたら騎士団の名に掛けて拘束しないといけないんだけど……」

リードとエルは当然のごとく違法所持と決めつけて話を進めるが、  
「だアアア! 誰が違法所持だ誰がア! コイツアれっきとした合法だっつーのオ! これでも一応魔物討伐ギルド『紅の剣』のメンバーだこの野郎オ」

と、ジャミルは思わぬ反論をした。

ポカーン。

「な、なんだデメエらそのリアクションはアア!」

ジャミルは固まった俺達に怒鳴った。

「いやだつてさ」

「ただの不良にしか……」

「見えなかったんだもーん」

ルネ、俺、エルの順に口を開く。

「はあ……君がそんな格好してるのが悪いんだよ……」

リードはまたまた呆れ気味に口を開く。

「俺か！？ 俺が悪いのかッ！！」

腑に落ちない結末に納得行かないジャミル。

「そっぴや、ジャミルってどうして捕まっただ？」

俺はなんとなく話題を変えた。

「ああ……モルゼスの森のはずれで、アーバントが人を襲ってるって噂があつてなア」

アーバントとは、ゴリラのような魔物だ。

レベルDだから、バルードよりはちよつと強い程度だ。

「ああ、その話なら騎士団の方でも聞いたよ。確か……『蒼き刃』が依頼を受けたって聞いたけど？」

リードが話に混ざる。

「それなんだが、蒼き刃の連中、返り討ちに会いやがったそうなんだ」

「返り討ち？ アーバントにかい？」

リードは驚いていた。

一般人なら露知らず。

こと戦闘に関しては手慣れてるはずの戦闘ギルドが返り討ちにあつとは珍しい。

どうなつてんだ？

「らしいぜ。連中の話によると恐ろしく強かつたらしいぜ？ ンで代わりに俺達が様子を見に行こうって事で偵察に行つたんだが、そこで『疾風の翼』の船を発見しちまつてなア……、クソ団長の命令で俺だけ偵察に行かされて捕まつたってワケだア」

「それで結局、アーバントの件はどうなつたんだい？」

「さアな……、捕まつてたんだから知る訳ねエだろ」

アーバントが、『蒼き刃』を、ねえ。

そのギルドは俺は知らないしそんなに巨大な組織でもないんだろ  
うが、レベルDごときにやられるはずはないと思っただけだな……。

……まあ、気にする事でもないだろ。



## 第18話「うまい話には裏があるってホントだな」

前回のあらすじ……

担当：アーク・シユナイザー

なんとかエイリアスを倒した俺達。

っていうか、倒したのはハリスだけだ。

とても盗賊に見えない盗賊、リディに怪我を治して貰ってるルネ  
&エルがやってきた。

そんでギャーワーやってたら、なんとハリスが「食事でもどうだい  
？」と誘って来た！

そついや腹減ったな……よしここは遠慮なしに頂いてしまおう！  
んで部屋で待つ間、いろいろしゃべった。

赤髪不良の名が「ジャミル・ハワード」と判明したり、魔物討伐ギ  
ルド「紅の剣」メンバーだったり、「蒼き刃」がアーバントに負け  
たり色々情報を手に入れたのだった。

「おう！ 待たせたなガキども！！ 俺様自慢の料理の数々！ と  
くと味わいやがれエ！！」

部屋に突然ドアを蹴破る勢いで入ってきたのは、大柄のモヒカン  
男！

なんだこいつはああー！？

しかもセリフから察するにこいつが料理を作ったのかあ！？

そんな疑問とはお構いなしにテーブルに料理をドーンと置いた。

「おおっ！これはもしかやソーノ魚の刺身ですか！？」

エルが真つ先に反応した！

皿の上に乗ってるのは立派な魚のお刺身だ！

「おうよ！ 嬢ちゃん詳しいねえ！ ほかにもたくさんあるから遠慮せずに食いなあ！」

「うっひよオオ！ マジかよっ！ じゃ、ドンドン食っちまっぜエー！」

ジャミルが飛びつく。

「わ〜い！ 盗賊団ってやっぱ金持ってんのね〜！！」  
ルネも飛びつく！

「ガツハツハ！ 酒もあるぞ！ 一杯どうだ？」

「おお！ マジか！ それじゃあちよっくら頂くわア！」

「あたしも貰お〜っと！」

ルネとジャミルは遠慮なく酒を貰っていた。

よし俺もこの雰囲気に乗じて！！

「俺も〜！」

「わ、私も〜！」

「駄目だ！ 君達は未成年だろ！」

チツ、やはりカタブツ優等生クンに止められたか……。

「いいじゃねーかリード！ カタイこと言っなよ〜」

「駄・目っ！」

やがて、楽しい夕食は終わった。

ジャミルとルネは酔いつぶれ、俺、エル、リードは腹を満腹にして帰るところだった。

「ハイハイそれじゃ、お食事お会計5名様、壁面の修理費、団員傷害の賠償合わせて13万7千Jになります」

モヒカン男は揉み手をしながらにっこり笑ってそう告げた。

「え！？ 金とんのかよっ！？？」

俺達一行は驚愕！！

「えええー！ ごちそうするって言ったじゃない！」  
エルも抗議！

「あア？ 誰が『タダ』でと言ったんだア？ それに壁の修理費等は言い逃れできねえよなあ？ さあ！ 出すもの出してもらおうかア！」

まさか……。

はっ、はめられたあああああつ！！？

「オイゴルアアア！ 俺から詐欺まがいの事して金取るうたアいい度胸じゃねエか！」

お！ ジャミルが酔ってる事でガラの悪さ5割増しになってる！  
っーか超ケン力腰なんですけど！

「ほお？ 俺様がいつ詐欺まがいの事をしたって？ そうそうテーマは暴れた時の流れ弾の修理費で2万Jの請求が」

「んだア？ 俺の全身拘束してロクでもねエ部屋にブチ込んで監禁しやがったのはドコのドイツだア！？ 勝手に巻き込んでいてよくエラそうな口聞いてくれんじゃねエかあア！？」

などとジャミルとモヒカン大男が火花を散らしているうちに俺達は小声で話し合う。

「おいリード、どうするよコレ……」

「前者はともかく……後者は僕達に非がない事もないけどね」と言い、リードは頭を抱える。

「そうだ、明案思いついた」  
俺は一つの作戦を提案する。

「なになにー？」

エルがなんか楽しそうに耳を傾ける。

「壁ぶっ壊したのルネなんだからお前全部払え」  
スッパリと言ってる。

これで問題は解決……か？

「んがっ！ ひどっ！ ひどすぎる！ 悪魔！ 鬼！ 変態……！」  
「ちよ、変態は関係なくないか！？」

「変態並みに頭のおかしい考え方って意味よ！」

「あんま遠まわしにする意味なくねえかそれ！ お前頭悪いだろ！？」

「二人とも仲いいねー、私も混ぜてー」

「いや混ざらなくていいよエル！」

アホな混ざり方をしようとするエルをリードは必死にひきとめる。

「……ちなみに今現在の所持金は？」

リードが皆に聞いた。

「俺ミンおばさんからの皿洗い代の残りで2千」

あのハードな仕事にしては安かった。

「私はねー、お金はお父さんに預けてるんだよー？」

エルん家は金持ちだからな、うらやましいぜ！

「あたし、この前売った武器の金で3万4千」

へへ、ルネ意外と金持ってたんだ。

まあ仮にもトレハン（笑）だからな。

「僕は今月の徴収税を騎士団に収めたから、残り4千」だ」

ちなみに」とはジュールと読む、この世界の共通通貨だ。

「全員合わせてちょうど4万」か……うん、払えん」

俺が最終的な結論をまとめる。

「で、どうすんのこの状況？ いっそジャミルに丸投げしちゃう？」

ルネの提案はある意味最も楽だが……。

「いや……あの調子だとそろそろ疾風の翼と戦う事になりそうだし、それだけは裂けないと」

と言いつつリードも頭を悩ます。

「ケンカは良くないもんねー」

「っーかそろそろ止めないとまずいぞアレ」

俺はモヒカン大男に拳銃を突きつけているジャミルを見る。

大男は「撃てるもんなら撃ってみろ」と言わんばかりに動じずひたすら金を要求しているが。



「じゃあここはじゃんけんで決めちゃおうよ」

「待てエルどうしてそうなる!?」

リードはあわてて否定するが、

「賛成〜! じゃあ負けた人が単騎突撃でモヒカンと交渉って事で!」

「もう時間ねえし、いいんじゃない? それで」

俺達は賛成した。

もうめんどくせえ、なるようになったちまえ!!

結果。

「僕かよオオオオオ!!」

珍しくキレ気味なリードに決定しました。

「よっしゃあ! リード君、頑張ってくれたまえ」

「がんばってねー、私たちはジャミルさん止めてるからー」

「全てはあんたに託したよっ、じゃっ!」

俺達は満面の笑みでそれぞれエール(?)を送る。

「ふっふっふ……分った、分ったよ! 僕がなんとかすればいいんだろう!」

…… やばい、ちょっと変なスイッチ入っちゃったかもしれん。

リードは静かな足取りでモヒカン大男の前に行く。

「……盗賊団如きが僕から金を巻き上げようなんて、いい度胸だね  
おおっ!?!」

リードが仁王立ちでモヒカンに立ち向かった!!

「なに言ってるんだあ? このクソガキは」

「私は、ギル・ラシアトス帝国政府直轄陸軍、帝国騎士団養成部隊の者だ!」

「バーンっ! という効果音が聞こえてきそうなくらい、堂々と自己紹介するリード!

ちなみに、養成部隊とはまあ騎士団見習いの事なのだが……盗賊

団はそんなこと知らないだろうなあ……。

「てっ、てめエら！ 騎士団の連中だったのかつ！？」

モヒカンは驚愕！

「数百件に及ぶ窃盜被害、軽い傷害罪、監禁、誘拐罪、不法侵入罪、不当武装罪、その他帝国税および通行税の未払い、不法滞在、違法船舶改造、その他数十件の罪状および帝国憲法第11、23、24、25、46、71、72、114、118、119、125に違反している為貴方達盜賊団『疾風の翼』は帝国騎士団本部によりA級脅威的武装組織に分類されています」

長々としたセリフをすらりと早口で話すリード。

この様子じゃあ見習いだなんて気付かないだろうなあ……。

「今から連絡して、騎士団本隊に応援を頼めば、この船ごと撃沈することだって可能です！ですが、僕達を見逃してくれれば、今回は見逃してあげます。どうしますか！？」

リード……頑張ってるな。

もちろん今俺らに連絡手段などあるはずもない。

あったとしても、騎士団本隊に直ちに攻撃を要請出来るほどの権限はさすがにリードでもない。

言っちゃえば、ただの虚勢な訳だが……通用するのかつ！？」

「騎士団なんぞに……従う訳ねえだろツ！！ 騎士団と艦隊戦かあ

！？ 面白れえ……やってやろうじゃねえかつ！！！」

うわあああっ！？」

逆ギレした！？」

っていうかリード！ 状況悪化したぞツ！ どうする気だよツ！！

「オイ団長！！ こいつら騎士団の連中だったらしい！ 騎士団の戦艦が向かってるツ！ 仲間を集めて艦隊戦の用意だツ！」

無線でハリスに連絡してるしツ！

《なんだってツ！？ 分かった！ 総員第1種戦闘配備！！ 騎士

団の戦艦が向かってるらしい！ 急げツ！》

ハリスの緊迫した声が艦内に響きわたる！

艦内にサイレンが鳴り響く！

っていつかこの船どうなってるんだ！

完全に戦艦じゃねーか！

「ちょ！ リードどうすんだッ！！ なんか取り返しつかねーぞ！  
！」

「し……知るかつ！ みんな！ 何か手はないのかっ！？」

責任丸投げしやがった！！

「しょうがないわねえ〜！ ここはあたしにまかせなさい！！」  
ルネがなんか言った！

この期に及んでどうする気だ！？

「こういう時はねえ……こうすんのよっ！！」

上着の内側から取り出したのは……煙玉！？

それをポフッとばらまくと、煙で何にも見えなくなった！

「エルツ、ジャミルツ！ 壁ぶっ壊して！！」

ルネの声に2人は瞬時に反応する！

「せ、聖なる力よ！ ホーリーブラストッ！！」

「ファイアバレットオ！！」

光球と炎弾が壁に大穴をあける！

そこには大空が広がっていた。

「ハイみんな捕まって！ でやアツ！！」

リードがルネの手に捕まり、俺はリードの手に捕まった！

エルはルネのもう片方の手に捕まっていた。

ルネは船の壁を飛び越え、そのまま空中を飛んだ！

「……一応、なんとかあったな……」

「ああ……」

俺達は、なんとも言えない気分のまま空を飛んだ。

「あれ？ ジャミルさんは？」

とエルが呟く。

そう言えば……いないっ！？

「いだだだだだッ！！ ちよつと馬鹿あ！！ どこ掴んでんのよ

ッ！！」

「しょうがねエだろッ！！いきなり掴めとか言うからだッ！っ  
ていうかなんで空飛んでんだアアッ！？高エしッ！！」

いた……。

ジャミルは……ルネの長い髪に捕まっていた……。

「痛いつて！離しなさいよおおー！！！」

「馬鹿野郎オオオ！離したら真つ逆さまだろつがアアア！！っ  
ていうか一旦降りろどっかにイイ！！！」

「いたツやばいつて！抜けるつて！！しかも4人は重い！あ、  
駄目、落ちるうううう！！」

突然、ルネのブーツの推力が無くなって、俺達は墜落したのだっ  
た……。

それから、疾風の翼は来ることのない敵を丸一日臨戦態勢で待ち続  
けていたらしい……。

## 第19話「不浪人は命の恩人？」

前回のあらすじ……

担当：リード・フェンネス。

僕達はお詫びにとハリスさんに食事をご馳走になった。

料理を運んできたのは大柄なモヒカンヘアの男だったが料理は旨かった。

うーん、こういうのを『漢の料理』というのだろうか。

それはともかく、食事を終えた僕達を待っていたのは法外な請求だった。

まあ、修理費とかは半分僕らが悪いけど、それにしただってあんまりな値段だった。

ジャミルがメンチ切ってるうちに僕達は相談するのだけれど予想通り相談にならず最終的には「ジャンケンで負けた人がナントカする」という方法になった。

どんな妥協策だよ……。

そして僕が負けてしまった。

アークウウウ！！ 普段君は弱いのになんでこういう時だけ！？

ええい、こうなったら自棄だ！！

僕は騎士団としての立場を利用したが、それが返って相手の闘争心を煽り、逆効果になってしまう。

僕としたことが何たる不覚！！

もう知るか！！

土壇場でルネが煙玉を使い、エルとジャミルが壁に穴をあけ、エルにつかまって外に飛び出した！

その機転には感心したけど、その後墜落したら意味ないじゃないか！！

人のことは言えないんだけどね……。

空中

「のわあああああつ!!」

やばいつ!! 高いつ!! 死ぬつ!!

俺達の眼下にあるのは謎の孤島!

地面に叩きつけられたらいくらなんでも即死だ!!

「あああああああ あ?」

ふわつ!

と体が急に浮い……た?

そしてそのまますーつとやさしく地面に降りられた。

他のみんなも同様だ。

なんだコレ……どうなったんだ?

と思っていると、謎の声が聞こえた。

「いんやあ危ない危ない。どっから飛んできたかは知らないけど、  
投身自殺はお勧めしないわ」

森の影から出てきたのは謎のオヤジ。

頭はボツサボサで、目は死んでいて、髭は濃く、服はつぎはぎ。

……なんだこのオヤジ?

浮浪人か?

ん?

よく見ると緑色の魔方陣を作ってた形跡が……。

「も、もしかして……あなたが助けてくれたんですか?」

エルが恐る恐る聞く。

そりゃそうだ。

なんか得体が知れないし、怪しい。

……変態の一種かもしれないし。

「ま、そーゆー事。それよりさ、おっさんちょっと困っちゃって、力を貸してくれないかい？」

ボツサボサの頭を掻きながらニツ！ と笑ってそう言う。

「オイオイテメエ何モンだア？ 自己紹介もせずに助けるとか偉そうなコト言っつてンじゃねエぞゴルア！？」

おわ！

ジャミルがいきなりケンカ腰で睨みつけてきたあ！

「ひいひいひいひい！！ おっさん不良は苦手無理ひいひい！！」

なんか叫びながら、ジャミルに対し後ずさりをするおっさん……。情けないにも程がある！

つていうか見れば見るほど浮浪人にしか見えないぞ！！

「暴力はダメエエエ！！」

つて、お前が杖でジャミルを殴っつてどうするエルっ！！

「いつてえなアア！！ テメエが暴力じゃねエか！ 俺は何もしてねエよ！！」

頭をさすりながら講義するジャミル。

でもエルには手を出さない……。もしかしてジャミルっていい奴？

「なんかしそっつだっつたんだもん！ 危険要素は事前に潰しておくのが大事なんだよ。これ騎士団の教えね！」

人差し指を立て、ジャミルに説明するエル。

「テメエが一番の危険要素だっつーのオ！」

「ええつと……。失礼ですが、お名前は……？」

そんなやり取りを横に、リードが仕方無いなあ、と情けないため息をつきながら名前を聞き出す。

「ん？ まあいいじゃない！ おっさんって呼んでくれれば結構結構！ ハッハッハア！」

さっきのビビりはどこへ行ったのか……。豪快に笑うおっさん……。

「えっと、再度確認しますが助けてくれたの……。あなたなんですか？」

「おうよお！ まっさか天空から5人の少年少女が降ってくるとは、

天候預言者もびっくりだね〜！ おっさんもうちよつとで失神するトコだったよ〜！ ハッハッハア！」

……全然面白くね〜っつーの。

ちなみに天候預言者とは、魔術を使って天候を予測する人の事だ。「とりあえず、言つときます、ありがとうございます」

ちよつとだけ頭を下げるリード。

「そうそれええっ！！ その言葉を待っていた！！ 少年少女達よ！ チミ達はおっさんに感謝していると言ふ事！ 恩は返すのが必須！ ここまでOKエ？」

「お、オーケー……」

おっさんの謎のテンションについていけないリード。

安心しろ、俺達も全くついて行けん。

「そしてここで確認！ チミ達の目的は、この孤島から無事脱出する事！ 違つかねえ？」

「えー……はい……まあ……そうですけど……」

リードの目がだんだん死んできた。

頑張れ！

何を？ って聞かれたら困るけどとりあえず俺達4人でエールを送っておく。

なんで対話を僕だけに任せてるんだアアア！！！！

というメッセージが目で返ってきたが、それには気付かないフリをした。

「そこでだ！ この先におっさんのボートがある！ ただしそいつは座礁してしまって、現在は航海不可能。そしておっさん1人の脆弱な力では動かすことはできない。そこでチミ達の出番であるう！ 5人で力を合わせて、おっさんのボートを救出して欲しい。もちろん協力してくれた暁には、西でも東でも好きのところへ運ぶと約束しよう！ どうだい？ 悪くない条件だと思わないかいチミィ〜？」

おっさんはこれでもかつ！ とアピールしてくる！



確かに……見たところここは孤島。

しかもなんだか無人島くさい。

なんでおっさんが1人でこんなトコにいるのかって疑問は置いて、ボートがあるなら利用しない手は無いな。

同じことをリードも考えていたようで、

「分かりました。協力しましょう。みんなもそれでいいね」

振り返って確認する。

「私はいいよー！」

と快く承諾するエル。

「ケツ！ 仕方がないから手伝ってやらア！」

と足元の小石を蹴りあげながら不満そうに承諾するジャミル。

「ボート……盗んでもあんまり高く売れそうにないなあ……いやあなんでもないなんでもない！ うん！ あたしも賛成って事で！」

と小言で良からぬ事を呟きながらも賛成するルネ。

「まあ、おっさんに助けられたのは事実っぽいしな。しょうがない、手伝うよ」

俺も渋々了承。

というわけで、全員の意見が揃ったところで、俺達は海岸線に移動した。

## 海岸線

「あれがおっさんのボートね！」

と指をさしたのは、小型のボート。

見事に磯に乗り上げている。

「あれ……随分小さくないか？ 本当に6人も乗れるのかよ……」

思いつきり年上でしかも本当なら命の恩人なのに思いつきりタメ口で話す俺。

でも気にしない。

だって、おっさんだもの。

「……ん？ そうか……君が、ねえ。変わってねえな、あれから……」

えっ!？

「おつと! なんでもないなんでもない! 6人乗れるかって!？ 問題ないないノープロブレム!! ああ見えて、なかなか広いのよね!!!」

と胸を貼って自信満々で告げるおっさん。

だが……さつきのはなんだ？

一瞬、一瞬だが、おっさんの顔が柔らかく、まるで何かを懐かしむそつな、そんな感じの顔になったのは……気のせいだったのか……?」

「オイイイ!! まさか俺達を使って都合よくボートを動かして1人で逃げるつもりじゃねエだろうなアア!!」

「ひいひいひいっ!! だから不良は苦手なんだってばおっさんはああああ!!!」

……あんなやりとりを見ると、勘違いだと思いたくなるな……。

「じゃ、ゆっくり、ゆっくり押ししてくれたまえチミ達!」

なぜかおっさんはボートに居座り、それを俺達が押すという形になった。

なぜかって？

それは、今夜は波が高い。

誰もいないボートを海へ戻せば、途端に流されるか転覆するだろう。

そこで、誰か1人ボートに乗ることになったのだが、このボートは特殊だからおっさんしか動かせないみたいなおっさんが乗る事になったのだ。

「じゃあ行くよっ！　せーのっ！！」

リードの合図でボートを一気に押し出す！！

バシヤアアン、という水の音とともにボートは海へ辿り着いた。

「おっふう！！　ありがとねー！　少年少女諸君！！」

と言うが、おっさんはこっちに帰ってくる気配が無い！

「オイ待てやゴルアアア！！　戻ってこいやアア！！」

ジャミルが大声で叫ぶ！！

「ハツハツハア！　ごめ〜ん！　やっぱりこのボート、1人が限界だわ〜！　それじゃっ！　お達者で〜！！」

最後にニツ！　というウザイ笑みを残し、そのおっさんは、夜の海へと消えて行った。

はっ、はめられたああああ！！（本日2度目）

## 第20話「無人島生活スタート！」

前回のあらすじ……

担当：アーク・シュナイザー。

天国まで真つ逆さまな俺達を助けてくれたのは、なんか浮浪人っぽいおっさんだった。

一応命の恩人というべきお方なのだが余りに変人過ぎて俺らは感謝する気をなくしそうになる……。

そんなおっさんは何故か俺らに協力を要請してきた。

内容は座礁したボートの復旧。

まあ形だけでもギブアンドテイクという事で俺達は協力する事にした。

その時おっさんが一瞬謎な言葉を吐いたが聞き間違いだったのか……？

「変わってねえな」って……俺前おっさんにあつた事なんてないしなあ。

まあそれはともかく、若干不審がりながらも協力していると、最終的におっさんは1人でトングズラしやがった！

はっ、はめられたあああああ！！

### 無人島

「あの野郎オ……今度会つたらブっ殺す……」

おっさんがとんずらして、ポカーンとしていた俺達の中で、最初に口を開いたのはジャミルだった。

「同感だね……っ！ 騎士団を敵に回すとは……良い度胸だよ」  
指の骨をパキパキと鳴らして物凄い殺気と引きつった笑みを見せ  
てリードが言う。

「ちょ、お前怖い！ ジャミルより怖い!!」

そしてお前はただの見習いだろおお!!

「あつたしも〜！ 次にあつたらどんな殺し方するか考えとかない  
とな〜」

「ルネお前はニコニコしながら物騒な事を言うんじゃねえ！」

そして楽しそうに槍を磨くな！

「ホオオオオリイイイイイブラストオオオオオ!!」

「お前も無駄に気合いの入った声で魔法を乱射するなエルっ!!っ  
おっ!あぶねえって!!」

そんな感じでみんなの怒りを鎮めるのに30分。

「で、これからどうすんだよ」

とりあえず、俺が仕切らねばならん感じになってしまった。

「っていうか、君はよくあの状況で冷静さを保っていたね……」

リードの殺気も、ようやく無くなってきた。

「ああ……俺の親父もあんな感じだったからな」

まあそれは今思い出したんだがな。

いきなりレベルBクラスの魔物と戦わされて瀕死になったり……、  
大海原の中置き去りにされて1週間漂流して瀕死になったり……、  
今回みたいに無人島に突然放られた拳句なんかやかんやで瀕死にな  
ったり……、

あれ？ 俺何回瀕死になってんだ？

「そう言えばさ、アークの両親ってなにやってる人？」

ルネが聞いてきた。

「母さんは小さい頃病気で死んだから分からん。親父は古代文明の鑑定師をやってたが、まあ親父も死んだけどな」

死んだんじゃない。

殺された。

親父は8年前のあの時、きつと何かヤバい物件を頼まれてたんだと思う。

その翌日に親父が死んだ。

これは偶然じゃないだろう。

殺したのは恐らく……依頼してきたあの迷彩柄のコートの男。

奴で無いにしても、奴に関係する奴に違いない。

にしても、親父の最期の言葉

『アーク……ブラストレイズを……頼む……』

あれは……なんなんだ？

レイズとは、古代兵器を表す言葉。

ファストレイズ

ファイブスレイズ

第一の古代兵器から第五まで種類が確認されているが、ブラストレイズなんて……聞いたことも無い。

だいたい数字じゃないし、ブラストってなんだ？

ホーリーブラストみたいな魔術名称でもないし……。

それに、なんで俺に頼んだ？

まあ……考えるに、迷彩男が鑑定を依頼した古代兵器……あれが

ラスタード

その『ブラストレイズ』だとしか考えられない。

でも、それがなんなんだ？

そんなに重要な物を俺にどうしろってんだよ親父は……！

あゝ、やめよう。  
そんな事考えたってしょうがない。

「アーク？ どしたの？」

ルネが俺の顔に顔を近づける。

「どうわあ！！ その癖やめろっ！！」

いきなりビビった……なにしやがんだこの女は……。

「だって全然反応しないんだもん！」

はあ……と俺はため息をつく。

「とりあえず、もう真夜中だし、寝床を探そう」

リードが全く進展しない展開を進めようとする。

このまま徹夜は体力的にも不可能だしな。

「寝床オ？ ここでいいんじゃないの？ 砂浜だし、広さは十分だぜ？」

ジャミルがめんどくさそうに言った。

「いやいや。寝てる間に潮が上がってくる可能性があるんだよ。そうでなくともこの冷たい海風は予想以上に体力を奪う。したがって海岸線は禁止。んーと……風向きが北西だから、もしかしたらあそこに見える雨雲がこつちに来るかも知れない。そうなると雨だって降ってくるから、完全には言わないけどなるべく雨が当たらないところがいいな。洞窟とか発見出来ればいいけど、今日のところは森の中がベストだな」

「おう……お前、詳しいな……」

ジャミルが目を大きく開けてびっくりしている。

「なんてことねーよ……体験談さ……以前親父に、無人島に置き去りにされた事があってな……はは……そんなの……な……」

俺は、昔を思い出してあの恐ろしい体験に震えながら言った。

後日聞いた話によると、その時の俺の周囲には、青色のどんよりとしたマイナスオーラが漂っていたそうだ……。

「そ、そうか……お前、苦労したんだな……ハハ……」

ジャミルは笑顔をひきつらせていた。

「……あ、あははは、とりあえずここにいてもしょうがないし、アークの言ったとおり内陸へ移動しようか」

ルネが空気に耐えられないといった感じで、乾いた笑いを浮かべながら催促する。

「（オイ、アークの親父つて、もしかしてトンでもない奴だったりすんのか……？）」

「（あ、ああ……いろんな意味でね……、彼はその、苦労したんだよ……いろいろね）」

リードとジャミルが小声でなんか話してるが、まあいいか。

俺はたいまつに火をつけ、森の中に歩き始めた。

流れ的にもう、俺が仕切らなきゃいけないんだろっしな……。

まあ体験談がどこまで役に立つかは分らんが、何も知らないよりはマシだろう。

「アーク」

エルが突然俺の名前を呼ぶ。

「ここ広いと思うし、2手に分かれた方が効率がいい気がするんだけどー……」

なるほど、昼間だったら確かにそうなんだが……。

「うーん俺の経験的にいえば多分それはやばいと思う。夜は昼間より強力な魔物がいるし、っていうかここどんな魔物がいるか分からないし、集団でいた方が安全だろ？」

昼間ザコだと思って倒しまくった魔物に、夜は集団でリンチされた事がある……。

あの時は辛かったなあ……あははははは……。

「あつ、なるほどねー、なんか今日のアークは冴えてるねっ！」

「そうか？ こんな体験談で役に立つんならいくらでも話してやるよ」

……大部分は忘れたけど。

「ホント？ 例えば？」



だから忘れたんだって！

心の中で言ってもしょうがないな……。

「例えば？ うーん……あっストップ！ ここなんかいいかもしれないぞ！」

おっとタイミング良く（エルにとっては悪くか？）いい感じの寝床を発見！

大木の下だ。

ここなら土砂降りじゃなければ雨が降ったとしても大丈夫そうだ。

「よし、ここなら大丈夫そうだな」

それから、魔物避けの仕掛けをルネと作ったり、見張りの順番を決めたりして、俺達の無人島生活1日目は終了した……。

## 第21話「さあ、食料調達だ〜！」

前回のあらすじ……。

担当：ジャミル・ハワード。

謎のオツサンの所為で俺達ア無人島に取り残されちまったア。

最初から怪しげで薄情な雰囲気はしたが……そのまんまかよッ！？  
クソツ……ボートに一人で乗った時からなんか怪しいと思ってたんだが……迂闊だったぜエ。

ンでそれはともかく、流れ的になんかアークが仕切る事になったよオだがア。

ヤツア無人島漂流の経験があるみてエでこりゃアちよつと心強いぜエ。

寢床を決め、無難な感じで俺らは初日を終えたのであったとさア。

「さて……とりあえず腹が減ったな」

俺は腹をさすりながら呟いた。

しかし、腹をさするのは別の理由があった。

俺がぬくぬく安眠していると、ルネが無防備な睡眠中の人間に突然ボディーブローをカマしてきやがった！

俺が悶絶していると、何をやっても起きないからだ、と満場一致の返答が返ってきた。

ルネに鏡を貸してもらうと、マジックで落書きが縦横無尽に走っていた。

お前ら殺す！！

暴れる俺を取り押さえるのに10分。

気がつくと、太陽は真上より少し西へ傾いている。

時刻で言うと、14時ちょっとすぎくらい？

うんまあ……、さすがにちょっと寝過ぎたかな？

そんな感じで、納得せざるを得なかったので、この安眠中落書き  
傷害事件は一応の収束を迎えた。

そんなわけで、全員が程よい空腹を感じているのであった。

「空駆船でたくさん食べたから、死ぬほど減ってるって訳じゃない  
けどねー」

とエル。

皮肉にも、昨日の夜に船内で食ったアレが生命線となっていた。

「まあそうだけど、とりあえず食料を探すぞ。そこでだ。今回は5  
人もいることだし、2つに分かれて行動しよう」

俺の時は1人だったから大変だったが……。

それでも、手の付けられていない大自然の中では、なにかしら見  
つけることはできたんだけどね。

「なるほど。誰かさんのお陰で日も十分に昇ったし、問題は無いだ  
ろうね。さしずめ海班と山班つてところかい？」

誰かさんの、のフリーズに明らかに視線と悪意を感じたが、俺は  
華麗にスルーしとく。

「さすがリード。呑みこみが早いな。んで、人選をどうするか、だ  
が……」

正直、これといって誰が向いているってのはないよな。

「俺ア海へ行くぜエ。親が漁師なんだ。魚に関しちゃその辺の奴よ  
りは知ってるハズだ」

おお！ ジャミルか！ 頼もしいな！

こういつとき使える知識を持っているのは役に立つ！

「へ〜！ 釣りとかも出来んの！？」

ルネが興味津々という感じで聞く。

「当然だア！ 海の漢なめんなア」

胸をはって肯定するジャミル。

「じゃああたしも海行く〜！ 釣りの仕方教えてよ！」  
「つてことは、ジャミルとルネは海で決まりか……。」

「じゃ、山班は俺、リード、エルの3人でいいか？」

俺は確認する。

「いや、待って。ジャミルとルネじゃ性格的に不安だから、僕も海へ行くよ」

そのリードの発言に2人は猛反発。

「オイッ！ 性格的につてどういう意味だゴルア！」

「そうよっ！ ジャミルはともかく、なんてあたしまで不安なのよっ！」

「テメエ！ 俺はともかくつてどういう意味だっ！ このコソドロ女の方がよっぽど問題だろオ！」

「はあ……どつちもどつちだよ……そう言えば、連絡手段はどうするんだい？」

リードが結構重要な事を言った。

「あつ……確かにな〜、『テレス』の類なんて持つてるやついないだろっし……どうすつかな〜……」

『テレス』とは、遠く離れた場所でも声を伝えることができる古代文明の1つだ。  
スタンド

手のひらに収まるコンパクトなものから、大型の据え付け型のもので数種類ある。

一般ギルド同士の連絡や、騎士団の部隊同士の連絡に用いられる。だが個人ではとても手が出せる代物ではなく、もってるのはこれらの大富豪くらいだろうしなあ……。

「ふっ……こんなこともあるつかと……じゃーん！」  
まじかつ！？

ルネは、懐から掌より少し小さめの長方形の物体を取り出した！  
それはまさしくテレス！

「おおお！ お前やるなあ！」

この状況でこれはないぞ！

「っていうか、よくこんなことがあるうとか思ったなあ……」  
確かに……。

ジャミルに激しく同意。

「この前、『雷光の巨龍』からかつぱらって来たんだけどね、いや、売っ払うの忘れてたみたい！」

雷光の巨龍！？

アスラント王国の方で幅を利かせている盗賊団だな確か。

紅蓮の霸王の次に巨大な盗賊団勢力だ。

技術的な強さはアスラント王国最精鋭部隊に匹敵するとかしないとか。

ドンだけすごいところから盗んでんだコイツ……。

っていうかもう黙って盗賊団の仲間入りした方がいいんじゃないか？

「なんでもさ、最新型はピアスみたいに耳に直接付ける超小型なタイプがあるみたいなんだって！ これは旧型だから、あんまし高く売れないんだよね。」

へえ……買うのは高くつきそうだがそういうものなのか。

いや、コイツの金銭感覚が狂ってるって可能性もあるけど……。

「そうだね、確か正規の騎士の隊長クラスは、ピアス型のテレステか使ってたよね？」

エルが騎士団のことを思い出しながら言った。

「ああ。その他にも本部には各駐留軍基地を結ぶ据付型のテレステかがあるって話だよ。僕は見たことないけど……って、まさか君は騎士団に手を出す気かい？」

リードがテレステの話をしていると、ルネが目を爛々と輝かせながら聞いていた。

「ん、冗談冗談！ さすがのあたしも、あの警備体制を突破するのは不可能だし」

「そういう問題じゃない！」

「そういう問題じゃねーよ！」

俺とリードのダブルツッコミが炸裂！

「ひっどお〜！　じゃあどういう問題なのよ〜！」

ああ、やばい。

こいつ腕さえあれば騎士団に潜入してテレス売りさばく気だ……。とりあえず、これ以上この会話に関わったらなんか重大犯罪の片鱗に触れてしまいそうなのでやめた。

「えっとー、とりあえずこれで、海班山班の連絡手段はOKなのよね？」

エルがいい感じに話題を変えた。

「おし、じゃあ確保でき次第、この拠点に集まろう！　それじゃ、解散！！」

かくして、ルネ、ジャミル、リードは海へ、俺とエルは山へ向かった。

#### リード視点

僕、リードはジャミル、ルネと一緒に、森を歩いていた。

「ん……あそこで森が終わってるね」

僕はひらけた空間を発見して言った。

「潮の香りが強エ。俺のカンが正しけりゃアこの先は海になってるハズだぜエ」

「そうだね。歩いて約20分か……島の構造は良く掴めないけど、それ程広大な島じゃなさそうだ」

僕は太陽の位置で時間を計っていた。

騎士団で教わるサバイバル術の一つだ。

こんなものが何の役に立つのか……そう思っていたが、役に立つのは案外早かった。

そうして森を抜けると、海風に乗って一気に潮の香りがした。

「うわ〜……海だ〜！！　見て見て〜！　あそこの高台、眺め良さ

そう！！」

ルネが言つてはしやぎながら走り出した。

ジャミルもその後続く。

君たちは子供かまったく……。

「うっひよオ！ すっげー眺めだぜ！ 岩場もあるし、こっからならいい魚が狙えそうだぜ！」

ジャミルは断崖絶壁に立ってそう両手を広げてそう言っていた。どれ……僕ものぞいてみるかな。

「へえ……確かにいい眺めだ。なんだかこれだけでもここに来た甲斐があつた気がするよ」

崖の先に見えたのは、どこまでも続く大海原だった。

天気もいいし、うん……これが絶景つてヤツなのかな。

「でも予想してたより高さは無いんだね」

前言撤回、そこそこの高さはあつたが、断崖絶壁というには少々低すぎた。

「あつたり前だろオ！ そんなに高かつたら釣り糸が届かねえ」

確かに……そう言えば、竿も何もないのだが、一体どうする気だ？

「さてと、じゃあ始めるかア。まず竿を作りに行くぞ」

「へえー、竿つて自分で作れるんだ〜」

ルネが言う。

「普通は買つんだがな。ガキの頃は小遣いが少なかつたから、オヤジに教わつて枝とかで自作してたんだよ。まア見てな」

ジャミルは森の中に入つていき、ちょうどいい感じの大きさの木の枝3本と、細いツタを持ってきた。

「コイツはシシゲつて木の枝、こっちはハチスつて木のツタ。いいか？ こいつをこう組み合わせでな……」

ジャミルの釣り講座が始まつた。

彼の目つきは、なんだか職人に近かつた。

これなら、僕はあつちについてても安心だったかな。

そう考えると……逆にエルとアークが心配になつてきた。

天然とのんびりお調子者。  
あれ？ 本当に心配になってきた……。

森・アーク視点

「これこれ！！これはどう!?!」

エルが元気よく、キノコを拾って持ってくる。

「駄目だ駄目駄目！ 思いつきりアウトだっ!」

「なんでよー、なんでなんでなんでー?」

だだをこねる子供のように聞いてくる。

うるせえ!

「こんな毒々しい色のキノコ食べるかあ！ なんでお前はさつきから謎のグロテスク生物しか持ってこないんだ!」

「むーっ！ 食べられるかもしれないでしょ！ 食べてみないとわかんないじゃんそんなのーっ!」

「だったら1人で食ってるっ！ 俺はそんな下らない事に命をかけたくない!」

「いいもん！ 後でこっさりアークの皿に……」

「やめる馬鹿野郎！ 暗殺する気かお前は!」

「なんで死ぬって決まってるの？ 半分半分の可能性じゃんそれは!」

「だからなんで半分の可能性に命を掛ける方向で話が進んだよ! 絶対の可能性じゃだめなのか!?!」

「絶対……死ぬ?」

「逆だ逆!! なんだ!? お前はそんなに俺を殺したいのかっ!」

「まさかそんなさ」

「はあーっ……人選ミスったな……」

さつきからこんな問答が続いている……。



なんかこいつは見た目「どう見ても食えないだろう」という物しか持ってこない……。

そこら辺を飛び跳ねてるでっかい虫みたいな奴とか、木の葉にひっついてる巨大芋虫とか、赤と黄色と青が混ざったカラフル過ぎるキノコとか……。

なんていうか……センスない……。

以前無人島で死にかけた結果、というのが毒キノコが気になって親父に教えてもらったのだが、そのおかげで大体は把握した。

よって俺は食えそうなものをもって進むのだが……エルは相当毒キノコにハマってしまったらしい。

場合によっては1人くらい死者が出るかもな……。

むしろ、こいつと組んだのがルネとかだったら恐ろしい。

あいつは何にも考えてない感じだから、きつと毒キノコを山ほど抱えて帰ってくるはずだ。

まあそもそも、そんなキケンマックスなメンバーをリードが許すはずがないが。

「ッ！ アーク！ 魔物ッ！」

エルの声が真剣になった。

「マジかッ！ ってコイツは……」

俺は即座にダガーを抜き構え、魔物と相對する。

その魔物は……。

「ドラゴンウルフウウ！？ しかも3体かよ、うわ〜めんどくせえ！」

目の前にいるのは小さいドラゴンを4足歩行にしたような奴だ。

翼はあるが飛行能力は無い……はず。

とはいえ火球を放って攻撃とか普通にしてくる癖に、動きも素早いし爪での攻撃もなかなか強い。

レベルDだがその中では最強クラスの魔物だ。

だが……。

「こいつは焼けば旨って話を聞いたことがある。エル！ 今日

焼き肉だ！ 頑張れ！」

俺はドラゴンウルフにダガーを向ける。

「ガハツ……まさか……貴様、何故それ、を……」

初老の男が1人、血を吐いて倒れた。

「何故？ 決まっただろうが。他の賢者様も俺様が殺っちゃったからなア……」

初老の男に攻撃をしたのは、30代くらいの男。

迷彩柄の丈の長いコートを着込み、いくつもの腕輪を手からジャラジャラと垂らしている。

髪は金の短髪で、紅蓮のような瞳の目は凶気に満ちていた。

そして、最も注目すべきは両手首から伸びる3本のクロー。

クローは若干電気を帯電していて、刃と刃の間でパチパチと電流が流れていた。

そして、その長いクローは、血で濡れていた。

感電することを考えず、クローから滴る血を下品に舐めながら口を開く。

「最初に殺ったのは……8年前か。あんときはビビったぜ。まさか死の間際に魔鎖の呪縛を使われるとはな。おかげで最近まで封印が解けなくて困ったモンだぜ」

老人の反応を愉しむかのように、金髪の男は凶気に満ちた笑みを浮かべる。

「貴様まさかツ……ブラストレイズを、再び……！？」

老人は、何かに気づいたように、傷口を押さえることも諦めた手で必死に起き上がるようにする。

「それ以外に何があんだよ？」

「馬鹿な……あれを使えば、貴様とてその身は……持たんぞツ……！」  
その老人は、『プラスチック』という物についてなにかを知っているらしい。

そうして、会話に夢中にさせる傍らの手を、必死に伸ばす。  
左手の先には、旧式の拳銃が転がっている。  
記憶を辿る。

弾丸は、あと1発は残っていたはずだ。

「ああ？ 知ってるよんな事。俺はなア。ただ壊せりゃいんだよ、何もかもな……ククク……」

金髪の男は気付いていない。  
気付いていない。  
手を伸ばす。

拳銃まであと、8センチ……4センチ……1センチ……。

「き……貴様の好きには……させんぞツ……！」  
拳銃に指がかかる！

そのまま、流れるような、けが人とは思えない動作で狙いを定め引き金を引く。

鼓膜を破くような破裂音とともに、鋼鉄の弾丸が発射された。

腕は反動で脱臼し、拳銃は遠くへ跳ね飛んだ。

両手で構えて撃つものを、血まみれの利き手じゃない方の片腕だけで撃つた結果だ。

弾丸は恐ろしく精度の悪い方へ飛んでいったが、それでもこの距離なら外さない、外せない。

そう、確かに当たったのだ。

こんな距離で外せるわけがない。

目の前の男は生身の人間だ。

弾丸を食らって無傷で済むはずがないし、魔術を使える隙も与えなかった。

ならば何故、目の前の男は凶気に満ちた顔で、口元を歪ませて笑っているのだろうか。

「なにこの世の終わりみてえな顔してんだア？ そんなに驚くことじゃないだろオゼ。これも『ブラストレイズ』の持つてる力の1つなんだからよオ」

平気な顔をして何をいつているのだ、と老人は思う。

金髪の男は、弾丸を片手1つで弾いていた。

ブラストレイズは、自然の摂理のあらゆる決まり事を、こつも簡単に破壊してしまうのか。

1つ1つが災害級の破壊力。

それら全てを手にしたとき、文字通りこの男は、

『魔神』に、なる。

「いい加減誰相手にしてんの分かれやア、さて、長話も終わりにすつかア、賢者、ハルアロッド・タリスマン様よオ」

それが、老人……タリスマンが聞いた最後の言葉となった

小さい部屋は、血で染まった。

## 第22話「紅眼のドラゴンウルフ」

前回のあらすじ……

担当：アーク・シュナイザー

無人島での生活を始めた俺達。

2班に分かれ食料を調達しに行く。

俺はエルと山へ行ったが、途中から人選を後悔した。  
するとそこに1匹の魔物が！

おや？ 今日豪華な飯が期待できる……かも？

このころ、既に事件が発生していた事を、俺達はまだ知らなかった  
……。

グルギヤオオオオオオオオ！！！！

目の前には思いつきり威嚇してくるドラゴンウルフ。

ふっふっふ俺達の夕食のメインディッシュとなるがいい！！

「エル！ やるぞ！」

俺はエルに合図を送ると同時にダガーを構える。

左が逆手、右が準手のオリジナルだ。

「任せて！ 聖なる力よ！ ホーリーブラスト！！」

エルは白い魔法陣を展開し、杖を振り、4つの光球を放つ！

光球はまっすぐドラゴンウルフへと飛んで行った。

だがドラゴンウルフは左後方へジャンプして難なくかわした。

光球が白い閃光を散らして炸裂するのに目もくれず、俺はかわした直後のドラゴンウルフに向かって走り、右ダガーで首を狙う！

「くそっ！」

だが外した！

ドラゴンウルフは俺の背後に回り込み、すかさずツメで攻撃する。素早すぎだる動き！！

「くうっ！！」

俺はかろうじてツメを左ダガーで防いだが、あまりの勢いで後方へ吹っ飛んで尻もちをついた。

馬鹿みてーな力だ！

そこに追い打ちを掛ける勢いで接近するドラゴンもどき！！ギヤオオオオオオオ！！

うおおおお！ 吠えてる吠えてる！ 恐ッ！

とか考えてる場合でもないので体制を立て直す。いくらレベルDだからってそう簡単に俺を食えると思うなよ！

「アーク！ 大丈夫！？」

魔方阵を組み上げながら俺に声をかける。

「大丈夫だ！ お前はいつもみたいに適当にホーリーブラスト撃ちまくって敵を攪乱してくれ！」

「分かった任せて！ 聖なる力よ！ ホーリーブラストッ！！」  
ちなみに、魔法は体力を消費する。

限度を間違えれば、ぶっ倒れることもあるのだ。

「分かってると思うが無理すんな ってうわああああ！！」

光球がこっちにまで飛んできたああ！

俺は右にジャンプして味方の攻撃をかわした。

馬鹿野郎おお殺す気か！

って言おうとしたがちょうど敵の背中に回り込めた！  
チャンスだ！！

「死ねドラゴンの出来損なえがッ！！ クロスエッジ！！」

俺は謎の決めゼリフを言いながら、急所である長い首めがけて十字にダガーをクロスさせて切り裂く。

これは決まった！

ガアアアアア！！

しかし、思った以上に効いてない！

っ！か怯んでねえ！！

グオオオアアア！！

やばッ！ ヤツの右手が　！

「ぐあはッ！ ……痛つてえ……」

右手が俺の体にクリーンヒットし、俺は3mくらい宙を舞った後転がった。

世界がぐるぐる、いやいやふざけてる場合じゃない。

「アークッ！！　天よ、我らに聖なる活性を！　エイドー！！」

あゝゝ、助かった。

俺は打撲が治り、とりあえず距離を置く。

「サンキュ、エル！」

いいつつ、俺はいつもの違和感を感じていた。

やっぱ、おかしい。

最近どうも体が軽すぎる。

息切れもしないし、敵の動きも良く見えすぎる。

だが好都合である事は変わらん！

「……野郎、調子乗るんじゃねえ！」

とりあえず攻めに転じないと！！

グアアアアアア！！

だがドラゴンウルフは地鳴りのような咆哮とともに、俺に尖ったトサカ見たいな頭を突っ込む。

そんな攻撃当たってやんねえ！

「よつと！」

俺はバツク宙で軽く攻撃をかわすと、

「おら、お返しだッ！！　クロスエッジッ！！」

そのまま魔物の側面に着地し、首を十字に切り裂く！

「駄目ッ！ アーク逃げて！！」

決まったはずなのに、効くどころか怯みもせずに反撃するドラゴンウルフ。

「あぶねっ！ うおおっ！」

俺は尾の攻撃を間一髪かわし、とりあえず距離をとった。

クソッ、どういう事だ！

怯みもしないっておかしいだろ！？

「エルツ！！ コイツの急所って首だったよな！？」

俺は右から飛ぶ拳をしゃがんでかわしながら聞く。

「絶対そうだった！ 怯みもしないなんておかしいよ！ 二回も決めたのに！」

普通、魔物には“急所”というものがある。

皮膚の皮が薄くなっていたり、神経がより敏感だったり、生命維持に重要な器官だったり理由はいろいろだが。

それが無い魔物は基本的にレベルB以上に分類される。

んで、コイツの弱点は皮膚が薄く、簡単に切れる首の裏側なのが、さつきから不思議な程ビクともしない。

「突然変異かよ！？ こりゃタフってレベルじゃねーぞ！？」

頭突きを紙一重でかわし、偶然にもドラゴンウルフと目が合う。

そこで俺は重大な異変に気付いてしまう。

「……おいエル。ドラゴンウルフの目って、黄金色だったよな……？」

そのドラゴンウルフの目は、瞳も見えないくらい真っ赤に充血していた。

濁った赤……とでも言うのか？

とにかく変な目だった。

「え……？ おかしいよ……こんなの騎士団の教導本にも載って無かったよ！」

エルは濁った赤い目を見て困惑している。



「おい！　なんでこんな変な目なんだよ！　マジで突然変異なのか！？」

グギャアアアアア！

俺の言葉が癪に障ったのか、いつも以上の奇声を発するドラゴンウルフ。

ちよ、怒るなよ！

とか思っていたら、突然大口を開け、バスケットボール大の火球を飛ばしてきた！！

「ぬおっ！？　でも当たるかよ！」

俺はビックリしたが、ドラゴンウルフが火球を飛ばしてくるのは知識として知っていたので左に飛んで避けた。

草むらで火球は弾け、ゴオオ！　と燃えだす。  
なにこれ？

山火事の危険？

そっぴや……おかしいぞ？

こいつら、普通は荒野とかに生息するはずだ。

森の中に火を吹く魔物がいるはずない。

山火事でも起こしたら、自分の棲み処を消す事になるんだからな……不自然な強さ、赤い濁った眼、そして本来ありえない場所の

生息……。

もしかして俺達は……なんかとんでもないモンと相対しているのかもしれない……とか思ったり思わなかったり。

でも今はそんなムズカシイ事よりも分りやすい事がある。

それは……こいつらを早く倒さないと焼き肉どころか俺達ごと炎に巻かれるって事だ！！

「エルツ！！　お前水属性の魔術使えねえのかッ！？」

使えない事は知っているが、聞いてみる。

「使えないよッ！　それよりアーク後ろッ！！」

「な」

背中に衝撃が走った。

コイツ……いつの間にか背後から不意打ちしてきやがった。  
勢いを殺すことができず、地面に体のあらゆるところを打ち付けながら転がされた。

痛つてえ……またかよ、だつせえなあ……。  
起き上がったときにはドラゴンウルフと5mくらいの距離ができていた。

「不意打ちとは……やってくれんじゃねーかエセドラゴンもどきめ  
つ……！」

ガアアアアアアアアアア！

まずい！

距離を詰めて爪を振り上げ追い打ちをかけようとしてる！

くそツ！ なんて力だよ……思うように体が動かん！

「聖なる力よ！ ホーリーブラストツ！」

窮地を救ったのはエルだった。

ヤツに光球が直撃し、っ少っしだけ動きが止まる！

「くツ！ サンキュ、エル！」

俺は即座にドラゴンもどきから距離をとる。

ガアアアアアアアアアア！

大口を開いて火球を放つ。

狙いは……エルだツ！

「エルツ！」

くそツ！ 詠唱中かよ！

このままじゃ直撃だ！

「くそオオオオオオ！」

俺は咄嗟に前へ出てエルをかばおうとする。

「駄目ツ！ アーク！！！」

エルの声が聞こえたが、火の球は既に目の前にあった！

反射で思わずダガーを握る手を前に出すが、

火球は俺に直撃 する事無く当たった瞬間四方に分解し消滅し

た。

「……………は？」

一瞬目が点になったがチャンス！！

「よくわからんが今だ！ うおおおお喰らえ！！」

俺は正面から数発連撃を加え背後に回り込み

「とどめッ！ クロスエツジ！！」

十字に首を斬り裂く！

グオオオオオオ……………！！

やった！ やった！ 怯んだ！！

同じところを攻撃し続けた結果、ようやく攻撃が皮膚に達したよ

うだ！

後少しだッ！！

## リード視点

「おりゃああアアア！！」

彼は なんていうかすごい。

次々に魚を釣り上げて行く……………のだが。

「ちッ……………またコイツか……………どうなってんだこの島は……………」

ジャミルがつつたのは20cmクラスの中型の魚

それはいいのだが……………なんか見た目が嫌にカラフルで、目が飛び

出てて、触るとねっとりした液を出してくる。

一言で言えば……………非常にグロテスクだ。

なんだか……………深海魚みたいだ。

「ねえジャミル……………それ10匹目なんだけど……………食べられるのかい……………」

僕は恐る恐るに聞いてみた。

「分らん！ 俺だって全ての魚を把握してる訳じゃねエし。でも、

多分大丈夫だ！」

「そう……なのかい？ でもその自信はどこから来るんだ……？」

僕は若干……いやかなり引きながら聞いた。

「強いて言うなれば……長年の勘って奴だなア！ いいから黙ってジャンジャン釣れエ！」

「大丈夫大丈夫！ きつとアーク辺りが毒味してくれるって！ それに、見た目がグロテスクな物ほど旨いってよく言うじゃん！ 見た目〓味だと思ってるよ、そのうち痛い目に会うかもよ〜リード！」

「ハハ……気をつけておくよ……じゃなくてっ！ そんな訳のわからない物、確かめずに食べて毒でも入ってたらどうするんだい！？」

なんだか話題を反らされて、危うく納得してしまう所だった。

「だから、アークが確かめるでしょ？ それにいざとなったらエルの治療術もあるし！」

さも当然のごとく言うルネ。

君も苦労してるね……アーク。

「はあ……分かったよ。違う魚を釣るように僕が頑張るよ……」

ごめんアーク。

結局君には毒見を任せることになりそうだよ……。

### 第23話「緊急の時ほど冷静に」

前回のあらすじ……。

担当：エルアス・ミルド。

私達は山へ芝刈りに……じゃない、食料を探しに行っただけで、そこで見つけた魔物はドラゴンウルフというレベルD最強の魔物だったの！

アークが言うとおりのバーベキューにぴったりの魔物なんだけど、なんだか様子がおかしいみたい。

私はとりあえずホーリーブラストで攪乱しつつ援護するんだけど、アークが急所を狙っても全然効いてない！

しかも……眼の色が黄金色どころか真っ赤だし……。

その上火球を飛ばして木々が燃え始めてる！

これって……もしかして大変な事になるかも！？

アーク、気をつけて！！

「クロスエッジッ！！」

ジャンプからの飛びかかり爪攻撃を華麗にかわした後、エルのホーリーブラストが直撃し、同時に俺のクロスエッジが決まりようやくドラゴンウルフは倒れた。

戦闘開始からかなり時間が立ち、あたりの木々は火球によって轟々と燃え上っていた。

既に日は落ちかけていたが、燃え盛る炎のお陰であたりは明るい。つてかなな悠長に解説してる場合じゃねえ！

あつちい焼ける！！

「エル！？ 大丈夫か！？ くつそ、煙が……！！！」

俺達は林の中で軽く炎に巻かれていた。

まあ油断したら、熱と煙で下手すると死ぬぜこりゃ。

俺は煙と炎をよけながらエルを探す。

くつそお……灰が痛え……。

思いながら岩影を除くと、ちょうどエルを発見した。

「エル！ 大丈夫 てエルツ！？」

ドサツ、という音がしてエルが突然倒れた！

「おい！ 大丈夫かよ！」

俺はそばに駆け寄って、抱きかかえながら声をかけた。

「大丈夫……かな？ 八八、ちよつと魔法使いすぎちゃったみたい

……ごめん」

弱々しすぎる笑顔で俺に言った。

「ったく……だから使いすぎるなって言ったのによ」

こいつはホント自分のこと考えないもんなあ……。

「……ごめん、迷惑、だよね」

何を勘違いしたのか、こんなこと言ってくるし。

「馬鹿野郎、心配掛けんなって言ってたんだ。とりあえずここは火が

ヤバイ。逃げねえと！ 立てるか？」

「うん…… 大丈夫だよ」

だからそんな弱々しい笑顔で答えるなっつーの。

無理してんのバレバレだろーが。

……だがそろそろマジで炎が迫ってるのでどのみち行くしかねえ！

「悪いがちよつと無理してもらっぜ！ このままじゃ焼け死ぬ！！」

俺はエルの手を引いて走り出した。

燃えて倒れる木を飛び越し、飛び散る火の粉を振り払い、時には

炎に突入しながら俺はテレスを取り出す。

長四角の小さい箱を取り出し真ん中のダイヤルをひねり、番号を合わせる。

『おい！ リー 』

『 アークツッ！ 』

『 うわっ、びっくりした 』

俺は思わず耳元からテレスを離す。

声でかすぎ！

『 君は何をしているんだい！？ 』

『 お、やっぱ火事になってんの見える？ 』

チッ、こっちは火の勢いが強すぎて通れねー！

あそこを潜っていくしかねえか……。

『 当たり前だ！ まさか君は放火 』

『 するかっつーの！！ とにかく うおっ 』

岩下を通ろうとしたら突然木が倒れてきて危つくぶつかるどころだった。

『 大丈夫か！？ 』

『 俺は大丈夫……ってエル！ おい！！ 』

エルが倒れた！

……ってオイ、気絶してるよ！

顔色も悪いしちよつとヤバすぎる。

『 エルがどうしたんだ！？ 』

リードの声が焦る。

『 エルが気絶した！ 魔術の使い過ぎで落ちた体力に、この煙と炎じゃあな…… 』

くそ、仕方ねえおぶっていかか！

『 とにかく僕達もすぐにそっちへ行く！ 君はエルを頼む！ 』

『 分かった！ 頼むぜ！ 』

そう言って、俺はエルをおぶって炎の中を駆けた。

炎の中……を？

「 っって、もう抜けてんじゃん 」

俺の周囲に炎は既に無かった。

走るのに夢中で気付かなかったぜ。

後ろを振り返ると、炎は案外大したことないように見えた。

「なんだよ……マジビビったんですけど……」

冷静になってあたりを見渡す。

「ここら辺はちょうどごつごつした岩場になっていて、燃え広がる心配はなさそうだった。

「てことは……俺が焦ってただけかよ！」

さっきまでの妙なテンションが急に恥ずかしくなった。

「つかむしろリード達が来る前に鎮火しそうな勢いですけど？」

「うう……」

そんな時、エルが意識を復活させた。

もつおぶる必要はないので、そこらへんの平たい岩に座らせた。

「よう。気分はどうだ？」

「うー、まだましかも。っていうか火事は!？」

エルはまだ若干辛そうにしながらも現状を尋ねる。

「なんか思ったよりひどくねーみてーだ。鎮火しそうな勢いだし」

リードに心配ご無用の連絡を入れねば。

「あ、ホントだ。でも煙すごかったねー。あつ！ 運んでくれてありがとう」

「やっぱ……迷惑かけちゃったね」

うつむいてあからさまにしょんぼりしながら呟くエル。

「そんな気にしなくてもいいって……だいたいエルが魔法使ったのは俺が喰らったからだし、お互い様だつて。まあお前にはもうちよつと自分の限界を考えて欲しいけどな」

エルはいつもいつも自分を顧みな過ぎるからな。

「まあ、もつと自分大事にしろつて事」

「あはは、そうだねー」

ふむ、まだ弱々しいがある程度の元気は回復してきてるようだ。

「あつ、やべ、リードに連絡しねえと」



俺は再び懐からテレスを取り出してIDを合わせて通話する。

『あー……リード？』

『アークー！ エルは無事かい！？』

声でさえよ。

『おおお、無事無事。つーか火事収まってきたわ』

『そうか……燃え広がる心配は？』

まだリードの声は真剣だ。

『たまたま周りが岩場だったから無さそう。超焦って連絡したのになんかスマン』

俺は火事の方を見る。

火は殆ど無かったがやはり焼け焦げた木々の匂いがひでえ。

『いや実際、大規模な森林火災に発展してもおかしくないから、その位の心構えの方がちょうどいいと思うよ君は。まあ事態を正確に判断する能力には乏しいようだけどね』

『おいてめえ馬鹿にしてんだろ。サラッと馬鹿にしたる今！！』

俺はテレスに噛みつく勢いで反論！

『知らないね。それより原因は？』

話題変えんな！

と言いつつ乗ってしまう自分が憎い。

『あー……ドラゴンウルフの火球だよ』

立ってるのが疲れたのでとりあえず岩肌に座る。

ケツが痛え。

『ドラゴンウルフって……荒野に生息してるアレだろ？ こんな所にいるはず……』

『それがいたんだって。ありや見間違いじゃねえよ。倒したし』

俺は再び火事の方を見る。

倒したまま放置してきたがまさか逃げたりしてねえよな？

『倒したってことは、一応食料は確保したのかい？』

『多分な。もしかしたら火事で焼けてるかもしれないが。っていうかお前はとうだったんだ？ 食料』

俺は海へ魚釣りに行ったリード達の成果を聞く。

『まあ……一応大漁かな。……深海魚が』

声が異様に暗かったのでよく聞こえない。

『進化……何？ まあいいや。詳しい事は後で話すか。取り合えずこつち来てくれ』

と言い、俺は通話状態を解除してテレスをしまった。

「エル、調子はどうだ？」

俺は岩肌で休んでるエルに声をかける。

「うん、だいぶ良くなったよ！ ……あれ？アーク、そんな腕輪付けてたっけ？」

エルが俺の右腕の腕輪に気付いた。

ずいぶん唐突だな。

「ああ、これ、元俺ん家で拾ったんだ。なんとなく付けてる」

ちなみに、俺の家で起こった出来事はみんなには話してない。

なんだか余計な事に巻き込んでしまいそうだったからだ。

「……………」

エルはなぜか黙って腕輪に手をかざしている。

「エル……？」

「腕輪から、少しだけど魔力を感じる……これって……レイズ？

じゃ、ないよね？」

レイズとは、古代兵器の事。

前にも言ったようにエルの杖やリードの籠手を指すのだが、これは……違うだろう。

そんなものが廃屋に転がってる訳が無い。

「いや、違つとおも いや、待てよ？」

確か……そうだ、この腕輪をつけてからだ。

体が妙に軽く感じたり、動きが良くなったり、体力が増えたり…

…そうだよ！ なんて気付かなかったんだ！？

でも、そんなにいくつもの効果を得られるレイズなんて実際あるのか？

「アーク？」

急に黙ったのでエルが聞き返してくる。

「いや、なんでもない。これは廃屋に落ちてたんだ。それに、そんな簡単にレイズが手に入る訳ないだろ？」

「そう……だね。気にする事ないか」  
そうだな。

きつと、俺の気のせいだろ……。

でも。

さっきの、突然弾けて消えた火球は……あれはなんだっただんだ？

俺は思わずダガーを見る。

きつと……このダガーに当たったから……だと思う。

これは、親父が10歳の誕生日に俺にプレゼントしてくれた物だ。

そして、俺にとっては親父の形見でもある。

くそ、違和感と言い腕輪と言いダガーと言いさっきの魔物と言い、意味分らんものが多すぎるぜ。

## 第24話「ゲロ魚の味は……？」

前回のあらすじ……。

担当：アーク・シュナイザー。

なんとかドラゴンもどき……もといドラゴンウルフを撃破した俺達だがその後が大変で、煙と炎に巻かれながら必要以上にパニックたそりやエルは気絶するし、煙は凄いで混乱するわ。んでもって炎を脱出したら、案外大したことない火事だった。にしても……あのドラゴンウルフはなんだったんだろ……。それに俺のダガーや腕輪、そして核心へと変わる謎の違和感もあって、俺の気持ちはなんだか落ち着かないのであった。

「おいリード！ こつちだこつち！」

リード達が近くまで来たみたいなので、手を振って知らせる。

「手を振らなくても分かるよ。ここだけ凄い事になってるかららね

……」

俺達の周囲は岩場となっていて、その先では小規模な火災の跡が広がっていた。

小規模と言ったが、さすがに木々が焼けるので一目でわかる。

というか、煙まだ少し上がってるしこれほど分りやすい合流地点もねえな。

「こりゃスゲエ。よくテメエら生き残れたなア」

ジャミルがあきれ半分で口にした。

「それよりそれより、噂のドラゴンウルフはどこにいるのかな？」

ルネは興味津々といった顔で俺を覗き込んできた。

近いよ顔がつー!!

「っつ、普通に言えないのか普通にっ……ちなみにドラゴンウルフはあつちだよ」

「たたく……この程度で動揺するとはまだまだだな。

いや何がかは知らんが。

と変な事を考えつつ獲物の場所を教えて歩き出す。

「にしても焦げ臭いね……お、もしかしてあれかい？」

そこには横たわる魔物の姿が！

「ああ、あれだな。見るホントにドラゴンウルフだろ？」

肝心の肉は、なんと火災によりこんがり焼けていた。

コレ食えるのか……？」

「しかし……本当にドラゴンウルフがいるなんて……なんでだい？  
無人島マスター」

リードは俺に聞いてきた。

「俺に聞くなよ！俺だつて知るか！」

と俺はヤケクソになって返すが、

「……ただリード、この魔物、様子がおかしかったの」

エルは真剣な表情でリードに言った。

「………どういう事だい？」

一瞬考える素振りを見せてエルに聞く。

「眼が真っ赤に充血してて、歯茎も血が滲んできた。瞳孔は開きっぱなしで気性は荒いし、弱点を何回もついても全く怯まなかったの。

これってまさか……」

エルはあの状況で俺が気付いたこと以外にもしっぴかり観察していたようだ。

「強え………なんだかんだ言っても騎士のタマゴだな。

「………ああ。騎士団に報告されていた凶暴化症状にそっくりだ。道

理でこんな現れないはずの場所にいたのか……」

リードが難しそうな顔をしながら言った。

「凶暴化？　なんだそりゃ」

俺はとりあえず聞いてみる。

「最近、魔物の異常行動や凶暴化が多く見られてるらしいんだよ。今思えば、ジャミルが前に言っていたアーバントの件も、凶暴化の可能性が高い」

あゝ、そついやんなこと言ってたっけ。

確か討伐ギルド『蒼き刃』が返り討ちにあつたつていうアレか。

「物騒な世の中よね、まっ、倒せたんだからいいじゃない！」

ルネは相当腹が減っているのか、なんかすげえ食いたそうにしてる。

「はあ……頭の単純な奴はいいよな……なあリード」

「いや、僕的には君も同じ部類だけど……」

何気にひでえ！

「それより、そっちの収穫はどうだったんだよ？」

深海がどーのとか言ってた気がするが。

「おう！　大漁大漁だ！！」

「アーク見たらきつとびつくりするよ！」

ジャミルとルネは胸を張って自慢げに語る。

「いやまあ、ある意味驚くね、あれは……」

「ん？　リード、どうした？」

リードがなんか目を合わせない。

なんか残念そうなおーラが見えるんだが……？

「いやあ、なんでもない。それより、このドラゴンウルフはどうするんだい？」

リードがドラゴンウルフ（焼死体）を見ながら言う。

「もつちろん！　食うでしょ！！」

「料理は任せてね〜！」

女性陣は食う気マンマンだあああ！！

「……どうします？ リードさん」

俺は小声でうかがう。

「まあ……食えない事はないんじゃない……かな？」

おい、笑顔がひきつってるぞ。

「とりあえず、ありやア焼き直した方がいいよなア……」

うん……俺もそう思うよ……。

って感じで、食う感じで決まったのだった……。

俺達はドラゴウンウルフ（半焼け）を最初の場所に運んだ。

重てえなクソヤロー！

「よし！ じゃあとつとと昼飯の準備しよ〜！ あ〜おなか減った！〜！」

ルネ……なぜお前はそんなにテンションが高いんだ……。

それから、ドラゴウンウルフの肉を俺のダガーで適当な大きさに切つて、ジャミルが探してきた木の棒に突き刺し、エルとリードが持ってきたマキで火を起こす。

その途中、ジャミル達の成果を目にしたのだが。

「見て見てアーク！ いっぱいこんなに釣ってきたよ〜！ よいしよつと〜！」

ルネが網を持ってきた。

その中には大漁の魚があつたのだが……

「お？ いっぱいじゃん。どれどれ〜？ って、なあんじゃ〜りや

あああああー！〜！〜！」

「わあ〜、お魚がいっぱいね〜！」

網の中はなんか無駄にカラフルで目ん玉の飛び出た魚がいた！

「おいエルううっ！ お前はこれ見てなんとも思わねーのかっ！！」  
「カラフルだよねえ」

「じゃなくてっ！ お前の感性はどうなっただよ！ どんだけグロテスクな物大好きなんだよ！！ お前は秘境の民族出身かつ！」  
「むっつ、アークひどい」

「酷いのはお前の頭だ！ ……おいリード、お前が付いていながらなんでこういう事件が起きた！ なんで1日2度も謎のグロテスク生物に遭遇しなきゃなんねーんだよ！」

「大丈夫、あの〜、これ〜……食べるらしいよ？」  
目が泳いでる。

「っつか思いつきり目をさらされてるんだけど！  
冷や汗かいてるんだけど！」

なにこれ、そんなにヤバいブツなのか？

「嘘ついてんじゃねえよ！ 分かりやす過ぎだろうがお前！ っただけウソ下手くそなんだよ！ っっていうか嘘なのか！！」

「というわけでアーク！ 食べてみて！」

ルネがグロテスクな魚の端っこを掴んで俺に渡してくる。

「今の会話でどうしてそうなったあああ！ っっていうか何そのヌルヌル！ きめえ！」

「良いからいいから！ 毒見よろしくねっ！」  
とっつても綺麗な笑顔で告げてくれました。

思わずグロテスクな魚を手取る俺。

「いやいやいやいや待てよ！！ なんで！ コレ俺が食う事決定なのか！？」

「決定……だね」

「決定！！」

「頑張ってねーアーク！」

「大丈夫だア！ グロテスクな物程旨いってルネが言ってたぜエ！」  
リード、ルネ、エル、ジャミルの順で俺に食えとれる発言をし



てくる。

「……マジか……」

なんか、理不尽じゃね？

扱い酷くね？

そして期待のまなざしが俺に集中する。

「いやあのちよつと待って。生で食べ、と？」

「魚の一番旨い食い方……それは、刺身だ！」

「よし焼こう」

「オイッ！」

俺はジャミルの自信十割で構成された発言を完璧に無視し、棒にグロ魚を突き刺し、火であぶる。

「……………」

ジュワァア！ と言って表面のヌルヌルが溶けて行く。

目玉がどんどん白くなつていつて皮膚が焼けただれ……・なんかいちいち説明するのも余計にグロいから以下省略。

「……焼け、たな……」

俺は串に刺さったグロ魚を見る。

その俺をじー、つと注目する4人。

「あの……すげー食いずらいんだが」

「感想を聞くまでは見続けるよ！」

とルネ。

どうやらやめる気は無いらしい。

はぁ……俺も男だ。

お前らがそうなら覚悟を決めようじゃねーか。  
アーク・シュナイザー、行きますー！！

ガブッー！！

「「「「「おおー！！」「」「」

むしゃむしゃむしゃ……「じくん。」

「「「「「」

「う……」

「「「「「う?」「」「」

「うめええええええええええー……!!!!」

絶品でした!!

### 次回予告

アーク「おはようござえまーす！　今回もあらすじを担当するのは俺、アーク・シュナイザーと〜？」

エル「私、エルアス・ミルド！」

ジャミル「ジャミル・ハワードだア」

リード「リード・フェネスです」

ルネ「やつほ〜！　ルネ・アースだよ！」

アーク「って多いよっ!!　全員参加かいっ!!！」

リード「君がすっかり知らないから全員で手伝う事にしたんだよ」

アーク「いっつも好き勝手に引っかき回してんのはためーらだろっ

！」

ルネ「ま〜ま〜、そう言わずお茶でも飲んで」

アーク「何故にお茶!？」

エル「お茶はリラックスするからねー」

アーク「そうか……じゃあ……って沸騰してんじゃねえか熱すぎだろー!!！」

ジャミル「おオ？　なんだ、熱いのは嫌いだったかア？」

アーク「お前が入れたのかよ。限度を知れ限度を」

ジャミル「限度オ？ 諦めたらそこで試合終了だろオが」

アーク「使い方違えよ！！ お茶まで熱血かお前はっ！！」

リード「アーク……ちゃんと次回予告しなよ……」

アーク「完ッ全にお前らの妨害のせいだろおがあああー！！！！」

リード「うわっ！ アークがキレた！！」

アーク「次イイイ回ッ！！ 『さあ、探検だ〜！！』 絶対見る見

ねえと殺すぶっ殺すウガアアアア！！」

ルネ「だ、誰かアークを止めて〜！！」

## 第25話「さあ、探検だ〜!!」

前回のあらすじ……

担当：アーク・シュナイザー

グロ魚うめええええー!!!( しっこい

無人島(仮)・夜

「ふっは〜、食った食った! これでしたらくは動けそうだな!」  
と俺は言いながら、後片付けの準備をする。

「……にしても、参ったよ。グロテスクな物程うまいって本当だったんだね」

リードはマキを片づけつつ感心する。

確かにあのグロ魚が美味なのは意外すぎる。

神様はどう考えても見た目の設計を間違っている。

「どうだ! これがルネ・アース様の眼力の力だ! ふははははは!」

ルネは両手を腰に当ててどっかの魔王みたいな笑い方をする。

コイツはどう考えても俺に悪意を持っている……。

「テメエ変な笑い方してねエで片付けろっつーのオ!」

ジャミルがルネを叱る。

「ハイハイ、でも怒ってばっかいると血圧あがるよ〜?」

ルネ、焚きつけるなよ……。

「ンだとゴルア! そういうテメエこそ いったア!!」

ケンカを始めるとエルが速攻杖で殴った。

「怒らない怒らない」

ニコツ、とほほ笑んで場を収める。

でも、殴るなよ……。

「テメエいちいち殴ンじゃねエっつーのオ！」

そんなこんなで後片付けは終了した。

## 翌日

昨日、俺達はドラゴンウルフとグロ魚を食った後、夜間の行動は控えるべき、という俺案が採用され寝る事になった。

んで今翌朝。

昨日はちよつと寝過ぎて酷い目にあつたのでさすがに今日は起きる。全員で起床して、とりあえず朝飯確保。

グロ魚が釣れると聞いて、俺達全員で海へ向かう。

そこで魚を焼いて朝食を取った後、今後の活動を決める為に一度話し合う事にした。

そもそも俺達の目的はここで自給自足して幸せに暮らすことではない。

そう、島から脱出することだ。

「無人島無人島と言っていたが、ここが本当に無人島かどうかは正直わからん」

俺はみんなを集めて話す。

「したがってもし人が住んでいたらこの島からの脱出も容易になるし、もしかしたらどっかにポートとかがあるかもしれん。よって次の行動はこの島の探索だ！」

「確かにね……見た感じ人の気配はなさそうだけど……」  
リードが辺りを見回して呟く。

「わっかんねエぞ？ 意外と仙人みてーなヤツが住んでっかもしん

ねえし」

「冗談半分でジャミルは言っているが、まあ無きにしても非ずってとこかな。」

「つてことはー、また3人と2人に分かれて行動する訳だね！」  
とエルが言う。

「そこで……じゃーん！ くじ引き作っちゃいました〜！」  
ルネさつきから何やってんのかと思っただらそれ作ってたのか！  
ルネの手には5本のクシみたいなのが握られていた。  
どっから持って来たんだか。

「よし、俺引くぞ」

「あ、私もー！」

「僕はこれにしよう」

「俺アこれだ！」

「じゃああたしは残ったこれね」

……結果、エル&ジャミル&リードの班と、俺&ルネの班に分かれる事になった。

「おっ、あたしはアークとか〜」

「こにこしながら近寄ってきたが、

「……マジか」

俺は波乱な予感しかなかった。

「なによ〜その露骨に嫌そうな顔は〜」

おっと顔に出ていたようだ。

まあ、エルよりはマシか。

……またエルと2人になったらやり直しを希望するところだったな。

そんな感じで、俺達は東方面を探索する事となった。

「ふう、だいぶ歩いたね……」

と、リードは少々疲れ気味になって言う。

「行けども行けども、森しかねエな。つまねっつーのオ」

ジャミルもつまらなそうに呟く。

確かに、こんな景色ばかりでは飽きてしまうのも仕方ない。

「あつ！ 見て！ あそこに何か……」

エルは遠くに何かを発見し、手で太陽の光を遮りながら凝視する。

「ン？ なんだア？ なんも見えねエぞ？」

ジャミルも同様に目を凝らす、何も見えないようだ。

「エルは視力がいいんだよ。僕にも当然、何も見えない」

リードは生まれつき視力が悪いので眼鏡をかけている。

アークによると、おかげで余計に知的に見えるとか。

外した方がかつこいい、とエルに言われたこともあったが、そう

すると何も見えないのでそれは勘弁だと本人は言っていた。

「あれは……建物……かな？ 木が邪魔で……近くに言ってみない

とわかんないや」

とエルは凝視するのを止めて言った。

「建物オ？ 人がインのか？」

ジャミルは諦めず、今だエルの見ていた方を眼を細めて見ていた。

「うーんどうだろー。いくら目が良くっても、そこまで見えないよ」

さすがのエルにも限界はあるようで、困ったような笑顔を見せな

がら言った。

「とにかく、行ってみる価値はあるね。人がいるなら助けを求めよ

う。いかなかったら、何か使えるものを探す事も出来るし」

他の2人も同じことを考えていたようで、一行はその建物へと向

かった。

「これは……」

僕が見たそれは、間違いなく建物だった。

材質は石で、決して大きくはない、倉庫のように見えた。

出来上がってからかなりの年月が経っているようで、ツタが完全に絡まっている。

所々壁面が崩れているが、元々頑丈な建物なのか崩れそうな様子はない。

上の方に小さな窓がいくつかあったが、全て割れている。

入口は一つだが、扉は既に無くなっていた。

「倉庫、かな……？ 何か使えるものがあるかも知れない。入ってみよう」

利用できるものは最大限に利用しないと。

それが少しでも生き延びる術に繋がっていくはずだ……。

そう思いながら入口へ近づくと、入口の扉は無くなっていたのではなく破壊されていた様子だった。

「なアんだこりや、魔物がア？」

上下に真つ二つに切り裂かれていた。

巨大な爪でも立てられたのだろうか……。

「傷は……新しいね、割と最近できたものかもしれない」

ジャミルの言うとおり、魔物の仕業の可能性が高い。

この辺りは出沒しそうだし、別におかしくはないだろう。

「とにかく、入ってみようよー！」

テンション高めのエルがそう言ったので、僕達は中に入った。

中は太い柱が数本立っている他、特に目につくものは無かった。

「ンだよ、なんにもねエじゃねエか」

ジャミルがそう呟く。

……恐らく、放棄されて何年も経ってるのだろう。

中はほこり臭いだけで、何もなかった。



「きつと昔何かに使っていたんだろう。今は何も無いみたいだ。でも、寝床として使えるかもしれない」

屋根もあるし、雨を防ぐには十分なはずだ。

「ねー、ここ見て！ 隠し通路みたいになってる！！」

「なんだって!？」

「マジかッ!？」

僕はあわててエルの所に行く。

ジャミルも同様だ。

床のタイルの一部がどかさされていて、その下は階段で地下室へ行けるようになっていた。

「エル、よく気がついたね……」

僕はエルについて素直に感心した。

「うん、違うの。最初からこうなってたんだよ」

エルは首を振って否定する。

なんだ、せつかく感心したのに。

って言ってる場合じゃない。

「せつかくだ、行ってみようぜエ」

ジャミルの案に賛成し、僕達は地下室へ向かった。

そこで 信じられないものを見てしまった。

## 第26話「謎の殺害現場と、強敵の影」

前回のあらすじ……。

担当：ジャミル・ハワード

今回は俺、ジャミル・ハワードがあらすじを担当するぜエ。まず、俺らは意外とウマかったグロ魚を食い尽くし、ダリイ片付けを終わらせる。

と、アークから周囲を探検しようという案が出た。面白エ。

しかし、ルネがいつの間につたたくじ引きの結果で、エルとリードと俺というメンバーになりやがった。

アイツと一緒にやつ！

絶対杖でボコられるっつーの！

……まあそりゃアいいとして、

道中エルが建物を発見しやがったア。

なんてバケモノ見たいな視力の持ち主だよオイ……。

近づいてみると、……まア、建物だった。

中に入り、なんもないと思ったらエルの野郎が隠し通路を発見。

なんだなんだア？

大活躍じゃねエかコイツ！

で、俺達は隠し通路へと進むのだったが……。

謎の建物：リード視点

僕達は階段を下り、地下室に入る。

そこにあつた部屋は 赤く染まっていた。

「 なッ! 」

いたるところに赤い液体が飛び散っていた。  
血だ。

それは狭い部屋の中に充満している鉄臭い独特の臭いが証明していた。

「 な……なに……これ……? 」

「 ひっでエな…… 」

エルとジャミルは目を見開いてその場に立ち尽くしている。

地下室は広くはない。

無機質な壁と、オフィスギルドで使いそうなデスク、その上に散らばる本。

天井には小さなランプがいくつか灯されていて、テーブルの上には食べかけの食事が残されていて、一部はそのまま床に散乱している。

つい先刻まで「日常」が存在していたようだった。

それじゃあ、この血の主は……。

「 ん……、オイ! 誰かいんぞ! あそこだ! 」

ジャミルは部屋の奥の方に誰かが横たわっているのを発見し、駆け寄る。

僕もその後を追う。

「 ツ……この傷ア…… 」

そこにいたのは、初老の男。

だが、仰向けに壁にもたれ掛り、全身をスタスタに斬り裂かれていた。

「 どいて! ……だめだ、もう、死んでるよ 」

僕は首に手を当てて血管が動いているか確かめたが、もう駄目のようだった。

いや、出血の量からして助からない。

だがそれでも、微かな希望にかけて確かめたかった。

……無駄だったけどな。

「チクシヨウ、こりゃひでエ殺し方だぜ……」  
ジャミルも悔しそうに言う。

「血痕が生乾きだ……まだ殺されてから、半日も経ってないだろう……」

騎士団は、街の治安を護る。

その際こう言った知識も必要になってくる。

なので、見習いとはいえそういう予備知識も僕達は備えている。

「魔物にやられたのか……？」 『領域』も無い、こんなところに住んでっからだ……。そういや、入り口が破壊されてたっけなア。それもコイツを殺つたのと同じヤツって訳か……」

見た感じ、ここには生活出来そうな物が一式揃っていて、広さもある。

ここで暮らしていたというのはほぼ間違いないだろう。

何故こんな辺境の島で暮らしていたのかは謎だけど。

「違うよ。……彼から……高濃度の魔素を感じる……」

エルは目を閉じて”彼”に手をかざしている。

エルは昔から魔素を感じやすいめずらしい体質で、こうして手をかざすことでより感じ取れるのだそうだ。

「ああ？ それと殺つたのが魔物じゃないってのと何が関係あんだア？」

そうか、ジャミルは騎士団関係者じゃないし、知らないのも無理は無いな。

「魔法で攻撃すると、被攻撃対象……つまり”彼”にも、微量の付加属性に応じた魔素が残る」

仕方ないので僕が説明しよう。

「へエ。そうなのか……」

この辺のことは、学校でも習わないから知らないのも無理は無い。もっとも、彼は学校へは通わなかったようだけど。

「魔素ってというのは、エネルギーのちっちゃい粒の事ね！。それ自

体に属性は無いけど、元素を合体させる事で属性が生まれるんだよ  
ー  
エルも解説に参加する。

頭の悪い彼には、エルみたいな碎いた表現の方が分りやすいかも  
しれない。

「理解は出来るけどよオ、なんかめんどくせエ話だなア……………」  
「まずい、集中力を切らしそうだ。」

「話を戻すけど、強力な魔法ほど、より高濃度の魔素が残りやすい  
んだ」

強力な魔法……………。

僕は疾風の翼船で出会った敵『盗賊殺し』のエイリアス・ラクシ  
リアの放った氷の魔法『ブリザードレイン』を思い出す。

あの複雑な詠唱と魔方陣はかなり上級の魔法だと思う。

「なるほどオ、つまりコイツは、強力な魔法で殺られたってワケだ  
ア」

「その通り。次に、魔法は古代文明によって作られた兵器の一種で  
ラスタード  
ある事は知っているね？」

それは一般常識なので、ジャミルでも知ってるだろう。

「ああ。分類上は確か……………魔法詠唱兵器ファストレイズってんだろ？」

「そう。術式を詠唱鍵文の元に組み上げ、魔方陣を構成し、体内の  
魔素と生み出した元素を組み合わせて自然法則を無視した現象を引  
き起こす兵器だね。そう考えると、魔物が放ってくる炎や氷は、魔  
法には該当しないんだ」

「そオなのか……………ってことは！」

ジャミルでもここまで言えば分かったらしい。

「コイツに魔素が残ってるってことは……………殺つたのは、人間ってこ  
とかア！」

「しかも……………相当な使い手だよ。属性は雷、使つたのは中級魔法だ  
けど、的確に急所以外を狙ったあとで殺されてる」

エルは死体を調べ終わりそう言った。

「すげエ。見ただけでそんなに分かんのかよ……」

ジャミルは素直に感心していた。

「私だって帝国騎士団の1員なんだからね！……見習いだけど」と前半は威張っておきながら後半で沈むエル。

「とにかく、重要な事は、まだその犯人がこの近くに潜んでる可能性があるって事だ！」

これは……もしかしたらまた厄介な事に足をつっこんだのかも知れない、と僕は思っていた。

「ケツ！　んな奴、このジジイの代わりに俺がぶっ殺してやるぜ！」

ジャミルはやる気……いや、殺る気満々で二挺のダブルバレットを構える。

「無理だよジャミル。犯人……この前のエイリアスと同等……うん、それ以上かもしれない」

エルは考えながら言う。

「ンだよ。やってみねエとわかんねエだろうが！」

はあ……。

彼はどうしてこう血の気が多いんだろうか……。

## 第27話「イベントのオーダーミス」

前回のあらすじ……。

担当：ジャミル・ハワード

はいはい今回も俺、ジャミル・ハワードがあらすじを担当するぜい。廃屋の地下室を発見し、向かった俺ら。

そこで見た物は、ジジイの死体だった。

エルによれば、コイツを殺ったのは魔物じゃなく人間らしい。

それも相当の腕を持つヤローってワケだ。

なんか面白くなって来やがったぜエ！

「せーんろはつづくーよーどーこまでもー」

俺とルネは現在町、村、または人を探して森の中を彷徨っていた。

「あーるーこーあーるーこー、わたしはーげんきー」

この島は中心部へ行くほど高地になっているのか、軽い斜面を登っていく。

探索から一時間ちよい。

まだ人気は確認できていない。

「せんのかーぜーにー、せんのかーぜになーーってー」

「統一しろよっ！ー！！」

……今まで黙ってたがこれはスルー出来ない！

「なんで途中から歌詞バラバラなんだよ！ 全部ミックスすんな！

しかも最後の関係ないし！」

と俺は大声で歌う、ルネに向かって言う。

「だって途中までしか分かんないんだもん！」

歌えて楽しいのか、満足げな表情で答える。

「だったら歌うな！」

速攻切り返す。

「なんでよ〜！ 別にアークには迷惑かけてないじゃん」

今度は不満げに返す。

「かかってんだよ！ お前の歌聞いとると耳が腐る」

「なんですと〜！」

そう……。

今発覚したがこいつ究極の音痴だった……。

こいつの歌には、もう音程という概念は存在しない。

大声で叫んでるだけだ。

「音痴過ぎるんだよっ！！ お前、喉おかしいんじゃないのか!?!」

「うわ〜、ひどい！ 最低！」

「最低なのはお前の歌だ！」

「あーるーこー、あーるーこー」

「言ってるそばから歌うな！」

「え〜、ヤダ。つままないじゃん」

「元々探索してるだけだろ！」

「それを面白くするのがあたしの仕事よ！」

「芸人か！ それに面白いのお前だけじゃん！」

「文句ある？」

「あるよっ！」

「却下」

「なんでっ！」

「うるさいから」

「それはお前だろうがああー！！！！」

「アッハッハッハッハ！ なにそれ面白い！！！」



「……はあ……なんか、倍疲れるんだが……」

俺とルネはこんな阿保なやりとりを繰り返して森を探索していた。見える景色は木、木、木、木木木……木しかねええよおおー

！……！

うんそうだ。

はつきり言っつたらん。

うむう。

何かビックイイベントでも発生しないものか。

と思っていると、前方から草むらをかき分けて“何か”がやってきた。

お？ さっそくイベントか？

俺達は魔物かと思ひ、咄嗟に無言で身構えた。

……今はまだ、草や木の陰になつて分からない。

近づいてくるにつれ、それは1人の人間だと分かった。

でも、山賊とかの危険もあるので構えはとかない。

「……クク……奇遇だな」

男の声がした。

「……へえ。オマエこんなトコロにいたのか」

この声には聞き覚えがあった。

その声と記憶が一致し、寒気がした。

こいつはもしか……。

「はっ……ご丁寧に“例の腕輪”までちゃんと装備してらァ」

いや、もしかしなくてもあいつだな……。

姿が完全に現れた。

真っ金金の短髪で、真っ赤な瞳に迷彩色のコート。

両手には3本のクロー、そして腕には大量の腕輪。

「でもザアンネン、ここで会ったが運のツキ。その地味な腕輪、渡して貰おうか」

この前、元俺の家で会った、俺を殺そうとしてきた奴じゃねえか  
！……！

「え……？ アーク、誰？ 知り合い？」

ルネもクナイを取り出して構えながら俺に尋ねる。

「知るか。前俺を殺そうとしたただの通り魔だよ。ホントついてねえ……」

あんどきはハリスがたまたまいて助かったけど、今は俺とルネしかいねえ！！

もうさあ、オーラからして俺の敵う相手じゃないって分かるよね？

俺はビツクイベントを希望したが、バットイベントを望んだ覚えはない。

くそ、注文が違うぞ！

……じゃなくてマジメにやばい。

「という訳で逃げるぞルネうおおおおお！！！」

俺は踵を帰して一目散にダッシュ！

「ちよ、アーク！？」

正直、こんなアブナイ奴と関わってられるか！！

バットイベントどころかバットエンド確定だコノヤロー！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3802w/>

---

永遠の時の中で

2011年10月19日02時05分発行